宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第141集

登り口（のぼくち）第1遺跡
Noborikuti 1 Site

登り口（のぼくち）第2遺跡
Noborikuti 2 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書38

2007

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財発掘調査を平成11年度から実施しております。本書はその中の２遺跡についての発掘調査報告書です。

登り口第１遺跡は、尾鈴山系より派生するなだらかな丘陵の端部に立地する遺跡です。後期旧石器時代の剥片尖頭器・細石刃、縄文時代草創期の土器、縄文時代早期の炉穴９基と土器・石鏃・スクレイパーが確認され、該期の生活のあり方を知る上で貴重な情報を含んでいます。

また、南西に隣接する登り口第２遺跡では、古墳時代中期の竪穴住居跡が検出されたほか、縄文時代早期の押型文土器や石器、古墳時代中期の小型丸底壺や高坏、中世の陶磁器などが出土し、周辺の該期集落を考える上で重要な資料となると思われます。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけではなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成19年１月

宮崎県埋蔵文化財センター

所　長　清　野　　勉

例　　言

1　本書は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、平成17年度に実施した登り口第１遺跡・登り口第２遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、日本道路公団から委託を受けて宮崎県教育委員会が実施した。

　なお、日本道路公団は平成17年10月１日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書では日本道路公団として記載する。

3　現地での実測及び写真等の記録は、登り口第１遺跡については白地浩・児玉幹が、登り口第２遺跡は小川太志･岡田諭が行ったほか、発掘作業員が補助した。出土遺物写真は、登り口第１遺跡は白地が撮影し、登り口第２遺跡は白地の協力を得て小川が撮影した。

4　本書使用の遺物実測図の作成は、登り口第１遺跡については白地･重留康宏が、登り口第２遺跡は小川･岡田が行ったほか整理作業員が補助した。

5　測量・空中写真は次の機関に委託した。

（登り口第１遺跡）

基準点設置　　：㈲タイユー測量設計

空中写真撮影　　：㈱九州航空株式会社

（登り口第２遺跡）

基準点設置　　：㈲エイユー技建

空中写真撮影　　：㈱九州航空株式会社

6　本書で使用した周辺遺跡分布図（第１図）は、国土地理院発行の25,000分の１地形図をもとに、遺跡周辺地形図（第２図）は、西日本高速道路株式会社九州支社宮崎工事事務所提供の1,000分の１測量図をもとに作成した。

7　本書で使用した方位は座標北（G.N.）を基本とするが､遺構実測図などの一部に磁北（M.N.）を用いた。標高は海抜絶対高である。なお、国土座標は旧平面直角座標系Ⅱに基づく。

8　土層断面・石材・土器の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。

9　第Ⅱ章では遺構の略号は使用していないが、図面や遺物の注記には下記の略号を用いている。

ＳＡ＝竪穴住居跡　　ＳＣ＝土坑　　ＳＥ＝溝状遺構　　ＳＨ＝小穴　　ＳＰ＝炉穴

第Ⅲ章で使用した略号は次のとおりである。

ＳＡ＝竪穴住居跡　　Ｐ＝主柱穴　　ＳＣ＝土坑　　ＳＥ＝溝状遺構

10　挿図の縮尺は次のとおりとする。

石器（登り口第１遺跡 1/2、1/4、登り口第２遺跡 1/2、1/4）

土器（登り口第１遺跡 1/3、登り口第２遺跡 1/3、1/4）　鉄器 1/1　炉穴 1/20　竪穴住居跡 1/60

11　東九州自動車道関連遺跡の発掘調査では、基本的に認められるテフラやローム層、黒色土帯については共通の略称を用いている。ローム層は、上からＭＬ１・ＭＬ２…、黒色土帯はＭＢ１・ＭＢ２…とする。

12　本書の執筆・編集は、第Ⅰ章を白地・小川、第Ⅱ章を白地、第Ⅲ章を小川・岡田が担当した。

13　出土遺物その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに…… 1
　第１節　発掘調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の組織…… 1
　第３節　遺跡周辺の環境…… 2

第Ⅱ章　登り口第１遺跡の調査…… 4
　第１節　確認調査の概要…… 4
　第２節　発掘調査・整理作業の流れ…… 5
　第３節　層　序…… 5
　第４節　後期旧石器時代の遺物…… 7
　　１　後期旧石器時代Ⅰ期（ＡＴ下位）…… 7
　　⑴　概　要…… 7
　　⑵　遺　物…… 7
　　２　後期旧石器時代Ⅱ期（ＡＴ上位）…… 10
　　⑴　概　要…… 10
　　⑵　遺　物…… 10
　第５節　縄文時代草創期・早期の遺構と遺物…… 16
　　１　概　要…… 16
　　２　遺　構…… 16
　　３　遺物①　－土器－…… 21
　　⑴　縄文時代草創期後半…… 21
　　⑵　縄文時代早期…… 21
　　４　遺物②　－石器－…… 24
　第６節　時期不明の遺構と遺物…… 26
　第７節　まとめ…… 27
　　１　後期旧石器時代Ⅰ期（ＡＴ下位）について…… 27
　　２　後期旧石器時代Ⅱ期（ＡＴ上位）について…… 27
　　３　縄文時代草創期について…… 27
　　４　縄文時代早期について…… 27
　　⑴　炉穴…… 27
　　⑵　土器…… 27
　　⑶　石器…… 27

第Ⅲ章　登り口第２遺跡の調査…… 33
　第１節　確認調査の概要…… 33
　第２節　発掘調査・整理作業の流れ…… 34
　第３節　層　序…… 34
　第４節　縄文時代早期の遺物…… 37
　　１　土　器…… 37
　　２　石　器…… 37

第５節　古墳時代の遺構と遺物…… 38
１　１号竪穴住居跡（SA1）…… 39
２　SA1以外から出土した遺物…… 42
第６節　その他の時期の遺構と遺物…… 42
１　遺　構…… 42
２　遺　物…… 43
第７節　まとめ…… 44
１　縄文時代早期…… 44
２　古墳時代…… 44
３　中世～近世…… 44

挿 図 目 次

第１図　登り口第１遺跡・登り口第２遺跡周辺遺跡分布図（Ｓ＝1/50,000）…… 3
～登り口第１遺跡～
第２図　登り口第１遺跡の立地と周辺地形（Ｓ＝1/2,000）…… 4
第３図　土層実測ポイント配置図（Ｓ＝1/800）…… 6
第４図　土層断面図（Ｓ＝1/100）…… 6
第５図　後期旧石器時代Ⅰ期遺物分布図（Ｓ＝1/1200）…… 8
第６図　後期旧石器時代Ⅰ期出土遺物実測図①（Ｓ＝1/2）…… 8
第７図　後期旧石器時代Ⅰ期出土遺物実測図②（Ｓ＝1/2）…… 9
第８図　後期旧石器時代Ⅱ期遺物分布図（Ｓ＝1/1,000）…… 11
第９図　後期旧石器時代Ⅱ期出土遺物実測図①（Ｓ＝1/2）…… 12
第10図　後期旧石器時代Ⅱ期出土遺物実測図②（Ｓ＝1/2）…… 13
第11図　後期旧石器時代Ⅱ期出土遺物実測図③（Ｓ＝1/2）…… 14
第12図　縄文時代早期遺構分布図（Ｓ＝1/400）…… 16
第13図　縄文時代早期の炉穴・土坑実測図①（Ｓ＝1/40）…… 17
第14図　縄文時代早期の炉穴・土坑実測図②（Ｓ＝1/40）…… 18
第15図　遺構出土の遺物実測図（Ｓ＝1/2，1/3）…… 18
第16図　縄文土器実測図①（Ｓ＝1/3）…… 22
第17図　縄文土器実測図②（Ｓ＝1/3）…… 23
第18図　縄文時代早期石器分布図（Ｓ＝1/800）…… 24
第19図　縄文時代早期石器実測図（Ｓ＝1/2）…… 25
第20図　時期不明の土坑・遺物実測図（Ｓ＝1/40，1/4）…… 26
～登り口第２遺跡～
第21図　遺跡周辺図及びトレンチ配置図（Ｓ＝1/2,000）…… 33
第22図　第６トレンチ土層断面図（Ｓ＝1/60）…… 35
第23図　南区西側壁土層断面図（Ｓ＝1/60）…… 35
第24図　南区北側壁土層断面図（Ｓ＝1/60）…… 36
第25図　縄文時代早期遺物実測図（Ｓ＝1/3，1/2）…… 37
第26図　古墳時代遺構分布図（Ｓ＝1/200）…… 38
第27図　１号竪穴住居跡（SA1）実測図（Ｓ＝1/60）…… 39

第28図　１号竪穴住居跡（SA1）出土遺物実測図（Ｓ＝1/4，1/1）…… 41
第29図　１号竪穴住居跡（SA1）以外から出土した遺物実測図（Ｓ＝1/4）…… 42
第30図　その他の時期の遺構分布図（Ｓ＝1/200）…… 43
第31図　その他の時期及び時期不明の遺物実測図（Ｓ＝1/4，1/1，1/2）…… 44

表　目　次

～登り口第１遺跡～
第１表　後期旧石器時代Ⅰ期石器石材分類表…… 9
第２表　後期旧石器時代Ⅰ期石器石材組成表…… 10
第３表　後期旧石器時代Ⅰ期石器計測表（実測遺物のみ）…… 10
第４表　後期旧石器時代Ⅱ期石器石材分類表…… 14
第５表　後期旧石器時代Ⅱ期石器石材組成表…… 15
第６表　後期旧石器時代Ⅱ期石器計測表（実測遺物のみ）…… 15
第７表　遺構出土の遺物観察表…… 20
第８表　縄文時代早期の炉穴・土坑観察表…… 20
第９表　縄文土器観察表…… 23
第10表　縄文時代早期石器石材分類表…… 25
第11表　縄文時代早期石器石材組成表…… 25
第12表　縄文時代早期石器計測表（実測遺物のみ）…… 26
第13表　時期不明の土坑・遺物観察表…… 26
～登り口第２遺跡～
第14表　土層観察表…… 36
第15表　１号竪穴住居跡（SA1）土層観察表…… 40
第16表　縄文時代早期土器観察表…… 46
第17表　縄文時代早期石器観察表…… 46
第18表　SA1出土土器観察表…… 46
第19表　SA1出土鉄器観察表…… 47
第20表　SA1出土石器観察表…… 47
第21表　SA1以外から出土した土器観察表…… 47
第22表　中世～近世土器観察表…… 47
第23表　中世～近世陶磁器観察表…… 47
第24表　銭貨観察表　…… 47
第25表　時期不明土器観察表…… 47

図 版 目 次

～登り口第１遺跡～
図版１　　登り口第１遺跡（上空南方向から展望）…… 29
　　登り口第１遺跡（遺跡全景）
図版２　　SP2・SP3完掘状況（南から）…… 30

SP1完掘状況（南から）
SP4・SP5・SP7・SP8完掘状況（上空から）
SP6完掘状況（上空から）
SP4・SP5・SP7・SP8完掘状況（北東から）
図版３　SP9完掘状況（東から）…… 31
SC1完掘状況（南東から）
SC2完掘状況（西から）
SC3・SC4完掘状況（東から）
SC5完掘状況（西から）
遺構出土の遺物
図版４　後期旧石器時代Ⅰ期出土遺物：石器 …… 32
後期旧石器時代Ⅱ期出土遺物：石器
縄文時代出土遺物：縄文土器（１）
縄文時代出土遺物：縄文土器（２）
縄文時代出土遺物：石器
時期不明の出土遺物
～登り口第２遺跡～
図版５　登り口第２遺跡遠景（西から日向灘を望む）…… 49
南区全景
図版６　SA1貼床面検出状況（北西から）…… 50
SA1完掘状況
作業風景（SA1埋土掘削）
遺物出土状況（SA1壁帯溝から出土した小型丸底壷）
SC1・SC2検出状況（南東から）
SC1・SC2半截（北東から）
図版７　縄文時代早期土器…… 51
縄文時代早期石器
SA1出土甕（１）
SA1出土甕（２）
SA1出土小型丸底壺
SA1出土高坏
図版８　SA1出土高坏…… 52
SA1出土壺
SA1出土台石
Ⅳ層出土小型丸底壺
高坏
中世～近世陶磁器

第Ⅰ章　はじめに

第１節　発掘調査に至る経緯

東九州自動車道（都農～西都間）は、平成元年２月に基本計画がなされ、平成９年３月には整備計画路線となった。さらに、平成９年12月に建設大臣（当時）から日本道路公団へ施行命令が出され、公団は翌年の２月から事業に着手している。それに伴い、宮崎県教育委員会が、平成10年度に路線上の遺跡分布調査を行い、計79箇所（896,000㎡）におよぶ遺跡の存在が確認された。

そこで、県文化課と公団との協議の結果、工事施工によって影響を受ける部分については、工事着手前に発掘調査を実施することになった。発掘調査は平成11年度から、日本道路公団の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターが行っている。

登り口第１遺跡では、平成16年度（平成17年２月14日～３月25日）に確認調査が実施された。調査対象地は、開削・造成されて地形が大きく改変され、段状を呈する畑地になっている。表土直下が基盤となる箇所や客土が厚く盛られた箇所もみられたが、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）層下位で縄文時代早期の遺物が出土し、姶良Tn（AT）層の上下位層からも少量ながら剥片が出土している。このため、遺構や遺物が分布すると想定される1,130㎡を対象に発掘調査が実施されることとなった。なお、当初の本調査面積は1,720㎡であったが、確認調査後に日本道路公団がコスト縮減による片側１車線のみの切り土工事に変更したため調査区西側590㎡が調査除外となり、1,130㎡となっている。本調査は平成17年７月１日に着手し、同年９月２日に終了している。調査の結果、後期旧石器時代の石器や縄文時代早期の炉穴・土器・石器が確認された。遺物の整理作業は平成17年10月より行った。

登り口第２遺跡では、平成16年度（平成17年２月14日～３月25日）に確認調査が実施され、縄文時代早期、古墳時代中期、中世～近世の遺物が出土した。これを受け、遺構・遺物が分布すると思われる3,800㎡を対象に発掘調査を実施することとなった。本調査は平成17年７月14日に着手し、同年９月２日に終了している。調査の結果、古墳時代中期の竪穴住居跡１軒が検出された。遺物の整理作業は平成17年11月～平成18年８月にかけて行った。

第２節　調査の組織

調査体制は次のとおりである。

調査主体　　宮崎県教育委員会
　　宮崎県埋蔵文化財センター

所長
　宮園　淳一（平成16～17年度）
　清野　　勉（平成18年度）

副所長兼総務課長
　大薗　和博（平成16年度）

副所長兼調査第二課長
　岩永　哲夫（平成16～18年度）

副所長
　加藤　悟郎（平成18年度）

総務課長
　宮越　　尊（平成17～18年度）

主幹兼総務係長
　石川　恵史（平成15～17年度）

主幹兼総務担当リーダー
　髙山　正信（平成18年度）

調査第一課長
　髙山　富雄（平成16～18年度）

調査第一係長
　谷口　武範（平成16年度）

主幹兼調査第一係長
　長津　宗重（平成17年度）

主幹兼調査第一担当リーダー
　長津　宗重（平成18年度）

主幹兼調査第二係長
　長津　宗重（平成16年度）
　菅付　和樹（平成17年度）

主幹兼調査第二担当リーダー
　菅付　和樹（平成18年度）

整理作業担当
　主　査　　小山　　博（平成17年度）
　主任主事　藤木　　聡（平成18年度）

調査担当

（登り口第１遺跡）

主　査　　吉本　正典（平成16年度）

主　査　　白地　　浩（平成17年度）

調査員　　児玉　　幹（平成17年度）

（登り口第２遺跡）

主　査　　吉本　正典（平成16年度）

主　査　　小川　太志（平成17年度）

主　事　　岡田　　諭（平成17年度）

報告書編集担当

（登り口第１遺跡）

主　査　　白地　　浩（平成17～18年度）

（登り口第２遺跡）

主　査　　小川　太志（平成17～18年度）

主　事　　岡田　　諭（平成17～18年度）

東九州自動車道発掘調査指導委員

泉　拓良［京都大学］小畑弘己［熊本大学］

田崎博之［愛媛大学］

広瀬和雄［国立歴史民俗博物館］

本田道輝［鹿児島大学］柳沢一男［宮崎大学］

第３節　遺跡周辺の環境

登り口第１遺跡及び登り口第２遺跡は宮崎県児湯郡川南町大字川南字宮田に所在する（第１図）。川南町は、宮崎県のほぼ中央東部の一角を占め、東には日向灘が広がり、北は都農町、西は木城町、南は高鍋町に接している。町の北西部に位置する尾鈴山系から丘陵が派生し、その東麓から海岸にかけて広がる複数の段丘面が町域の大半を占めている。また、町の中心を流れる平田川河口付近に沖積地が僅かに見られる。

登り口第１遺跡は尾鈴山系の上面木山（標高約880m）より派生する丘陵裾部斜面上に立地し、標高は約117mを測る（第２図）。登り口第２遺跡も、尾鈴山系より派生する丘陵裾部に立地する。登り口第１遺跡からは約300m南南西側に位置する。調査区は西から東に傾斜する緩斜面で、東側には平田川の支流が流れる。

川南町の地形は、山地とその東麓から海岸に展開する平坦な段丘面の二つに区分され、各時代の遺跡は段丘上に多く分布する。

後期旧石器時代の調査例は、後牟田遺跡において焼礫群や石皿、敲石等が出土している。また、大野寅男氏の踏査や川南町の分布調査により、番野地Ｃ遺跡・谷ノ口遺跡・卒手遺跡などの遺跡が確認されている。近年の調査では、市納上第２遺跡・中ノ迫第１遺跡・中ノ迫第２遺跡・中ノ迫第３遺跡・前ノ田村上第２遺跡・国光原遺跡で、後期旧石器時代の遺構・遺物が確認されている。

縄文時代早期の調査例は後牟田遺跡・霧島遺跡・上ノ原遺跡であったが、近年の調査により八幡第２遺跡・前ノ田村上第２遺跡・尾花Ａ遺跡・中ノ迫第２遺跡・中ノ迫第３遺跡・国光原遺跡で遺構・遺物が確認されている。

弥生時代に入ると、前期の遺跡は確認されていないが、中期･後期～終末期の集落遺跡の調査は多い。近年の調査においても、八幡第２遺跡･大内原遺跡･前ノ田村上第２遺跡・尾花Ａ遺跡で中期～終末期の遺構・遺物が確認されている。

また、本遺跡の約2,500m東方に東平下遺跡の周溝墓が確認されている。古墳時代では、南方向６㎞に位置する国史跡の川南古墳群51～54号や県史跡の川南村古墳３～10号の存在が知られている。

歴史時代の遺跡は、古代においては下垂門の奈良時代後期の蔵骨器を伴う火葬墓、近世においては1578年の高城・耳川の戦いの大友軍の戦死者を弔うために島津方の武将山田新介が建立した宗麟原供養塔が著名である。

【引用・参考文献】

宮崎県教育委員会　1995『東九州自動車道関連遺跡詳細分布調査報告書２』

川南町教育委員会　1983『川南町の埋蔵文化財遺跡詳細分布調査報告書』

1 登り口第１遺跡	**2 登り口第２遺跡**	3 朝草原遺跡	4 朝倉遺跡	5 立野第５遺跡
6 立野第２遺跡	7 八幡第２遺跡	8 銀座第１遺跡	9 旭ケ丘遺跡	10 谷ノ口遺跡
11 霧島遺跡	12 市納上第２遺跡	13 赤石・天神本遺跡	14 天神本第２遺跡	15 大内原遺跡
16 中ノ迫第１遺跡	17 中ノ迫第２遺跡	18 中ノ迫第３遺跡	19 白鬚遺跡	20 中ノ迫Ａ遺跡
21 松ケ迫遺跡	22 野稲尾遺跡	23 卒手遺跡	24 後牟田遺跡	25 前ノ田村上第１遺跡
26 前ノ田村上第２遺跡	27 赤坂遺跡	28 国光原遺跡	29 上ノ原遺跡	30 湯牟田遺跡
31 把言田遺跡	32 番野地Ｃ遺跡			

第１図　登り口第１遺跡・登り口第２遺跡周辺遺跡分布図（Ｓ＝1/50,000）

第Ⅱ章　登り口第１遺跡の調査

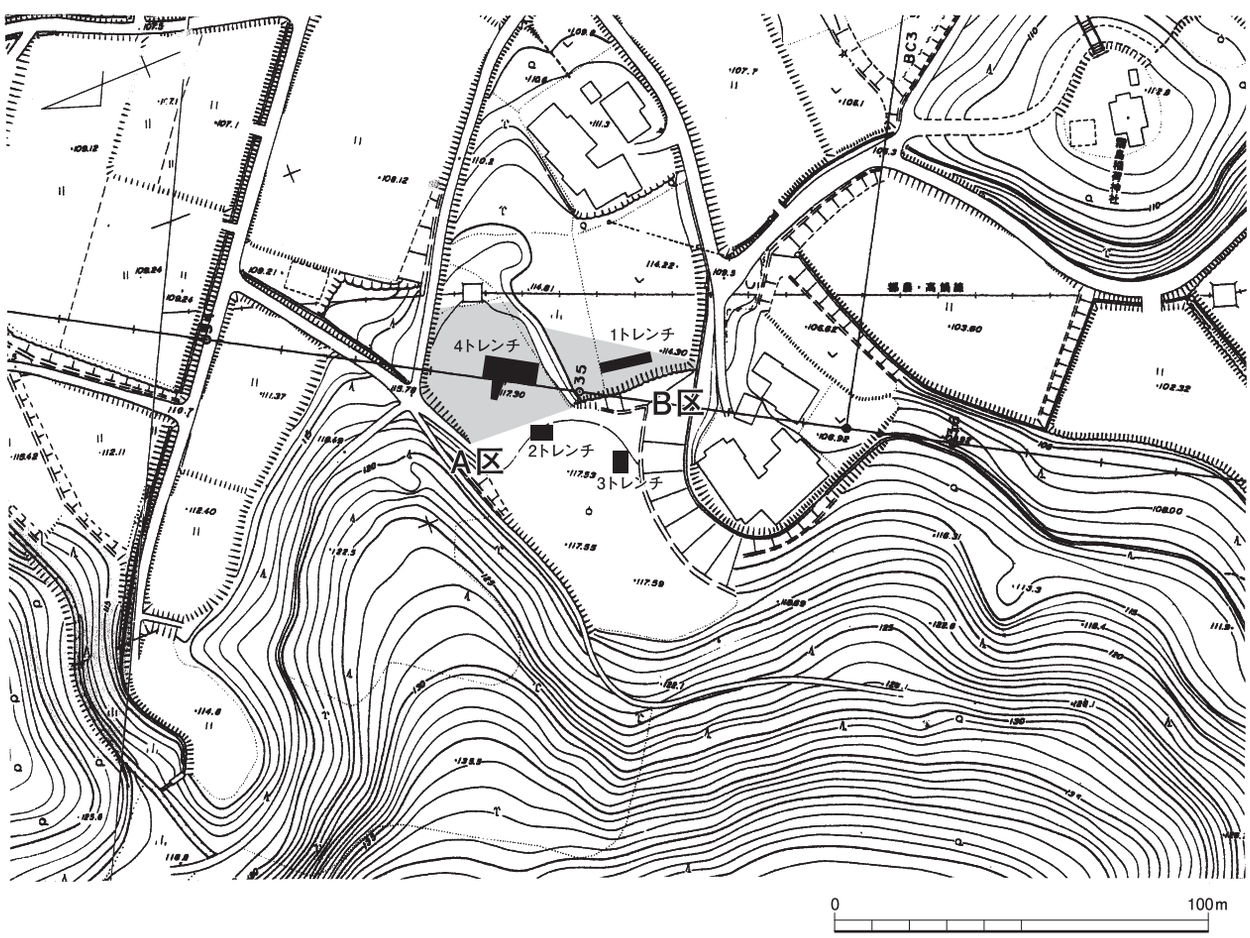
第１節　確認調査の概要

調査対象地は畑地であり、一部削平され、表土直下が基盤となる箇所がみられたが、縄文時代早期に相当するⅢ～Ⅴ層については遺物の密度が高く、本掘により成果が得られるものと判断された。姶良Tn（AT）層の上下位のⅥ層・Ⅸ層についても少量ながら剥片が出土した。

１トレンチは、先に述べた開削の影響を大きく受けている。南側（低位側）は客土が厚く、Ⅲ層以下の層が良好に残っている。Ⅲ層～Ⅳ層より剥片が出土している（第２図）。

２・３トレンチは、確認調査後に日本道路公団がコスト縮減による片側１車線のみの切り土工事に変更したため本調査から除外されたが、２トレンチからはⅢ～Ⅴ層より遺物が出土している。出土遺物は土器片やチャート、黒曜石の剥片などが認められる。土器片の中には条痕文土器（器面に斜位の条痕を施す）の比較的まとまる個体がある。３トレンチは谷を埋めるために１ｍをこえる客土が施されている。このため、下層の掘り下げは部分的にならざるを得なかったが、Ⅲ層より剥片が出土した。

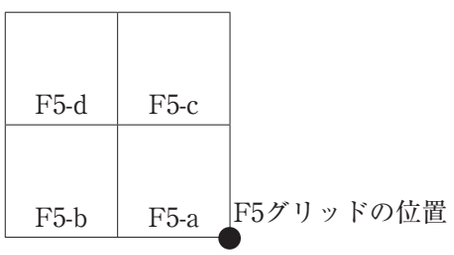
４トレンチでは、北側では表土下位が基盤礫層となる。一方、南側では鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）層はみられないものの、Ⅲ層以下は残存しており、Ⅲ層からは土器片や剥片などの遺物が出土している。また、姶良Tn（AT）層をはさむⅥ層及びⅨ層より剥片が各１点出土した。



第２図　登り口第１遺跡の立地と周辺地形（Ｓ＝1/2,000）

第２節　発掘調査・整理作業の流れ

調査対象地は北西から南東に向かって緩やかに下る斜面である。本調査では北側をＡ区（630㎡）、南側をＢ区（500㎡）の２つに分けて調査を行った。Ⅱ（鬼界アカホヤ火山灰）層下位のⅢ～Ⅴ層の遺物包含層（縄文時代草創期・早期）とⅧ（姶良Tn）層をはさむⅥ層及びⅨ層の掘り下げを行った。なお、Ⅱ層上面が露出した段階で国土座標に基づく杭の設置を行い、10ｍグリッドを組んだ。グリッド名は東よりＡ～Ｇ区、北より１～７区として、その組合せで表記することとした。なお、１グリッドにあたる10ｍ×10ｍの正方形を便宜上、正４分割し、下図のとおりのグリッド内名称を与えた。



遺構はⅣ～Ⅵ層より縄文時代早期の炉穴が９基検出された。単独の炉穴が４基、切り合っているものが２群（２基及び３基）確認された。プランが明瞭でなかったものは掘り下げて検出し、上部が削平されているものもあったことから検出された層に差がみられた。貝殻条痕文土器が埋土中から出土した炉穴もみられた。８基の主軸方向は等高線にほぼ垂直である。

遺物は後期旧石器時代では、Ⅵ層から剥片尖頭器・細石刃・剥片、Ⅸ層ではＡ区の東側でナイフ形石器・剥片尖頭器・スクレイパー・剥片が出土した。それ以外の場所での遺物の出土量は少ない。Ｂ区のⅨ層からは遺物は出土していない。縄文時代草創期のものは土器片が１点だけ出土している。縄文時代早期では、Ⅲ層から剥片・異形石器・土器片、Ⅳ層から石鏃・スクレイパー・剥片・土器片、Ⅴ層では石鏃・土器片が出土した。

遺物整理については、全工程について埋蔵文化財センター本館で行った。

第３節　層　序

基本層序は下記のとおりである。火山灰層のうち、肉眼で明瞭に確認できたのは、K-AhとATのみである（第４図）。また、新富・高鍋町内の基本層序に対応しない層がみられる。

Ⅰa層…表土・客土。

Ⅰb層…耕作土。鬼界アカホヤ・炭化物（径１㎜～1.5㎝）・赤褐色の粘土を含む。

Ⅱ層…鬼界アカホヤ（K-Ah）

Ⅲ層…黒褐色土(Hue10YR2/2)。しまりがややある。粘性がややある。湿り気がある。パミスを少量含む。東九州自動車道基本層序のＭＢ０に相当する。縄文時代早期の遺物を包含する。

Ⅳ層…暗褐色土(Hue10YR3/3)。非常によくしまり、固い。粘性はあまりない。東九州自動車道基本層序のＭＬ１に相当し、後期旧石器時代・縄文時代草創期・早期の遺物を包含する。

Ⅴ層…暗褐色土（10YR3/4)。粘性がある。押すと軽くへこむ。ネジリで削るとざらざらする。

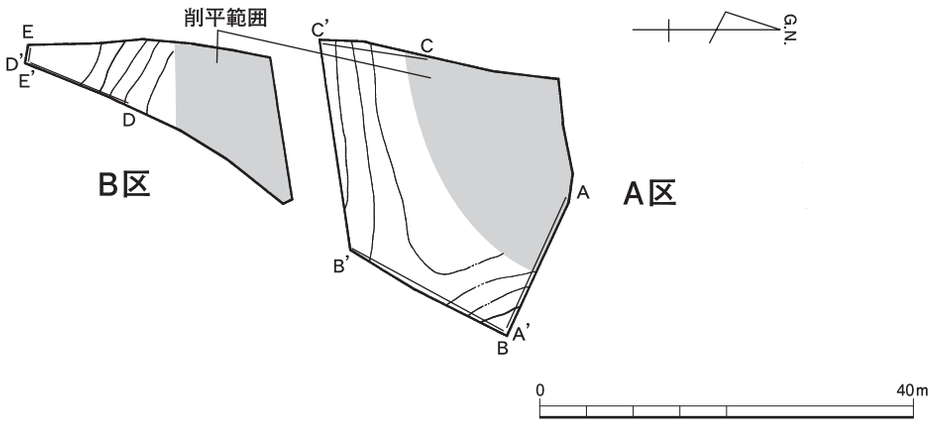
Ⅵ層…暗褐色土（Hue10YR3/3)。しまりがある。粘性がややある。湿り気がある。パミスを含む。後期旧石器時代の遺物を包含する。

Ⅶ層…暗褐色土（Hue10YR3/4)。しまりはATよりはある。粘性はない。風化したATブロックが混じる。ATと違い、パミスが多く含まれる。径１㎜以下の赤橙色の粒も少量含み、場所によっては多く含まれる。後期旧石器時代の遺物を包含する。

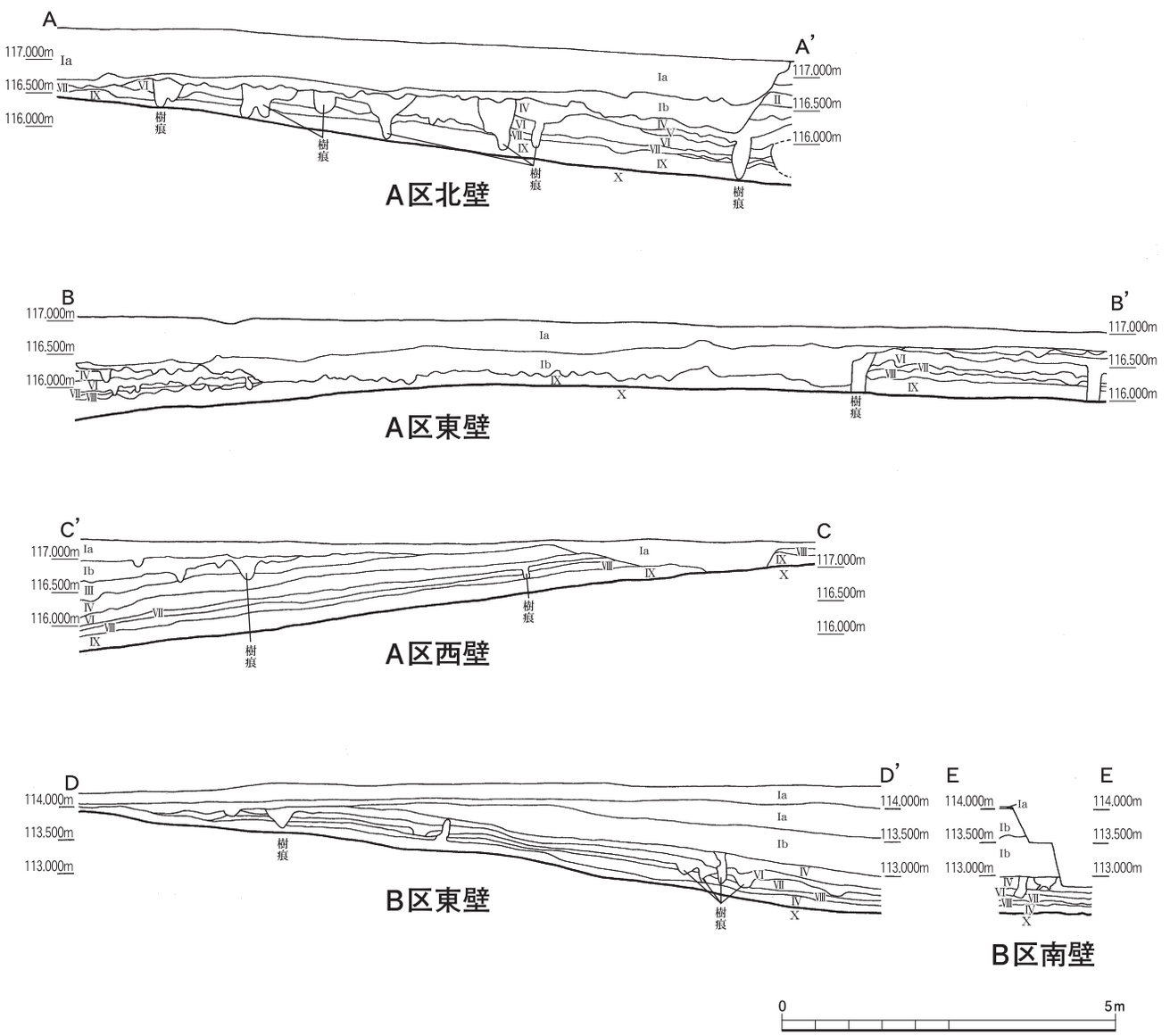
Ⅷ層…姶良Tn（AT）

Ⅸ層…褐色土（Hue7.5YR4/3)。固くしまり、粘性はあまりない。５㎜～１㎝の礫をまばらに含む。パミスをまばらに含む。後期旧石器時代の遺物を包含する。

Ⅹ層…赤褐色の粘土を含む礫層。径20㎝をこえる角礫も含む。



第３図　土層実測ポイント配置図（Ｓ＝1/800）



第４図　土層断面図（Ｓ＝1/100）

第４節　後期旧石器時代の遺物

姶良Tn火山灰下位のⅨ層を後期旧石器時代Ⅰ期、姶良Tn火山灰上位のⅣ～Ⅶ層を後期旧石器時代Ⅱ期として報告する。

１　後期旧石器時代Ⅰ期（AT下位）

⑴　概要

Ⅸ層を石器の出土が認められた箇所から順次広げる調査方法で行った結果、約300㎡から91点の石器が出土した。製品は流紋岩の削器１点、スクレイパー１点、ナイフ形石器２点が出土している。石器石材は、流紋岩・ホルンフェルスを中心に用いられている。これらの出土地点は削平の影響を受けていない箇所で、南西寄りにあたる（第５図）。出土範囲から考えて、調査区外南西側にも広がる可能性がある。遺構は検出されず、礫は尾鈴酸性岩類が調査区内で散漫にみられ、礫群と判断されるものは確認できなかった。なお、旧地形は西から東や南に向かって緩やかに下っている。

⑵　遺物

Ａ区では、削器１点、スクレイパー１点、ナイフ形石器２点が出土した（第１表）。いずれも流紋岩Ａ製である。なお、Ｂ区では遺物の出土は確認できなかった。

【削器】（第６図１）

１は縦長剥片が用いられ、素材は流紋岩Ａである。素材剥片の獲得後あるいは製品として持ち込まれた可能性が高い。使用中または製作中に折れが生じたと考えられる。

【スクレイパー】（第６図２）

２は縦長剥片が用いられ、素材は流紋岩Ａである。素材剥片の獲得後あるいは製品として持ち込まれ、最終的なブランティング加工程度が遺跡内で実施された可能性が高い。使用中または製作中に折れが生じたと考えられる。

【ナイフ形石器】（第６図３・４）

３は横長剥片が用いられ、素材は流紋岩Ａである。素材剥片の獲得後、あるいは製品として持ち込まれ、最終的なブランティング加工程度が遺跡内で実施された可能性が高い。

また、４は左側縁部に刃潰し対向調整されている。石材は流紋岩Ａである。使用中又は製作中に折れが生じたと考えられ、先端部も欠損している。

【その他の石器】（第６図５～９・第７図10～14）

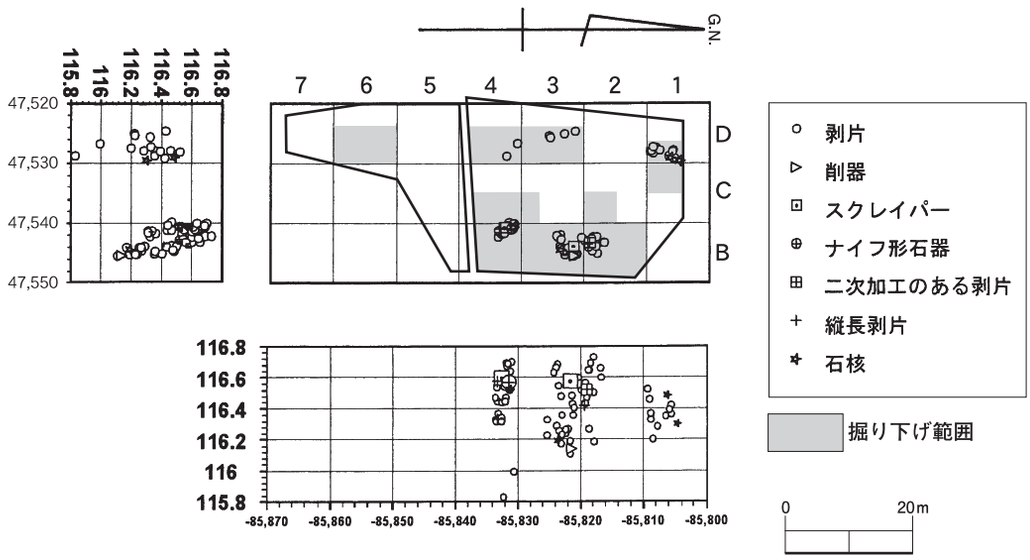
二次加工のある剥片５、剥片６・７・８・９・10、石核11・12・13・14が出土した。

二次加工のある剥片５は流紋岩Ａ製で礫面が残っている。右側縁に細かな二次加工が見られる。

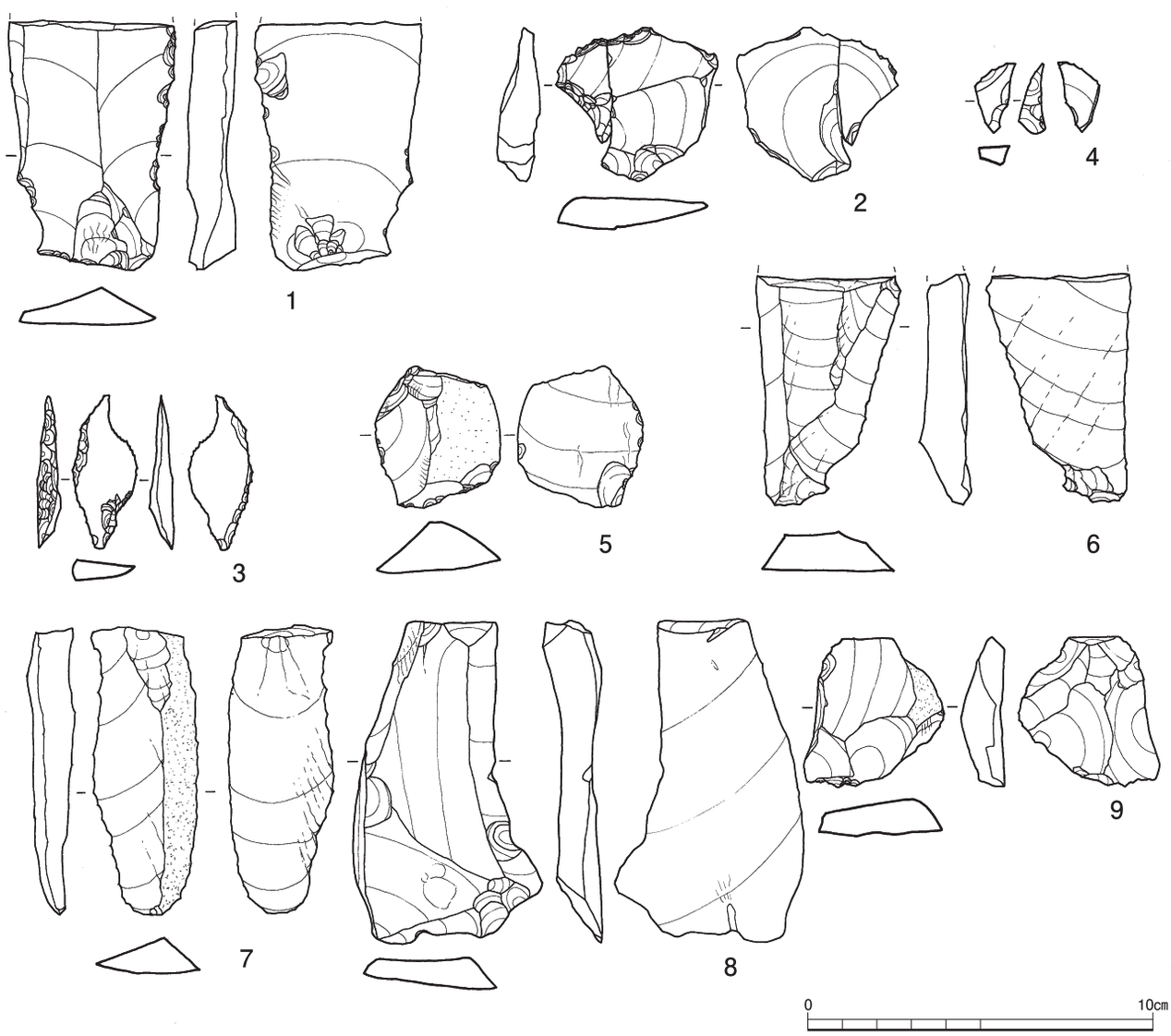
６・７・８は縦長剥片、９・10は幅広剥片である。６は流紋岩Ａ製で、基部側が大きく欠損している。７・８はホルンフェルスＣ製で、７は礫面が残っている。８は末広がりの縦長剥片で風化気味である。先端部は欠損している。９は流紋岩Ａ製で礫面が残っており、欠損したものと考えられる。10はホルンフェルスＢ製で、下部に礫面が残っている。

石核については、11は流紋岩Ａ製で打面非固定で、不定形の剥片を剥離している。12はチャートＡ製で打面非固定である。不定形の剥片を剥離し、礫面が残っている。13は流紋岩Ｄ製で礫面が残っている。小形の縦長剥片・横長剥片を剥離している。なお、同石材の石器は他には確認できなかった。14はホルンフェルスＢ製で風化気味。打面非固定で、不定形の剥片を剥離している。

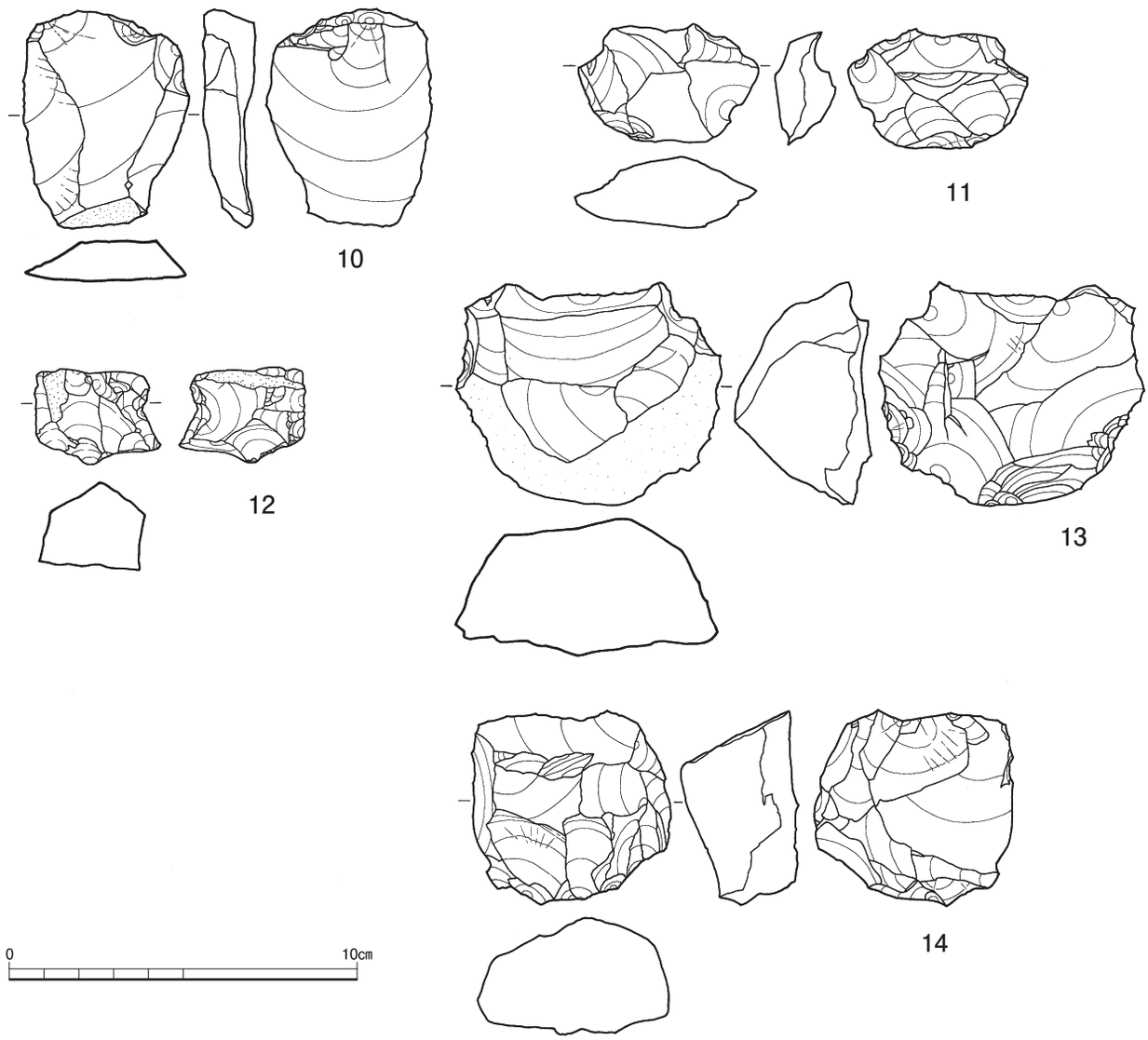
全体的な傾向として打面調整・作業面調整ともに少ないこと、母岩別にみても１点１母岩のものも少なくない。



第５図　後期旧石器時代Ⅰ期遺物分布図（Ｓ＝1/1,200）



第６図　後期旧石器時代Ⅰ期出土遺物実測図①（Ｓ＝1/2）



第７図　後期旧石器時代Ⅰ期出土遺物実測図②（Ｓ＝1/2）

石　材	石材の小分類	特徴（分類基準）	遺物番号	点　数	総重量（g）
ホルンフェルス	A	礫面は滑らか。カーブから察して円礫。剥離面はガザガザした灰黒色。	－	8	65.6
	B	風化著しく、触ると手に石粉が付着する。風化面は褐炭色で、濁った白色～うすい橙色の筋が入る。	10、14	24	590.5
	C	白色～黒い筋が入る。剥離面はややガザガザした灰色。礫面の状態は不明。	7、8	7	156.5
チャート	A	暗赤褐色。節理が顕著。黒い筋が見られる。礫面の状態は不明。	12	2	35.6
	B	灰色～暗灰色に黒い筋の入るもの。節理が顕著。礫面の状態は不明。薄い部分はにぶく透ける。	－	4	10.8
	C	礫面の状態は不明。灰白色にうすい黒の筋が入るもの。	－	1	2.5
	F	暗緑灰色で白い筋が入るもの。ガラス質に近く、剥離面にはひびが多く入っていて、ややでこぼこしている。礫面の状態は不明。	－	1	10.7
流紋岩	A	礫面は滑らか。爪痕のような傷が入る。カーブから察して円礫。剥離面は濡れたような黒緑色で、ぼんやりした白斑が入る場合がある。節理が顕著。	1、2、3、4、5、6、9、11	36	456.2
	C	カーブから察して亜円礫。礫面は滑らかで、径0.05㎜大の結晶の抜け落ちが所々にみられる。剥離面はくすんだ暗赤灰色で赤橙色の鉱物粒を含む。節理が顕著。	－	6	72.9
	D	１母岩につき１～２点の場合が多い、接合がない、細かな母岩分類は有効に働かないと判断されたものを一括したもの。	13	2	305.9
砂岩	A	目の細かい硬質なもの。	－	1	41.6

第１表　後期旧石器時代Ⅰ期石器石材分類表

	削　器	スクレイパー	ナイフ形石器	石　核	二次加工剥片	縦長剥片	剥　片	砕　片	合　計	重量（g）
ホルンフェルスA							8		8	65.6
ホルンフェルスB				1			23		24	590.5
ホルンフェルスC						2	5		7	156.5
チャートA				1			1		2	35.6
チャートB							4		4	10.8
チャートC							1		1	2.5
チャートF							1		1	10.7
流紋岩A	1	1	2	1	1	1	29		36	456.2
流紋岩C							6		6	72.9
流紋岩D				1					2	305.9
砂岩A							1		1	41.6
合　計	1	1	2	4	1	3	79	0	91	2069.2

第２表　後期旧石器時代Ⅰ期石器石材組成表

遺物番号	グリッド	層	取り上げ番号	石材	X座標	Y座標	Z座標	器種	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
1	C4-a	Ⅸ	9043	流紋岩A	-85821.509	47550.971	116.139	削器	7.3	4.9	1.5	51.6	縦長剥片素材。左側縁部に腹面からの調整を入れ、加工を施す。剥片裏面に表面側より刃部を設けている箇所がみられる。使用中又は製作中に折れが生じたと考えられる。
2	C4-c	Ⅸ	9029	流紋岩A	-85832.741	47541.638	116.590	スクレイパー	4.4	4.7	1.4	19.2	左側縁部に腹面から調整を加え、刃部を作る。使用中又は製作中に折れが生じたと考えられる。
3	C4-c	Ⅸ	9026	流紋岩A	-85831.591	47541.777	116.567	ナイフ形石器	4.5	1.9	0.6	3.4	横長剥片素材。左側縁に腹面からの刃潰し調整痕。
4	A区	Ⅸ	Ⅸ（確認調査）	流紋岩A	－	－	－	ナイフ形石器	2.0	1.0	0.7	1.0	左側縁部に刃潰し対向調整。使用中又は製作中に折れが生じたと考えられる。先端部も欠損。
5	B4-d	Ⅸ	9073	流紋岩A	-85819.090	47546.507	116.520	二次加工のある剥片	4.1	3.6	1.5	23.1	上面に礫面を残す。両側縁に剥片を剥離した痕が残る。
6	B4-d	Ⅸ	9015	流紋岩A	-85833.365	47543.007	116.330	縦長剥片	6.6	4.2	1.6	36.6	製作中に故意に上面から折ったと考えられる。
7	B4-d	Ⅸ	9024	ホルンフェルスC	-85833.351	47541.814	116.572	縦長剥片	8.3	3.1	1.0	27.8	右側縁は自然面。
8	B4-d	Ⅸ	9074	ホルンフェルスC	-85819.489	47547.074	116.414	縦長剥片	9.4	5.5	1.1	53.5	縦長剥片。風化がみられる。
9	B4-d	Ⅸ	9013	流紋岩A	-85832.739	47543.418	116.312	幅広剥片	4.4	4.1	1.4	20.2	下部に腹面から調整を施している。右側縁部に自然面を残す。
10	C4-a	Ⅸ	9051	ホルンフェルスB	-85822.512	47548.482	116.261	幅広剥片	6.3	4.8	1.5	39.7	縦長剥片で上面及び表面から剥片剥離を行っている。
11	C4-a	Ⅸ	9081	流紋岩A	-85804.696	47519.275	116.300	石核	3.4	5.2	2.1	30.3	作業面転位を繰り返しながら、不定形の剥片を剥離している。
12	C4-c	Ⅸ	9031	チャートA	-85831.141	47541.362	116.522	石核	2.8	3.7	2.6	29.1	作業面転位を繰り返しながら、不定形の剥片を剥離している。自然面を所々に残す。
13	C4-a	Ⅸ	9054	流紋岩D	-85823.624	47548.878	116.191	石核	6.4	7.6	4.0	186.1	作業面転位を繰り返しながら、不定形の剥片を剥離している。
14	C4-a	Ⅸ	9092	ホルンフェルスB	-85806.158	47518.328	116.482	石核	5.6	5.8	3.4	104.0	作業面転位を繰り返しながら、不定形の剥片を剥離している。

第３表　後期旧石器時代Ⅰ期石器計測表（実測遺物のみ）

２　後期旧石器時代Ⅱ期（AT上位）

⑴　概要

始良Tn（AT）火山灰上位の包含層の調査は、Ⅳ～Ⅵ層を対象にⅨ層まで削平された箇所以外の全面積で実施した。旧地形は後期旧石器時代Ⅰ期の地形に近く、西から南東に向かって緩やかに下っていると考えられる。

⑵　遺物（第８図）

石器が202点出土した。石器の内訳は剥片尖頭器2点、細石刃掻器・礫器・打製石斧・ナイフ形石器が各１点である。なお、Ｂ２区・Ｄ６区で集中して出土している。石材はホルンフェルスＡが多数を占め、黒曜石・流紋岩がそれに続く。

【剥片尖頭器】（第９図15・16）

15は流紋岩Ｄ製で表面の基部両面に表面側から抉りの調整加工が施され、右側縁には表面側から調整加工が施されている。16はホルンフェルスＡ製で風化がみられるが、表面の基部両面に表面側から抉りの調整加工が施されている。先端部は欠けている。

【細石刃】（第９図17）

17は黒曜石Ａ（桑ノ木津留産）である。自然面が一部残り、頭部・尾部を欠損している。なお、黒曜石Ａの剥片は12点、砕片は10点確認さ

れている。

【掻器】（第９図18）

18はホルンフェルスＡ製で横長剥片の下端部一部に剥片腹面から調整加工を施す。

【礫器】（第９図19）

19はホルンフェルスＤ製で礫片を用い、表面と裏面の両面から二次加工が施されている。

【打製石斧】（第９図20）

20はホルンフェルスＤ製で裏面から調整を入れ刃部が欠損している。

【台形石器】（第９図21）

21はチャートＢ製で小形の横長剥片の左右両端を切断し、刃部に微細な剥離痕を認める。

【ナイフ形石器】（第９図22）

22は単独で出土しており、製品の状態で持ち込まれた可能性が高い。縦長剥片を利用した二側縁加工で、両則縁とも刃潰し加工が施されている。国府型ナイフ形石器の可能性がある。

【その他の石器】（第9図23～25・第10図26～34）

二次加工のある剥片６点、縦長剥片２点、石核４点が出土した。

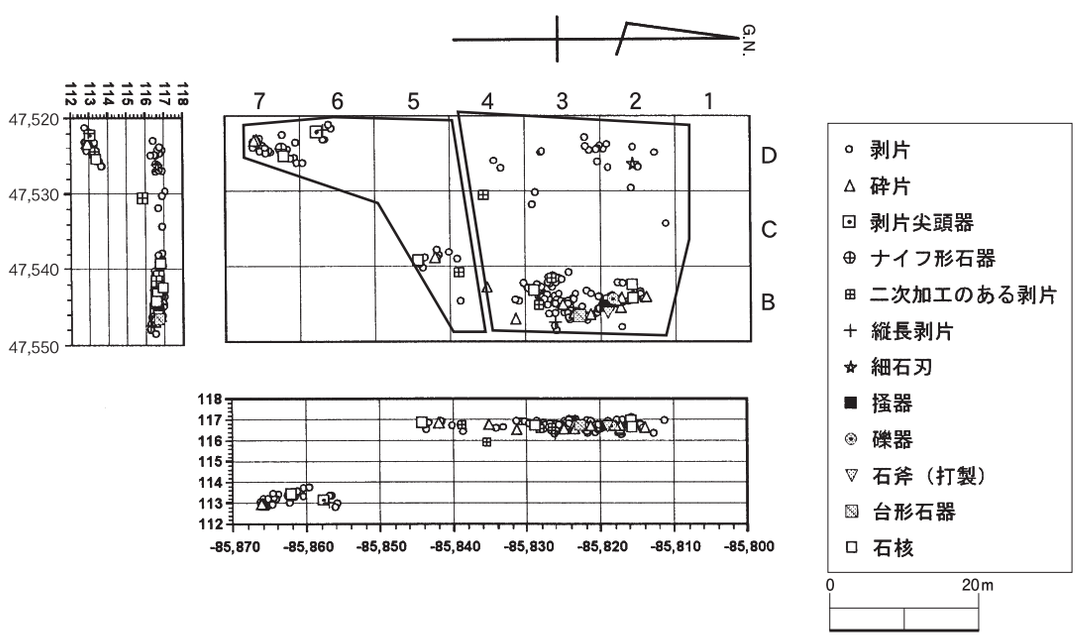
23・24・25・26・27・28は二次加工のある剥片である。23・24・25はホルンフェルスＡ製で、43は裏面の左側縁～下部に表面を打面に調整加工が施され、製品を製作中に欠損したと考えられる。24は表面に二次加工が認められる。25は黒曜石Ｂ製（日東産）で左側に二次加工が認められる。26・27はホルンフェルスＤ製で、26は左側縁に表面を打面に調整加工が施されている。27は裏面右側縁に表面を打面に調整加工が施されている。28は流紋岩Ｄ製で幅広剥片の下部に粗い二次加工が加えられている。

29・30は流紋岩Ａ製の縦長剥片で、いずれも作業面調整はない。

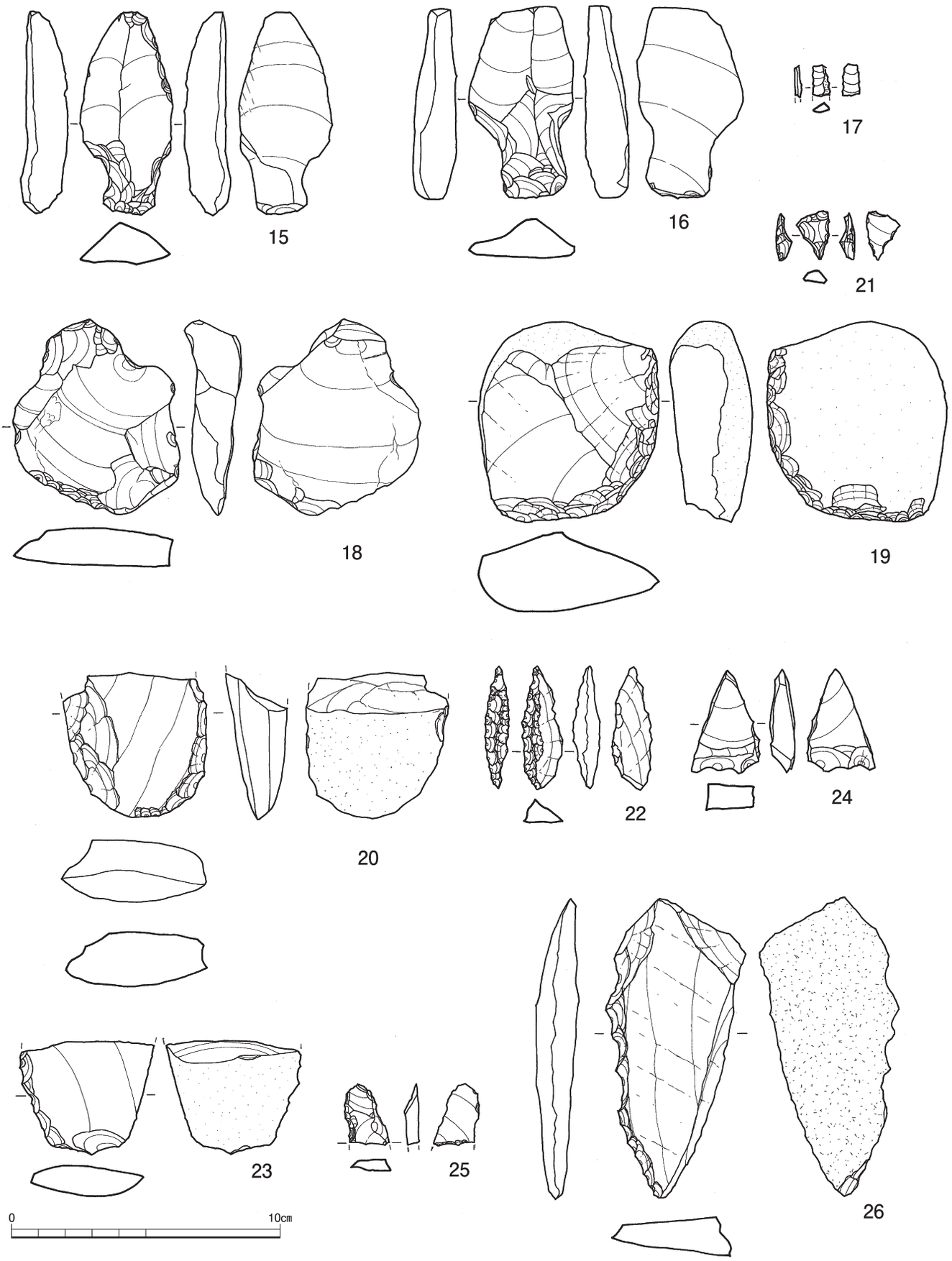
31・32・33・34は石核で、31・32が流紋岩Ｄ製、33・34がホルンフェルスＡ製である。31は上面を打面に縦長剥片を剥離後、左側縁からも小形の幅広剥片を剥離している。32はチャートＡ製で、打面非固定で不定形剥片を剥離し、おそらく剥離の衝撃で二分されている。33は打面非固定で小形の縦長剥片・横長剥片を剥離し、表面は礫面が残る。34は上下左右に打面をもち、縦長剥片・幅広剥片を剥離している。

【接合資料】（第11図35）

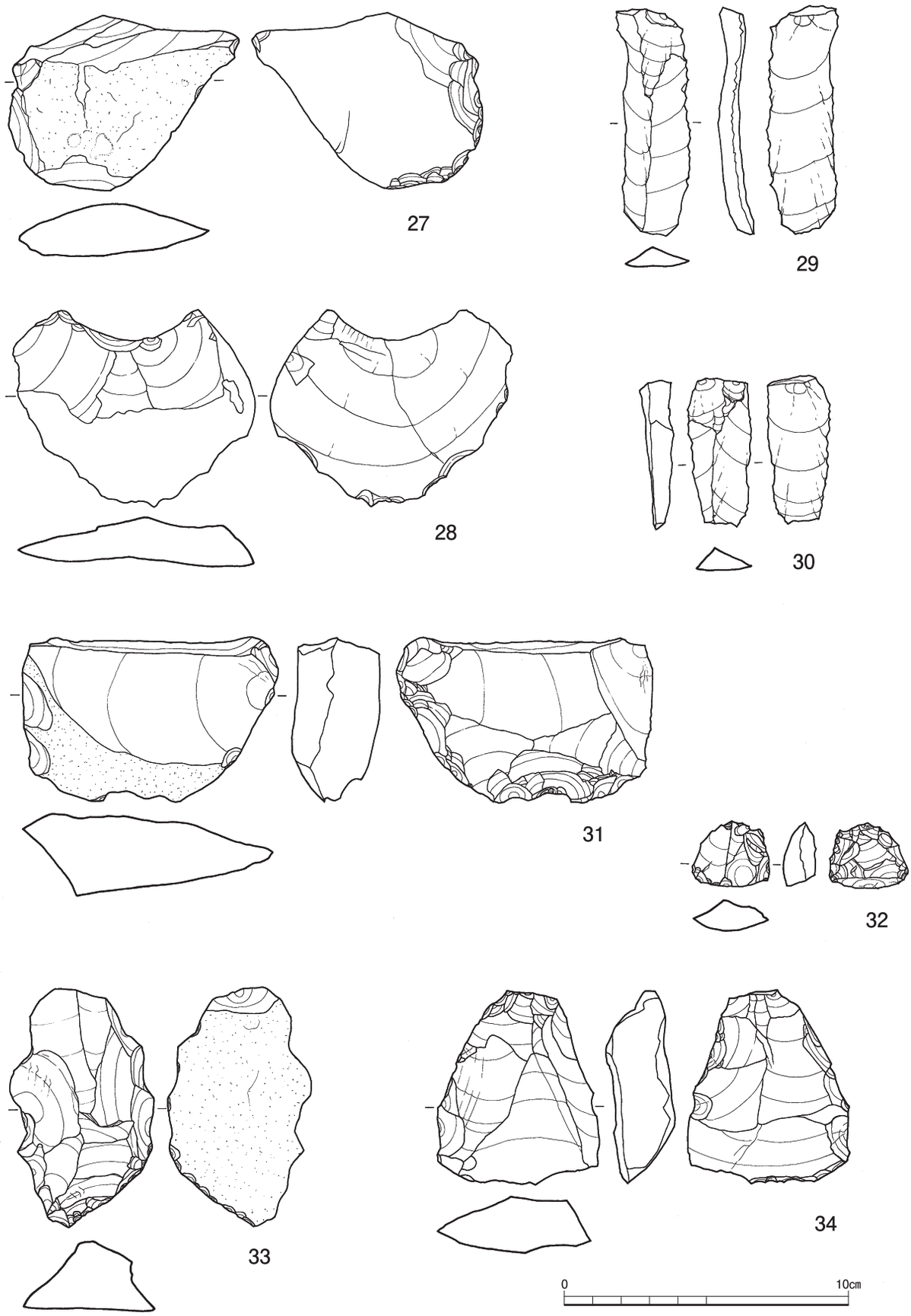
接合資料は１例である。35はホルンフェルスＤ製である。打面非固定で、横長剥片を剥離している。表面は礫面である。35bは35aの上面を打面に剥離されたものである。



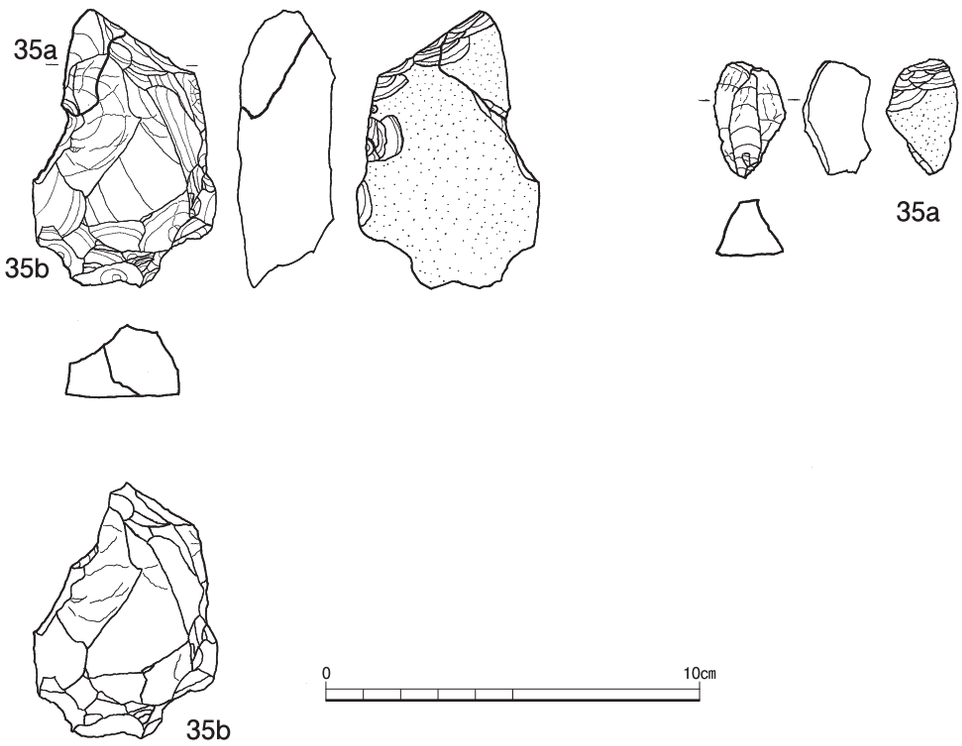
第８図　後期旧石器時代Ⅱ期遺物分布図（Ｓ＝1/1,000）



第９図　後期旧石器時代Ⅱ期出土遺物実測図①（S＝1/2）



第10図　後期旧石器時代Ⅱ期出土遺物実測図②（S＝1/2）



第11図　後期旧石器時代Ⅱ期出土遺物実測図③（S＝1/2）

石　材	石材の小分類	特徴（分類基準）	遺物番号	点　数	総重量（g）
ホルンフェルス	A	風化面は灰色。礫面は滑らか。カーブから察して円礫。剥離面はガザガザした灰黒色。うすいサビの筋が入る。	16、18、23、24、25、33、34、35a、35b	107	1740.3
	B	風化著しく、触ると手に石粉が付着する。風化面は褐炭色で、濁った白色～うすい橙色の筋が入る。	22	3	23.5
	D	剥離面は暗灰色で、ややガザガザしている。礫面は滑らか。うすい橙色の筋が入る。カーブから察して円礫。	19、20、26、27、31	6	746
チャート	A	暗赤褐色。節理が顕著。黒い筋が見られる。礫面の状態は不明。	－	10	24.7
	F	石質は薄い部分がにぶく透けるうすい灰緑色で、節理が顕著。	21	1	0.7
流紋岩	A	礫面は滑らか。爪痕のような傷が入る。カーブから察して円礫。剥離面は濡れたような黒緑色で、ぼんやりした白斑が入る場合がある。節理が顕著。	29、30	17	221.3
	D	１母岩につき１～２点の場合が多い、接合がなく、細かな母岩分類は有効に働かないと判断されたものを一括したもの。	15、28、32	16	1158.5
黒曜石	A（桑ノ木津留産）		17	23	27.4
	B（日東産）		－	16	26.7
その他	尾鈴酸性岩類		－	2	212.5
	チャートC	礫面の状態は不明。灰白色にうすい黒の筋が入るもの。	－	1	3.5

第４表　後期旧石器時代Ⅱ期石器石材分類表

	剥片尖頭器	掻器	礫器	石斧（打製）	ナイフ形石器	台形石器	石核	細石刃	二次加工剥片	剥片	砕片	合計	重量（g）
ホルンフェルスA	1	1					3		3	99		107	1740.3
ホルンフェルスB					1					2		3	23.5
ホルンフェルスD			1	1			1		2	1		6	746
チャートA										9	1	10	24.7
チャートC										1		1	0.7
チャートF						1						1	221.3
流紋岩A									2	15		17	1158.5
流紋岩D	1						1		1	13		16	27.4
黒曜石A（桑ノ木津留産）								1		12	10	23	26.7
黒曜石B（日　東　産）										16		16	212.5
尾鈴酸性岩類										2		2	3.5
合　計	2	1	1	1	1	1	5	1	8	170	11	202	4185.1

第５表　後期旧石器時代Ⅱ期石器石材組成表

遺物番号	グリッド	層	取り上げ番号	石材	X座標	Y座標	Z座標	器種	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考
15	D7-b	Ⅵ	6104	流紋岩D	-85857.680	47504.638	113.091	剥片尖頭器	7.5	3.5	1.8	37.3	表面の基部両面に表面側から抉りの調整加工、右側縁に表面側から調整加工
16	D3-a	Ⅵ	Ⅵ（確認調査）	ホルンフェルスA	－	－	－	剥片尖頭器	7.4	3.9	1.7	41.5	風化がみられる。表面の基部両面に表面側から抉りの調整加工。先端部は欠けている。
17	C4-b	Ⅵ	6080	黒曜石A（桑ノ木津留産）	-85815.586	47512.876	116.646	細石刃	1.2	0.7	0.2	0.1	自然面が一部残る。
18	C4-a	Ⅳ	4094	ホルンフェルスA	-85819.290	47550.610	116.699	掻器	7.3	6.3	2.2	82.2	素材は横長剥片。下端部一部に剥片腹面から調整加工
19	C4-b	Ⅳ	4061	ホルンフェルスD	-85818.349	47548.775	116.700	礫器	7.4	6.7	3.0	195.0	礫片を用い表面・裏面の両面から二次加工
20	B7-b	Ⅲ	3032	ホルンフェルスD	-85819.047	47552.311	116.661	石斧（打製）	5.5	5.3	2.1	68.3	裏面に礫面を残し、刃部が欠損している。
21	B2	Ⅵ	6007	チャートF	-85822.808	47553.280	116.713	台形石器	0.8	1.2	0.6	0.7	小形の横長剥片の左右両端を切断し、刃部に微細な剥離痕を認める。
22	D7-b	Ⅳ	4236	ホルンフェルスB	-85862.362	47508.971	113.328	ナイフ形石器	4.6	1.4	1.0	4.6	縦長剥片を利用。二側縁加工、両則縁とも刃潰し加工
23	D5-d	Ⅳ	4170	ホルンフェルスD	-85826.526	47543.172	116.607	二次加工のある剥片	4.2	5.0	1.2	28.4	裏面の左側縁～下部に表面を打面に調整加工
24	C 4	Ⅵ	Ⅵ（確認調査）	ホルンフェルスA	－	－	－	二次加工のある剥片	4.0	2.4	1.0	9.3	表面に二次加工あり
25	B3-c	Ⅵ	6073	黒曜石B（日東産）	-85835.458	47521.113	115.900	二次加工のある剥片	5.6	7.1	2.1	85.3	表裏両面に二次加工あり
26	D4-a	Ⅳ	4025	ホルンフェルスD	-85828.187	47550.313	116.534	二次加工のある剥片	11.1	5.2	1.6	78.2	左側縁に表面を打面に調整加工
27	B3-4	Ⅲ	3040	ホルンフェルスD	-85838.761	47541.772	116.733	二次加工のある剥片	6.2	8.2	1.9	82.4	裏面右側縁に表面を打面に調整加工
28	B4	Ⅳ	Ⅳ（確認調査）	流紋岩D	－	－	－	二次加工のある剥片	7.0	8.5	1.8	83.1	幅広剥片の下部に粗い二次加工
29	E5-c	Ⅵ	6023	流紋岩A	-85826.024	47555.090	116.299	縦長剥片	7.9	2.6	1.3	15.2	作業面調整なし
30	D7-b	Ⅵ	6103	流紋岩A	-85856.930	47503.908	112.983	縦長剥片	5.2	2.0	0.8	12.0	作業面調整なし
31	E5-c	Ⅳ	4143	ホルンフェルスD	-85828.803	47546.590	116.689	石核	5.8	9.0	3.1	188.7	上面を打面に縦長剥片を剥離後、左側縁からも小形の幅広剥片を剥離
32	D7-d	Ⅳ	4240	流紋岩D	-85862.094	47510.927	113.398	石核	2.2	2.7	1.0	6.6	打面非固定で不定形剥片を剥離し、剥離の衝撃で二分された可能性あり
33	C4-b	Ⅵ	6055	ホルンフェルスA	-85815.722	47544.933	116.941	石核	8.4	5.1	2.5	90.3	打面非固定で、小形の縦長剥片・横長剥片を剥離し、表面は礫面が残る。
34	E5-c	Ⅳ	4127	ホルンフェルスA	-85844.185	47538.626	116.839	石核	6.8	5.7	2.5	86.1	上下左右に打面をもち、縦長剥片・幅広剥片を剥離
35a	D4-a	Ⅳ	4031	ホルンフェルスA	-85825.524	47547.481	116.738	剥片	3.1	1.9	1.8	8.9	42bと接合。打面非固定で、横長剥片を剥離。表面は礫面
35b	C4-b	Ⅳ	4078	ホルンフェルスA	-85815.620	47548.588	116.617	石核	7.1	4.8	1.9	90.8	42aと接合。42aの上面を打面に剥離されたもの

第６表　後期旧石器時代Ⅱ期石器計測表（実測遺物のみ）

第５節　縄文時代草創期・早期の遺構と遺物

１　概　要

縄文時代草創期についてはＡ区Ⅳ層において爪先圧痕を文様（爪形文）として施文する土器が１点だけ確認されたが、該期単独の遺物包含層は明確に捉えられていない。

縄文時代早期については、炉穴９基（Ａ区８基、Ｂ区１基）が検出された（第12図）。また、Ａ区を中心に、Ⅲ層からⅣ層にかけて土器･石器類（石鏃･二次加工剥片・剥片・異形石器）が出土している。遺物の出土総点数は土器が179点、石器が115点である。

２　遺　構

【炉穴】（第13・14図）

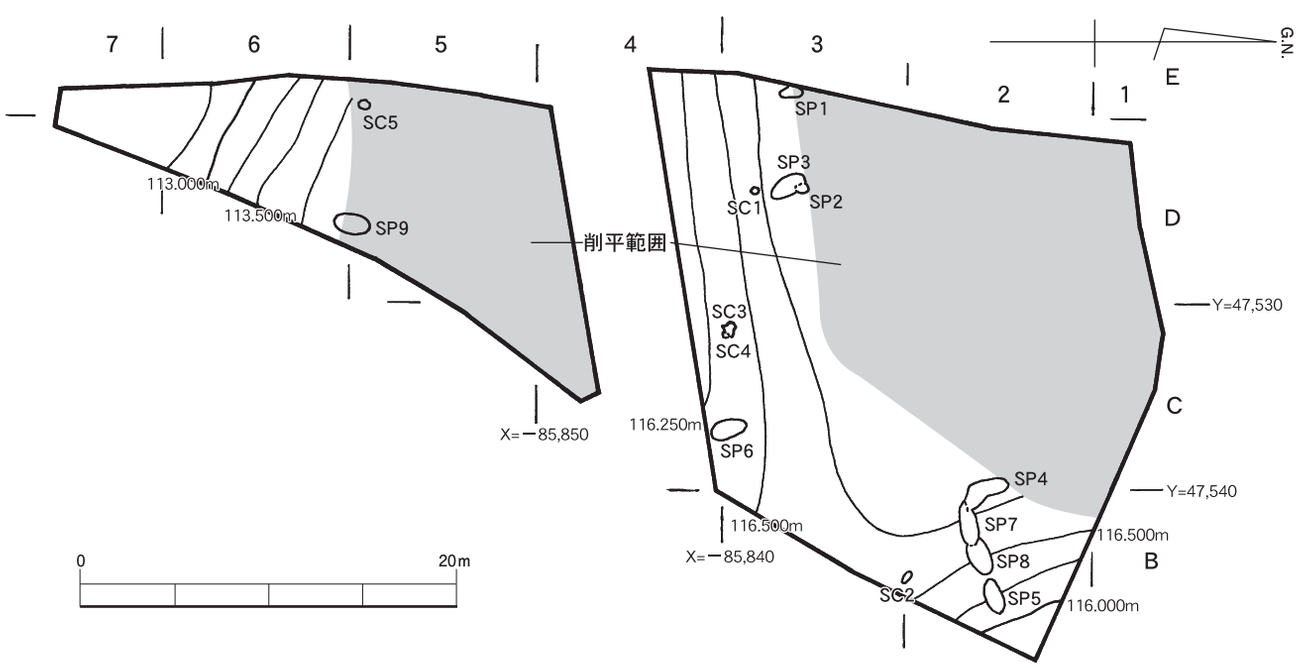
南側斜面部で５基、東側斜面部で４基確認されている。検出面はⅣ層で４基（SP4、SP6、SP7、SP8）、Ⅵ層で１基（SP5）、削平のためにⅦ～Ⅷ層で検出されたものが４基（SP1、SP2、SP3、SP9）である。確認された炉穴のうち､単独のもの（４基）と切り合いにより群（５基）をなすものがみられる。９基とも主軸が等高線にほぼ直交している。形態は平面形がおおむね長楕円形を呈し、その全長は削平されていたものも含み0.6m～1.8m、短軸0.4～0.8mである。底面については長楕円形を呈しているもの（SP2、SP7、SP8）、内側にくびれるもの（SP4、SP9）、内側にややくびれるもの（SP1、SP3、SP5、SP6）が確認できる。切り合いについては、古い炉穴よりも高い位置に新しい炉穴を構築している。埋土の状況からは、堆積のない状態で新しく構築されたと考えられる。床面に炭化材が確認された炉穴（SP8）もみられた。なお、他の遺構との切り合いはみられない。

【土坑】（第13図）

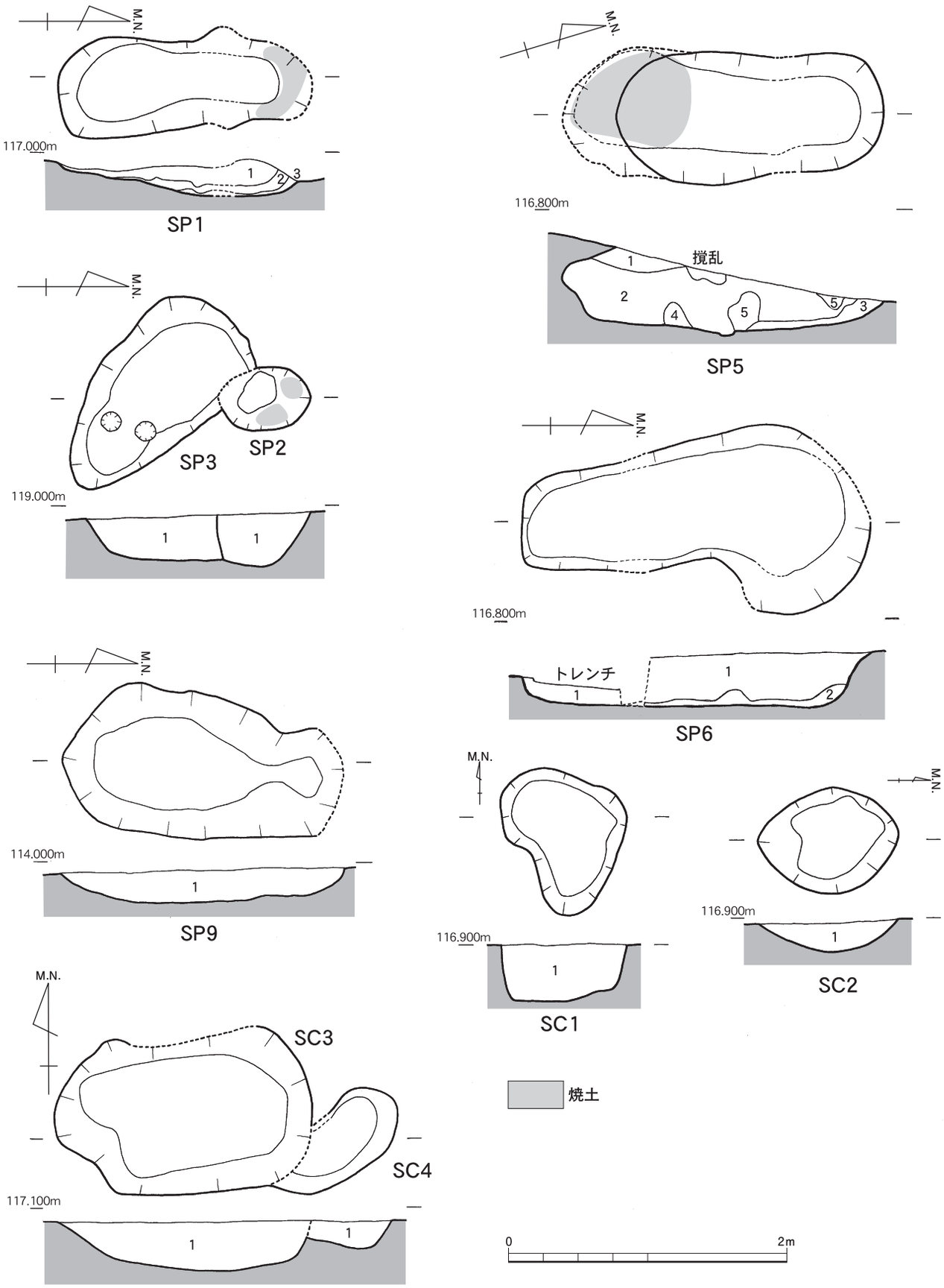
土坑は平面が楕円形のもので掘り込みは浅い。埋土に炭化物を含む土坑（SC1・SC3・SC4）や炭化物と焼土を含む土坑（SC2）がみられるが、床面では確認できていない。

【遺構出土の遺物】（第15図）

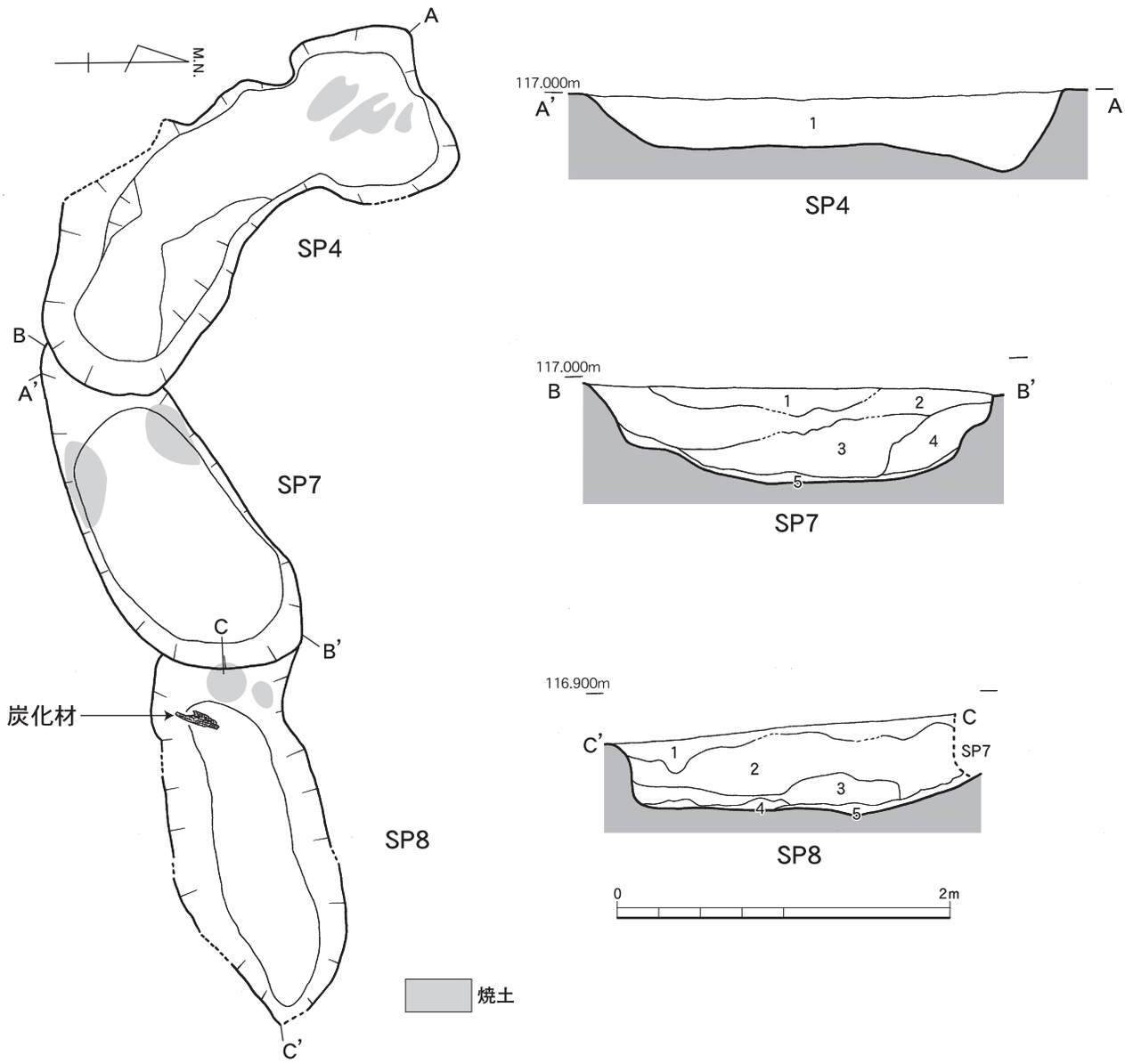
SC4の埋土からはホルンフェルスＡ製の剥片尖頭器36が出土している。SP6からは細石刃37と縄文土器の口縁部38が出土した。38は貝殻腹縁による縦１段の連続刺突文が施され、別府原式系土器と考えられる。SP2からは土器の胴部片39が出土した。器面に貝殻条痕文が認められる。各遺物の詳細は、第17表を参照されたい。



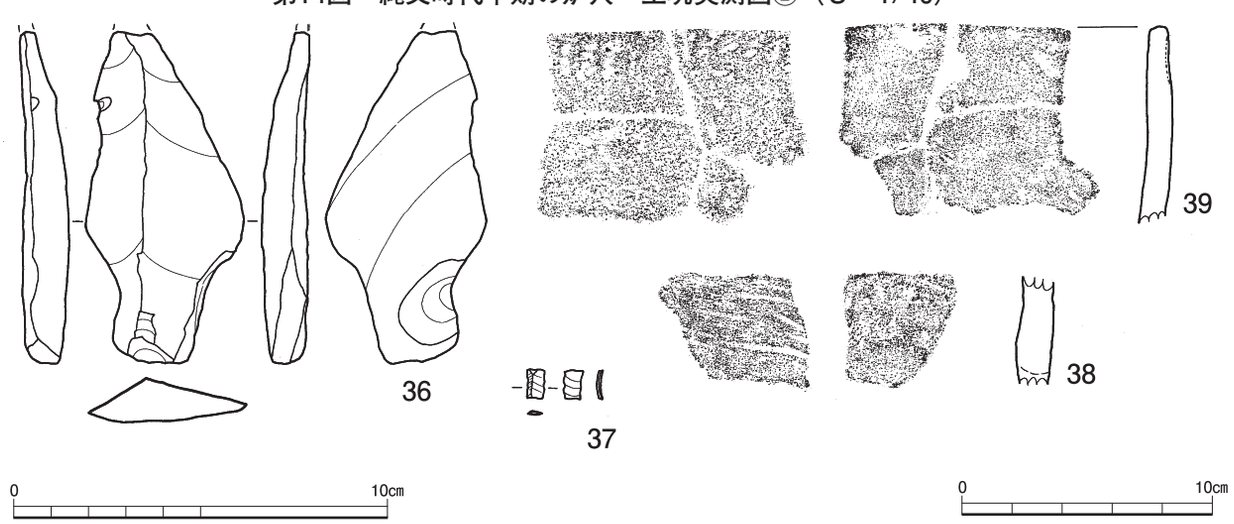
第12図　縄文時代早期遺構分布図（Ｓ＝1/400）



第13図　縄文時代早期の炉穴・土坑実測図①（S＝1/40）



第14図　縄文時代早期の炉穴・土坑実測図②（S＝1/40）



第15図　遺構出土の遺物実測図（S＝1/2，1/3）

炉穴・土坑土層注記一覧

【ＳＰ１】

１：黒褐色土（Hue7.5YR3/2）。非常によくしまる。粘性なく、さらさらしている。白色や透明のパミスを含む。炭化物を少し含む。

２：暗褐色土（Hue10YR3/4）。よくしまる。弱粘質土。径２～５㎜の小礫を含む。径１㎜程度の焼土粒や炭化物が全体に多く混じる。

３：暗褐色土(Hue7.5YR3/4)。よくしまる。粘質土。径１～５㎜の小礫を含む。径３～10㎝の焼土塊を含む。炭化物あり。

【ＳＰ２】

１層のみ。暗褐色土（Hue10YR3/3）。硬くしまる。乾燥しやすい。径１㎜の炭化物を多く含む。径４㎜～５㎜の炭化物もある。径３㎝の焼土塊もみられる。

【ＳＰ３】

１層のみ。暗褐色土（Hue10YR3/3）。硬くしまる。乾燥しやすい。径１㎜の炭化物を多く含む。径４㎜～５㎜の炭化物もある。

【ＳＰ４】

１層のみ。暗褐色土（Hue10YR2/3）。非常によくしまる。粘性はあまりない。炭化物や白色のパミス、焼土粒を含む。

【ＳＰ５】

１：暗褐色土（Hue10YR3/3）。よくしまる。やや粘質土。褐色のロームブロックを含む。径１㎜～５㎜の小石を含む。炭化物を少し含む。

２：黒褐色土（Hue10YR2/2）。非常によくしまる。粘性なし。焼土・炭化物を少し含む。パミスも含む。

３：黒褐色土（Hue10YR3/2）。ややしまる。粘質土。粒の大きな炭化物あり。焼土を少し含む。

４：暗褐色土（Hue10YR3/3）。非常によくしまる。やや粘質土。大きめの焼土粒あり。炭化物を含む。

５：黒褐色土（Hue10YR2/2）。２層よりもしまる。粘性なし。２層の中にブロック状で入る。炭化物なし。下部中央付近に径５㎝程度の礫３個。

【ＳＰ６】

１：黒褐色土（Hue10YR2/2）。非常によくしまる。弱粘質土。焼土・炭化物を含む。パミスを含む。

２：暗褐色土（Hue10YR3/3）。よくしまる。弱粘質土。焼土粒・炭化物を含む。床面付近に大きな炭化物を含む。下部に径5㎝程度の礫２個。

【ＳＰ７】

１：暗褐色土（Hue10YR3/4）。ややしまる。やや粘質土。褐色のロームブロックを含む。Ⅵ層か。

２：暗褐色土（Hue10YR3/3）。よくしまる。やや粘性。白粒や橙粒が多く混じる。

３：黒褐色土（Hue10YR2/2）。非常によくしまる。粘性はあまりなく、焼土粒・炭化物を少し含む。

４：黒褐色土（Hue10YR2/3）。よくしまる。粘性あり。焼土粒・炭化物を少し含む。

５：暗褐色土（Hue7.5YR3/4）。ややしまる。粘性あり。焼土粒・炭化物を多く含む。径１㎜～５㎜の小石を多く含む。下部に５㎝程度の礫２個。

【ＳＰ８】

１：暗褐色土（Hue10YR3/4）。ややしまる。粘質土。褐色のロームブロックを含み、Ⅵ層か。

２：黒褐色土（Hue10YR2/2）。非常によくしまる。やや粘質土。混じり気なし。

３：暗褐色土（Hue10YR3/3）。よくしまる。やや粘質土。白粒や径１㎜～４㎜の小石を少し含む。炭化物少し含む。

４：暗褐色土（Hue7.5YR3/4）。ややしまる。粘質土。径１㎜～10㎜の小石を多く含む。焼土・炭化物を多く含む。

５：暗褐色土（Hue10YR3/4）。ややしまる。粘質土。径１㎜～５㎜の小石を少し含む。

【ＳＰ９】

１層のみ。黒褐色土（Hue10YR2/2）。よくしまる。径１㎜～５㎜の小石を少し含む。炭化物・焼土粒を多く含む。幅２㎝、長さ12㎝の焼土塊もある。

【ＳＣ１】

１層のみ。黒褐色土（Hue10YR2/3）。非常によくしまる。粘性はあまりない。径0.5㎜未満の透明粒を含む。炭化物を少し含む。径１㎝程度の小石を含む。

【ＳＣ２】

１層のみ。褐色土（Hue7.5YR4/4）。ややしまる。粘性はあまりない。全体に焼土粒や径１～２㎝程度の焼土塊を含む。炭化物を少し含む。

【ＳＣ３】

１層のみ。暗褐色土（Hue10YR3/3）。非常によくしまる。弱粘質土。径２㎜程度の小石を少し含む。白・橙のパミスを含む。炭化物を少し含む。

【ＳＣ４】

１層のみ。暗褐色土（Hue10YR3/3）。非常によくしまる。粘性はあまりない。白色の径５㎜程度の小石を少し含む。炭化物を含む。

【石器】

遺物番号	遺構番号	石材	器種	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考
36	SC3	ホルンフェルスA	剥片尖頭器	8.8	4.3	1.3	38.0	風化がみられるが、表面の基部両面に表面側から抉りの調整加工が施されている。先端部は使用中に欠けたか。
37	SP6	黒曜石A（桑ノ木津留産）	細石刃	0.7	0.5	0.1	0.1	尾部が欠損している。

【土器】

遺物番号	遺構番号	器種	部位	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	焼成	分類	備考
				外面	内面	外面	内面				
38	SP2	深鉢	胴部	風化激しいが、斜位の貝殻条痕文	風化激しい。ナデか。	浅黄橙 橙	浅黄橙	3㎜以下のにぶい褐粒をごく僅かに含む。2㎜以下の黒色光沢粒を少し含む。1㎜以下の白色粒と軟質な黄橙粒、無色透明粒、黒色粒、乳白粒を含む。	良好	Ⅰ・Ⅲ	器壁厚い
39	SP6	深鉢	口縁～胴部	風化が激しい。貝殻腹縁による縦一段の連続刺突文	ナデ	褐灰 浅黄橙	浅黄橙 褐灰	8㎜以下の明褐粒を僅かに含む。4㎜以下の赤褐粒を僅かに含む。3㎜以下の灰白粒をごく僅かに含む。1㎜以下の無色透明粒をごく僅かに含む。	良好	Ⅰ	別府原式か。

第７表　遺構出土の遺物観察表

遺構番号	検出面	位　　置	検出状況	平面形・斜面傾斜等	規　模	埋　　土	炭化物
SP1	Ⅷ	丘陵南斜面で、長軸は南から北に向かう。E3-a区。	削平のためⅧ層で検出。北側は大きく削られ、端部は残存せず。X層まで掘り込まれる。	平面は細長い楕円形。床面は北から南に向かって緩やかに上がる。底面は内側にややくびれる。	長軸想定1.8m×短軸想定0.7m	3層に分かれ、硬くしまる。南側床面がよく焼ける。	満偏なく含まれ、2層で顕著。
SP2	Ⅶ	丘陵南斜面で、長軸は南東から北西に向かう。D3-b区。	削平のためⅦ層で検出。X層まで掘り込まれる。	平面は細長い楕円形。床面は北から南に向かって緩やかに上がる。底面は長楕円形。	長軸（残存）1.6m×短軸（残存）0.8m	1層のみ。硬くしまり、乾燥しやすい。焼土を含む。径3㎝の焼土もみられる。貝殻条痕文土器1点出土。	径1㎜程度のものを多く含む。径4㎜～5㎜もみられる。径3㎝の焼土もみられる。
SP3	Ⅶ	丘陵南斜面で、長軸は南から北に向かう。D3-b区。	削平のためⅦ層で検出。X層まで掘り込まれる。SP2に切られる。	平面は楕円形。床面は南から北に向かって緩やかに上がる。底面は内側にややくびれる。	長軸（残存）0.6m×短軸（残存）0.4m	乾燥しやすい。硬くしまり、焼土を含む。東側床面がよく焼ける。	径1㎜程度のものを多く含む。径3㎝もみられる。
SP4	Ⅳ	丘陵東斜面で、長軸は南から北に向かう。B2-b区。	Ⅳ層で検出。X層まで掘り込まれる。	平面は細長い楕円形。床面は北から南に向かって緩やかに上がる。底面は内側にくびれる。	長軸想定1.4m×短軸想定0.4m	非常によくしまる。粘性はあまりない。パミス・焼土粒、炭化物を含む。北側床面がよく焼ける。	満遍なく含まれる。
SP5	Ⅵ上面	丘陵東斜面で、長軸は北西から南東に向かう。B2-b区。	Ⅵ層上面で検出。Ⅸ層下層まで掘り込まる。	平面は細長い楕円形。床面は北東から南西に緩やかに上がる。底面は内側にややくびれる。	長軸想定1.1m×短軸想定0.5m	全体的によくしまる。粘性は層により異なる。、2～4層に焼土粒を含む。南東側床面がよく焼け、2㎝程度の焼土塊が比較的多くみられる。	1～4層に含まれる。2層には粒の大きな炭化物あり。
SP6	Ⅳ	丘陵南斜面で、長軸は南から北に向かう。C4-c区。	Ⅳ層で検出。X層まで掘り込まれる。	平面は細長い楕円形。床面はほぼ水平。底面は内側にややくびれる。	長軸想定1.2m×短軸想定0.5m	2層に分かれ、非常によくしまる。2層に焼土粒・炭化物を多く含む。貝殻条痕文土器・細石刃各1点出土。	2層に多く含む。北側床面に長さ5㎝の炭化物。
SP7	Ⅵ上面	丘陵東斜面で、長軸は北東から南西に向かう。B2-b区。	Ⅵ層上面で検出。Ⅸ層下層まで掘り込まれる。SP4に切られる。	平面は細長い楕円形。床面は北東から南西にやや上がる。底面は長楕円形。	長軸想定1.2m×短軸想定0.5m	5層に分かれ、全体的によくしまる。3～5層に焼土粒・炭化物を含む。特に5層に多い。5層に1㎜～5㎜の小石を含む。南東側床面の左右がよく焼け、径1～10㎝の焼土塊群。	3～5層に含み、5層に多い。
SP8	Ⅵ上面	丘陵東斜面で、長軸は北東から南西に向かう。B2-b区。	Ⅵ層上面で検出。Ⅸ層下層まで掘り込まれる。SP7に切られる。	平面は細長い楕円形。床面は北東から南西にやや上がる。底面は長楕円形。	長軸想定1.2m×短軸想定0.5m	5層に分かれ、全体的によくしまる。4層に焼土粒・炭化物を多く含む。3～5層に1㎜～10㎜の小石を含む。	4層に多く含む。3層にも少量含む。
SP9	Ⅳ	丘陵南斜面（B区）で、長軸は南東から北西に向かう。D5-a区。	削平のためⅨ層で検出。X層まで掘り込まれる。	平面は細長い楕円形。床面は南東から北西に緩やかに上がる。底面は内側にくびれる。	長軸（残存）1.0m×短軸（残存）0.5m	1層のみ。炭化物・焼土粒を多く含み、3㎝の焼土塊もみられる。径1㎜～5㎜の小石もまばらに含む。北西側床面の左右がよく焼ける。	満遍なく含まれる。
SC1	Ⅳ	丘陵南斜面で、長軸は南から北に向かう。D3-b区。	Ⅳ層で検出。	平面は楕円形。床面は西から東に緩やかに上がる。	長軸想定1.0m×短軸想定0.9m	1層のみ。径5㎜未満の透明粒を含む。1㎝程度の小石を含む。	少量含む。
SC2	Ⅳ	丘陵南斜面で、長軸は西から東に向かう。B2-b区。	Ⅳ層で検出。	平面は楕円形。床面は中央に向かってやや下がる。	長軸想定1.0m×短軸想定0.8m	1層。全体に焼土粒や径1～2㎝程度の焼土塊を含む。床面中央部に焼土が集中する。	少量含む。
SC3	Ⅳ	丘陵南斜面で、長軸は北東から南西に向かう。D3-b区。	Ⅳ層で検出。	平面は楕円形。床面は北東から南西に緩やかに上がる。	長軸想定1.9m×短軸想定1.3m	1層のみ。径2㎜程度の小石を少し含む。白・橙のパミスを含む。剥片尖頭器1点出土。	少量含む。
SC4	Ⅳ	丘陵南斜面で、長軸は東から西に向かう。D3-b区。	Ⅳ層で検出。	平面は細長い楕円形。床面は東から西に緩やかに上がる。	長軸想定1.1m×短軸想定0.5m	1層のみ。白色の径5㎜程度の小石を少し含む。	満遍なく含まれる。

第８表　縄文時代早期の炉穴・土坑観察表

３　遺物①　－土器－

Ⅲ層からⅥ層にかけて出土している。文様の特徴により大きく５類に分類できる。貝殻文系土器に属するものが多数を占める。

⑴　縄文時代草創期後半（第16図40）

Ａ区Ⅳ層で１点だけ確認された。40は爪先圧痕を文様（爪形文）として施文する土器で粘土帯を薄く張り付けた上に施文したものが３列確認できる。内面調整は横ナデである。西ノ園遺跡で類似するものが出土している。

⑵　縄文時代早期（第16・17図）

Ⅰ類は器形の大半に条痕を有するものである。41は口縁部が直口し全体的に器壁が厚い。外面は斜位の貝殻条痕文、内面はナデ、口唇部に近い部分は横ナデである。別府原式系土器に相当すると考えられる。42は口縁部がやや外反している。外面は斜位の貝殻条痕文、内面はナデである。43は口縁部が直口している。外面は横・斜位の貝殻条痕文、内面は丁寧なナデである。44も口縁部が直口し、外面が斜位の貝殻条痕文、内面は丁寧なナデである。45は外面は斜位の貝殻条痕文、内面は風化が激しいがナデである。

Ⅱ類は、貝殻腹縁による縦位の連続刺突文を数段施すものである。46は口縁部に貝殻腹縁による縦位の連続刺突文が２段まで確認できる。内面はナデである。47も口縁部に貝殻腹縁による縦位の連続刺突文が２段まで確認できる。口唇部にも貝殻腹縁による横位の連続刺突文２段が確認できる。器壁は厚く、口縁端部は丸みがある。内面は丁寧なナデである。いずれも中原式系土器に相当すると考えられる。

Ⅲ類は器形に貝殻条痕を有し、口縁部に文様を巡らすものである。文様により３群に分類できる。

Ⅲa類は外面に斜位の貝殻条痕文を施した後、工具による縦一段の押圧を巡らすものである。48がこれに相当する。内面はナデを施している。前平式系土器に相当すると考えられる。

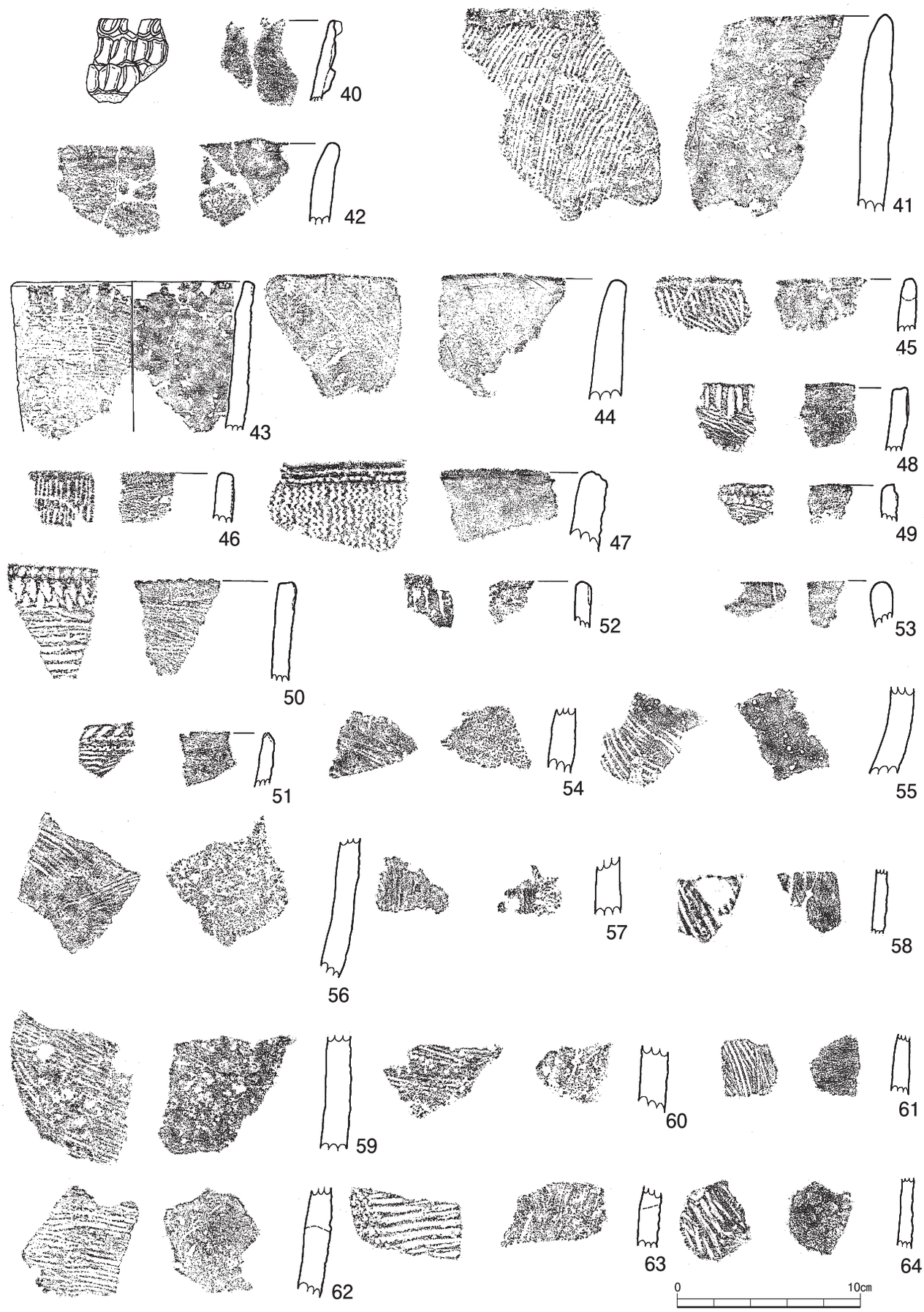
Ⅲb類は口縁部に２段の文様を巡らすもので、縦位の貝殻刺突を施すものである。器面に文様を付けた後に貝殻腹縁条痕文を施している。49は外面に斜位の貝殻条痕文を施した後、口縁部に貝殻背面による横方向の押圧を巡らすものである。内面はナデである。50は外面に横位・斜位の貝殻条痕を施文後、工具による縦位の２段の押圧が認められる。内面は斜位のケズリ後、口唇部直下にナデが認められる。いずれも前平式系土器に相当すると考えられる。

Ⅲc類は、外面は斜位横位の貝殻条痕を施文後に横位の貝殻刺突を２段、口縁部に工具による押圧を施すものである。51がこれに相当する。口縁部には陵が認められる。内面はナデである。

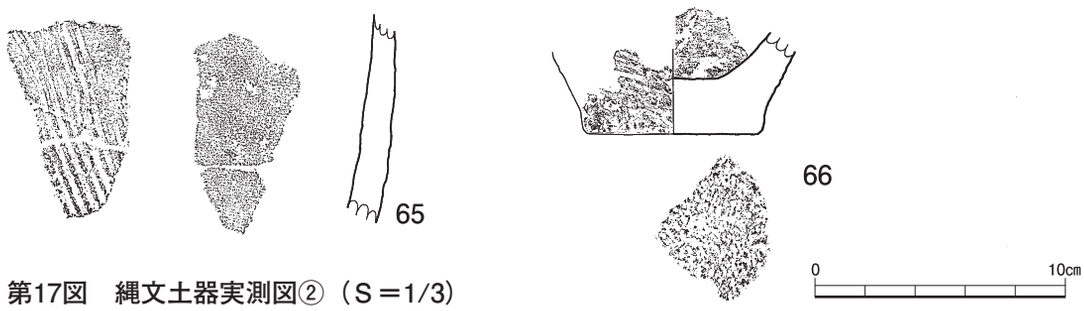
52・53は小片で不明な点が多いため類別していない。67は工具によるＶ字状の押圧が認められる。内面は風化がみられるがナデである。53は風化が激しいが、外面には貝殻条痕文が認められる。内面はナデである。

胴部片については器面に貝殻条痕文（54～64）と、65は工具による条痕文が認められた。Ⅰ類とⅢ類に含まれると考えられるが、その判別が難しいため、Ⅰ・Ⅲ類とした。

底部は１点出土した。66は底面は平らで、底面に網代痕と思われる圧痕状のものが認められる。外面には斜位・横位の貝殻条痕文、内面は風化が激しいがナデである。



第16図　縄文土器実測図①（S＝1/3）



第17図　縄文土器実測図②（S＝1/3）

遺物番号	出土地点	器種	部位	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	焼成	分類	備考
				外面	内面	外面	内面				
40	Ⅳ	深鉢	口縁部	薄く粘土帯を貼り付け、その上に指頭による連続押圧３列。粘土帯には爪先状の圧痕。口縁部は棒状の工具で押圧しながら動かした可能性あり。	ナデ、指頭圧痕あり	黄褐・黒褐	赤褐	２㎜以下の無色透明粒と黒色光沢粒と軟質な浅黄橙を多く含む。３㎜以下の赤茶粒を僅かに含む。	良好	－	爪形文土器
41	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	斜位の貝殻条痕文	ナデ、口唇部に近い部分は横ナデ	橙	にぶい黄橙	3㎜以下の赤褐色粒、2㎜以下の灰白色粒、1㎜以下の金色粒、3㎜以下のにぶい黄橙粒を含む。1㎜以下の無色透明粒を僅かに含む。	良好	Ⅰ	器壁厚い、口縁部が直口。別府原式か
42	Ⅳ	深鉢	口縁部	風化激しいが斜位の貝殻条痕文	ナデ、指頭圧痕あり	にぶい黄褐・褐灰	黒褐	2㎜以下のにぶい黄橙粒を少し含む。2㎜以下の橙粒を僅かに含む。1㎜以下の黒色光沢粒・無色透明粒をごく僅かに含む。	良好	Ⅰ	口唇部がやや外反
43	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	横位・斜位の貝殻条痕文	丁寧なナデ、指頭圧痕あり	にぶい黄褐黒褐	黒褐	２㎜以下の橙色粒、１㎜以下の乳白粒・灰白粒を少し含む。	良好	Ⅰ	口縁部が直口
44	Ⅳ	深鉢	口縁～胴部	斜位の貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	3㎜以下の灰白粒、1㎜以下の黒色光沢粒と無色透明粒を含む。2㎜以下の橙粒をごく僅かに含む。	良好	Ⅰ	口縁部が直口、器壁が厚い
45	Ⅳ	深鉢	口縁部	斜位の貝殻条痕文	風化激しいがナデ	にぶい黄橙	橙	2㎜以下の赤茶粒、1㎜以下の灰白粒を少し含む。1㎜以下の無色透明粒・黒色光沢粒を多く含む。	良好	Ⅰ	器壁厚い
46	Ⅲ	深鉢	口縁部	口縁部に貝殻腹縁による縦位の連続刺突文が２段まで確認	ナデ	明黄褐	明黄褐	２㎜以下の無色透明粒を少し含む。１㎜以下の白色粒・黒色粒を僅かに含む。	良好	Ⅱ	中原式系土式
47	Ⅲ	深鉢	口縁部	貝殻腹縁による縦位の連続刺突文2段、口唇部にも貝殻腹縁による横位の連続刺突文2段	丁寧なナデ	黒褐	橙	2㎜以下の黒色柱状光沢粒と白色粒を多く含む。1㎜以下の無色透明粒・にぶい橙粒を含む。	良好	Ⅱ	器壁が厚い、中原式系土器
48	Ⅳ	深鉢	口縁部	斜位の貝殻条痕文後、工具による縦位一段の押圧	ナデ	にぶい赤褐	赤褐	3㎜以下のにぶい橙粒をごく僅かに含む。2㎜以下の黒色光沢粒を少し含む。1㎜以下の無色透明粒をごく僅かに含む。	良好	Ⅲa	口唇部は平ら、前平式系土器
49	Ⅳ	深鉢	口縁部	斜位の貝殻条痕文後、口唇部に貝殻背面による横方向の押圧	ナデ、指頭圧痕あり	黒褐	褐	2㎜以下の無色透明粒・1㎜以下の無色透明光沢粒を少し含む。1㎜以下の乳白粒を僅かに含む。	良好	Ⅲb	前平式系土器
50	Ⅵ	深鉢	口縁部	横位・斜位の貝殻条痕文後、工具による縦位の２段の押圧か。	斜位のケズリ後、口唇部直下をナデ	明黄褐・黒褐	黄橙	2㎜以下の軟質な浅黄橙・赤茶色粒を僅かに含む。1㎜以下の無色透明光沢粒・灰白色粒を多く含む。	良好	Ⅲb	前平式系土器
51	Ⅳ	深鉢	口縁部	斜位・横位の貝殻条痕文後に横位の貝殻刺突2段、口縁部に工具による押圧	ナデ、指頭圧痕あり、口縁部に痕あり	にぶい橙	にぶい橙	2㎜以下の灰白粒を僅かに含む。2㎜以下の明赤褐粒、1㎜以下の無色透明粒をごく僅かに含む。	良好	Ⅲc	
52	Ⅳ	深鉢	口縁部	工具による縦位のＶ字状の押引	ナデ	黒灰	褐灰	３㎜以下のにぶい橙色粒、１㎜以下の灰白粒をごく僅かに含む。	良好	－	口唇部は押圧か。
53	Ⅳ	深鉢	口縁部	風化激しい。貝殻条痕文か。	ナデ	黒褐	黄灰	2㎜以下の灰粒を僅かに含む。1㎜以下の無色透明光沢粒・黄橙粒・赤茶粒を含む。	良好	－	
54	Ⅳ	深鉢	胴部	斜位・横位の貝殻条痕文	ナデ	赤褐	橙	1㎜以下の灰白粒を少し含む。2㎜以下の橙色粒、1㎜以下の黒色光沢色粒をごく僅かに含む。	良好	Ⅰ・Ⅲ	
55	Ⅳ	深鉢	胴部	斜位の貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙・黄灰	2㎜以下の灰白粒、1㎜以下の無色光沢粒をごく僅かに含む。軟質粒を少し含む。	良好	Ⅰ・Ⅲ	器壁は厚い
56	Ⅵ	深鉢	胴部	斜位の貝殻条痕文	風化が激しい	橙	明赤褐・にぶい黄橙	2㎜以下の灰白粒を僅かに含む。1㎜以下の無色透明粒、2㎜以下の橙粒をごく僅かに含む。	良好	Ⅰ・Ⅲ	
57	Ⅲ	深鉢	胴部	斜位の貝殻条痕文	風化激しい。ナデか。	赤褐	明赤褐	2㎜以下の乳白粒を含む。1㎜以下の無色透明光沢粒、1㎜以下の黒色粒を含む。	良好	Ⅰ・Ⅲ	器壁は厚い
58	Ⅳ	深鉢	胴部	斜位の貝殻条痕文	ナデ	黒褐	橙	1㎜以下の乳白粒・黒色光沢粒・浅黄橙粒を含む。	良好	Ⅰ・Ⅲ	
59	Ⅳ	深鉢	胴部	風化激しいが、斜位・横位の貝殻条痕文	風化がみられるがナデ	橙	にぶい黄橙	2㎜以下の無色透明粒・1㎜以下のン軟質の灰白粒・黒色光沢粒・にぶい黄橙粒を含む。	良好	Ⅰ・Ⅲ	器壁は厚い
60	Ⅵ	深鉢	胴部	風化激しいが、斜位の貝殻条痕文	風化激しい。ナデか。	明赤褐	にぶい黄褐	3㎜以下の無色透明粒、軟質な乳白粒・金色粒、2㎜以下の無色透明光沢粒・黒色光沢粒を含む。	良好	Ⅰ・Ⅲ	器壁は厚い
61	Ⅳ	深鉢	胴部	斜位の貝殻条痕文	ナデ	赤褐・黒褐	赤褐	1㎜以下の無色透明粒・黒色光沢粒・赤茶粒・乳白粒を多く含む。	良好	Ⅰ・Ⅲ	
62	Ⅳ	深鉢	胴部	斜位の貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	1㎜以下の乳白粒を多く含む。2㎜以下の無色透明粒と白色粒を含む。1㎜以下の黒色粒・浅橙粒を少し含む。	良好	Ⅰ・Ⅲ	器壁は厚い
63	Ⅲ	深鉢	胴部	斜位の貝殻条痕文	風化激しい。ナデか。	にぶい黄褐・黒褐	明赤褐	2㎜以下の無色透明粒を多く含む。1㎜以下の軟質の白色粒・黒色光沢粒・黒色粒を含む。	良好	Ⅰ・Ⅲ	器壁は厚い
64	Ⅲ	深鉢	胴部	斜位の貝殻条痕文	風化激しい。ナデか。	黄橙	褐	1㎜以下の無色透明粒・乳白粒・無色透明光沢粒・黒色光沢粒を少し含む。	良好	Ⅰ・Ⅲ	
65	Ⅳ	深鉢	胴部	工具による条痕文	ナデ	にぶい黄橙・黒	橙	2㎜以下の乳白粒を多く含む。1㎜以下の黒色光沢粒と1㎜以下の無色透明粒を少し含む。3㎜以下の赤茶粒を僅かに含む。	良好	Ⅰ・Ⅲ	
66	Ⅰ	深鉢	底部	斜位・横位の貝殻条痕文、網代圧痕	風化激しい、一部に横ナデ	にぶい赤橙	赤橙	3㎜以下の赤粒を多く含む。10㎜以下のにぶい黄橙粒をごく僅かに含む。1㎜以下の灰白粒を僅かに含む。	良好	－	底面は網代圧痕か、底面は平ら

第９表　縄文土器観察表

4　遺物②　－石器－

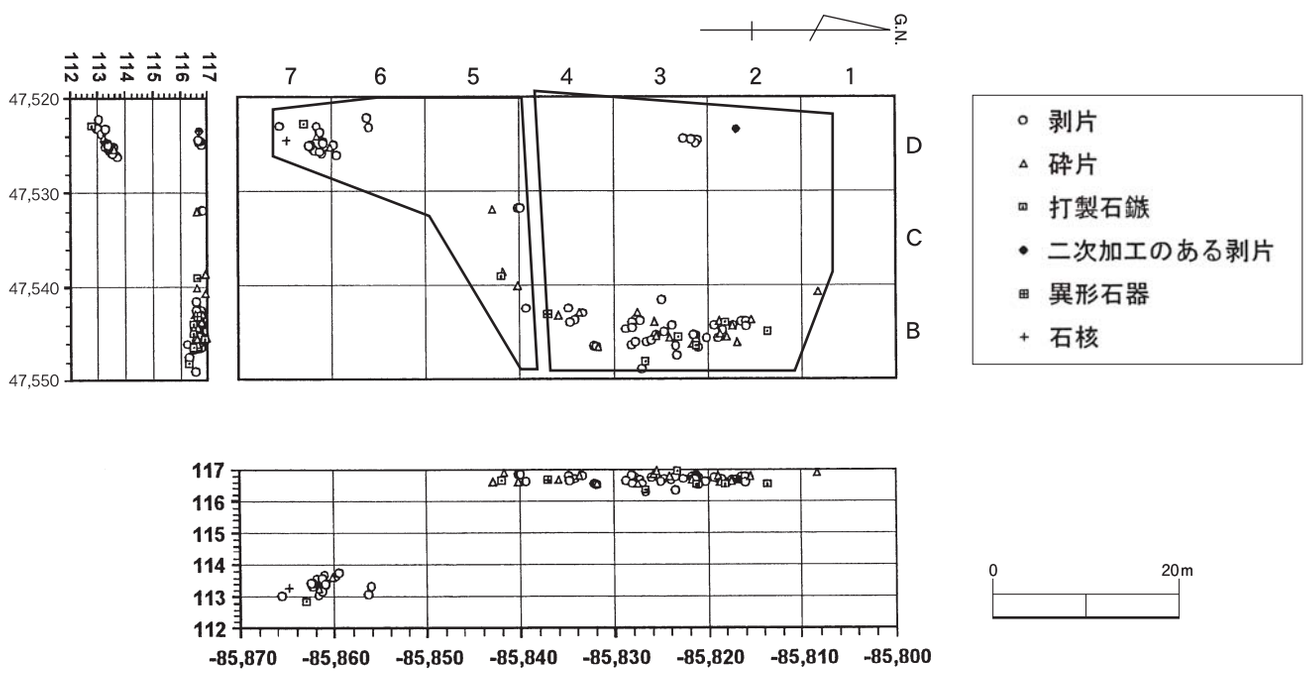
遺物が115点出土した。石鏃８点、二次加工のある剥片２点、異形石器１点、石核１点、剥片81点、砕片21点である。12点を図化した。

【打製石鏃】（第19図67～74）

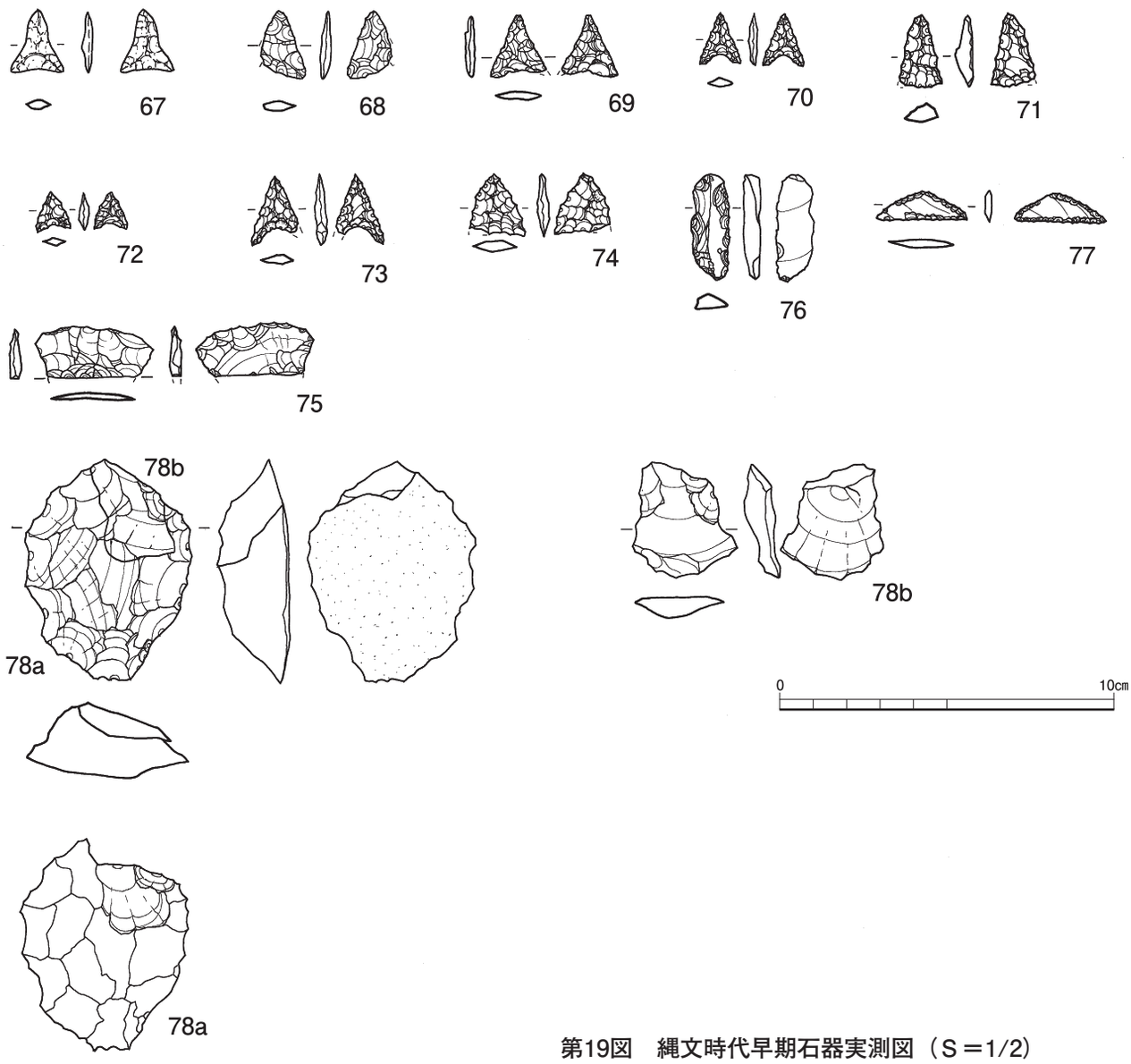
８点出土している。67・68はホルンフェルスＢ製、51はホルンフェルスＣ製で、いずれの石材も剥片は確認できなかったため搬入品と考えられる。70・71・72はチャートＢ製で剥片が64点、砕片が21点確認されている。73・74はチャートＤ製で剥片が13点確認された。各石鏃の詳細は、第12表の石器計測表を参照されたい。チャートＢ・Ｄの打製石鏃は当遺跡で製作されたと考えられる。剥片形状は幅広不定形のものが多い。剥片どうしの接合はみられなかった。

【その他の石器】（第19図75～78）

75・76は二次加工のある剥片で、75はチャートＢ製で表裏両面に二次加工がみられる。76はチャートＥ製で縦長剥片を利用し、左右両端部に刃潰し加工が施されている。基部は打面を残す。77はサヌカイト製の異形石器で、剥片等は出土しておらず搬入品と考えられる。78aはホルンフェルスＣ製の石核で表面は礫面が残り、上下左右方向からの剥片剥離痕が認められる。78bは78aの上面からの剥離衝撃で分割されたと考えられる。



第18図　縄文時代早期石器分布図（Ｓ＝1/800）



第19図　縄文時代早期石器実測図（S＝1/2）

石　材	石材の小分類	特徴（分類基準）	遺物番号	点　数	総重量（g）
ホルンフェルス	B	風化著しく、触ると手に石粉が付着する。風化面は褐炭色で、濁った白色～うすい橙色の筋が入る。	67、68	2	60.3
	C	風化が著しい。風化面は灰白色に近い灰色。礫面はかなり滑らか。サビの粒がみられる。サビの筋、うすい黒の筋が入る。	69、78a、78b	3	101.1
チ　ャ　ー　ト	B	灰色～暗灰色に黒い筋の入るもの。節理が顕著。礫面の状態は不明。薄い部分はにぶく透ける。	70、71、72、75	90	32.0
	D	剥離面はうすい小豆色。透過性はややある。	73、74	15	10.8
	E	暗緑灰色で白い筋が入るもの。ガラス質に近く、剥離面にはひびが多く入っていて、ややでこぼこしている。礫面の状態は不明。	76	4	42.8
そ　の　他	サヌカイト		77	1	0.5

第10表　縄文時代早期石器石材分類表

	石鏃（打製）	石核	二次加工剥片	異形石器	剥片	砕片	合計	重量（g）
ホルンフェルスB	2						2	60.3
ホルンフェルスC	1	1			1		3	101.1
チ　ャ　ー　トB	3		1		64	21	90	32
チ　ャ　ー　トD	2				13		15	10.8
チ　ャ　ー　トE			1		3		4	42.8
その他（サヌカイト）				1			1	0.5
合　計	8	1	2	1	81	21	115	247.5

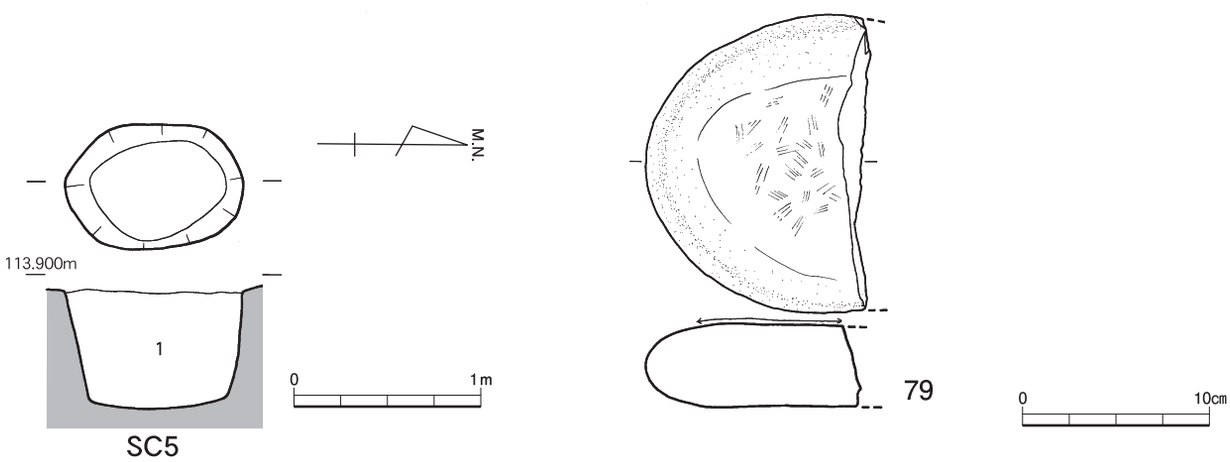
第11表　縄文時代早期石器石材組成表

遺物番号	グリッド	層	取り上げ番号	石材	X座標	Y座標	Z座標	器種	長さ	幅	厚さ	重量	観察所見
67	A区	Ⅳ	Ⅳ	ホルンフェルスB	−	−	−	打製石鏃	1.9	1.6	0.4	0.5	製品。全体的に稜線、打点不明瞭。背腹両面とも素材面は残さず。先端部・両脚部は丸みを帯びる。
68	B4-d	Ⅸ	9078の５	ホルンフェルスB	-85818.080	47548.007	116.499	打製石鏃	2.0	1.4	0.4	0.6	製品。背腹両面とも素材面は残さず。右脚欠損。先端も僅かに欠損。作用部は交互剥離による調整。先端から調整を施す。
69	D5-d	Ⅵ	6044	ホルンフェルスC	-85821.176	47552.930	116.504	打製石鏃	1.9	1.7	0.4	0.6	製品、背腹両面とも素材面は残さず。先端・右脚欠損。作用部は交互剥離による調整。
70	C4-b	Ⅳ	4219	チャートB	-85813.555	47550.053	116.498	打製石鏃	1.6	1.3	0.4	0.4	製品、背腹両面とも素材面は残さず、丁寧な押圧により剥離を施す。作用部は交互剥離による調整。先端から調整を施す。
71	E5-c	Ⅵ	6024	チャートB	-85826.615	47556.397	116.325	打製石鏃	2.2	1.3	0.6	0.9	未製品か。背腹両面とも素材面は残さず。作用部は交互剥離による調整。
72	D5-d	Ⅵ	6113	チャートB	-85841.950	47538.132	116.611	打製石鏃	1.1	1.1	0.3	0.2	製品、背腹両面とも素材面は残さず、丁寧な押圧により剥離を施す。作用部は交互剥離による調整。
73	B2	Ⅴ	5005	チャートD	-85823.139	47551.133	116.900	打製石鏃	2.1	1.4	0.4	0.5	製品、背腹両面とも素材面は残さず、丁寧な押圧により剥離を施す。右脚欠損。作用部は交互剥離による調整か。
74	E7-a	Ⅵ	6070	チャートD	-85862.876	47505.921	112.818	打製石鏃	1.8	1.7	0.4	0.9	背腹両面とも素材面は残さず。左脚欠損。作用部は交互剥離による調整。
75	E3-b	Ⅳ	Ⅳ(確認調査)	チャートB	−	−	−	二次加工のある剥片	1.6	3.5	0.3	2.3	表裏両面に二次加工が認められる。
76	D1-b	Ⅲ	3087	チャートE	-85816.885	47507.011	116.683	二次加工のある剥片	3.2	1.2	0.7	1.9	縦長剥片を利用。左右両端部に刃潰し加工。基部は打面を残す。
77	B3-b	Ⅲ	3053	サヌカイト	-85837.004	47546.189	116.640	異形石器	2.6	1.4	0.2	0.5	二等辺三角形状
78a	D7-b	Ⅲ	3084	ホルンフェルスC	-85864.774	47509.344	113.267	石核	6.5	4.9	1.9	61.6	上下左右方向からの剥片剥離痕が認められる。
78b	A区	Ⅰa	Ⅰa	ホルンフェルスC	−	−	−	剥片	3.8	3.0	0.7	7.2	78aの上面からの剥離衝撃で分割されたと考えられる。

第12表　縄文時代早期石器計測表（実測遺物のみ）

第６節　時期不明の遺構と遺物

SC5は削平のためⅧ層で検出された。Ⅹ層まで堀り込まれている。埋土中から遺物が出土がしなかったことと埋土が１層しかでなかったことから時期を決定するには至らなかった。また、台石79はＡ区の樹痕跡から出土した。砂岩製である。



第20図　時期不明の土坑・遺物実測図（Ｓ＝1/40，1/4）

〔時期不明土坑観察表〕

遺構番号	検出面	位　置	検出状況・調査方法	平面形・斜面傾斜等	規模	埋　　土	炭化物
SC5	Ⅷ	丘陵南斜面で長軸は南から北に向かう。D5-b区。	削平されていたため、Ⅷ層で検出。Ⅹ層直上まで掘り込まれる。	平面は楕円形。床面は中央に向かってやや下がる。	長軸（残存）0.9m×短軸（残存）0.7m、堀り込み60cm	１層のみ。樹痕が多く、腐敗したと思われる赤褐色土が所々に入る。	含まない。

〔時期不明の遺物観察表〕

遺物番号	グリッド	層	石材	器種	長さ	幅	厚さ	重量（g）	観察所見
79	A区	樹痕	尾鈴酸性岩類	台石	16	12	4.4	1325.3	−

第13表　時期不明の土坑・遺物観察表

第７節　まとめ

今回の調査においては、後期旧石器時代から縄文時代草創期・早期に至る遺構・遺物が確認されたが、最も重要な成果は縄文時代早期に属する炉穴が検出されたことであろう。そこを中心に出土する石器類は、剥片がほとんどであり、製品と剥片との接合は認められなかったため、製作の直接的な復原はできないが、下記のような特徴が指摘できる。

１　後期旧石器時代Ⅰ期（AT下位）について

各石材の剥片からは削器・スクレイパー・ナイフ形石器の製作については、母岩の礫面除去等は遺跡外ですでに行われ半製品・素材剥片の状態で持ち込まれたものと考えられる。石材に関しては、後期旧石器時代Ⅱ期と比べるとホルンフェルスＢ、流紋岩Ａ・Ｃ等の石材が多く用いられている。編年上は薄手の縦長剥片を利用した小形のナイフ形石器、中形剥片を用いた削器がみられることから、３段階（宮崎旧石器文化談話会2005）に置いてよいだろう。AT下位から石器が出土した周辺遺跡は、八幡第２遺跡、中ノ迫第２遺跡、中ノ迫第３遺跡、国光原遺跡である。

２　後期旧石器時代Ⅱ期（AT上位）について

石材に関しては、後期旧石器時代Ⅰ期と比べるとホルンフェルスＤ、チャートＡ・Ｆ、流紋岩Ｄ、黒曜石Ａ（桑ノ木津留産）・Ｄ（日東産）等の石材が多く用いられている。なお、ホルンフェルスＡは後期旧石器時代Ⅰ期・Ⅱ期とも共通して用いられている。各石器の出土した分布状況からは細石刃が剥片尖頭器・ナイフ形石器と分布を違えている。層位的には本遺跡が斜面上に位置していることもあり、明確な違いは明らかにできなかった。編年上は、剥片尖頭器とナイフ形石器については剥片尖頭器の抉りがはっきりしていることとナイフ形石器が国府型ナイフ形石器の可能性があることから５～６段階（宮崎旧石器文化談話会2005)、細石刃については第８～10段階に入るであろう。AT下位から石器が出土した周辺遺跡は銀座第２遺跡、銀座第３Ａ遺跡、八幡第２遺跡、赤石・天神本遺跡、中ノ迫第２遺跡、中ノ迫第３遺跡、前ノ田村上第２遺跡、国光原遺跡、湯牟田遺跡である。

３　縄文時代草創期について

隆帯文土器が１点のみ出土した。西ノ園遺跡のものと類似していることから草創期中葉～後葉の時期が与えられる。周辺遺跡では八幡第２遺跡、赤石・天神本遺跡から当該期の土器が出土している。

４　縄文時代早期について

(1)　炉穴

炉穴が検出されたが集石遺構は未検出であった。多くの遺跡では両者とも確認されることが多く、また散在する焼化礫が数点確認されたため、集石遺構は現代の削平を受けた可能性も考えられる。生活の場との関係は本遺跡では解明できていない。周辺遺跡では中ノ迫第２遺跡、中ノ迫第３遺跡､国光原遺跡で検出されている。

(2)　土器

貝殻条痕文土器が多数を占めていることが明らかになった。炉穴と出土土器から考えると、炉穴構築の時期と前平式系土器・別府原式系土器・中原式系土器との関連性を、今後の周辺地域の出土状況を考慮しながら検討する必要がある。なお、周辺遺跡では銀座第３Ａ遺跡で出土している。

(3)　石器

本遺跡の石器は剥片がほとんどであり、打製石鏃の出土が特徴として挙げられる。なお、打製石鏃の出土状況は次の２つに分けられる。

石鏃Ａ：単独出土例

石鏃Ｂ：打製石鏃と同一石材の剥片が出土

石鏃Ａはその状況からみて、実際に狩猟等に用いられた結果、回収されずに残された完成品や獲物とともに回収されたものと考えられる。石材はホルンフェルスＢ・Ｄのみである。石鏃Ｂは、遺跡内で打製石鏃が製作された可能性が高い。石材はチャートＢ・Ｄのみである。

以上、簡単にまとめを述べてきたが、今回の調査では特に後期旧石器時代と縄文時代早期の遺構・遺物が確認されたことが成果としてあげられる。

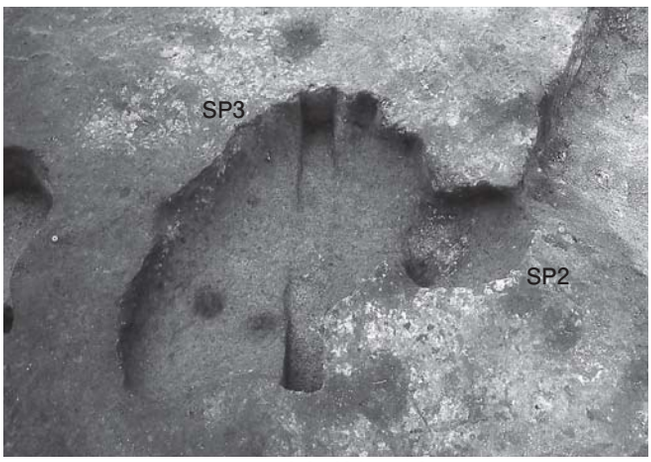
【引用・参考文献】

宮崎県埋蔵文化財センター　2006『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅵ』　－宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書131集－
宮崎市教育委員会　1996「椎屋形第１遺跡･椎屋形第２遺跡･上の原遺跡」
九州縄文研究会宮崎考古学会　2003「九州縄文時代の集石遺構と炉穴」
南九州縄文研究会「南九州貝殻文系土器Ⅱ」～宮崎・熊本・大分編～
宮崎県埋蔵文化財センター　2005『牧内第１遺跡（四次調査)』第104集
宮崎県埋蔵文化財センター　2006『唐木戸第４遺跡』第126集
「原色岩石図鑑」保育社
金丸武士2004「宮崎県における縄文時代早期前半期の土器群―別府原式の設定」『宮崎考古』第19号宮崎考古学会
宮崎旧石器文化談話会　2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66号

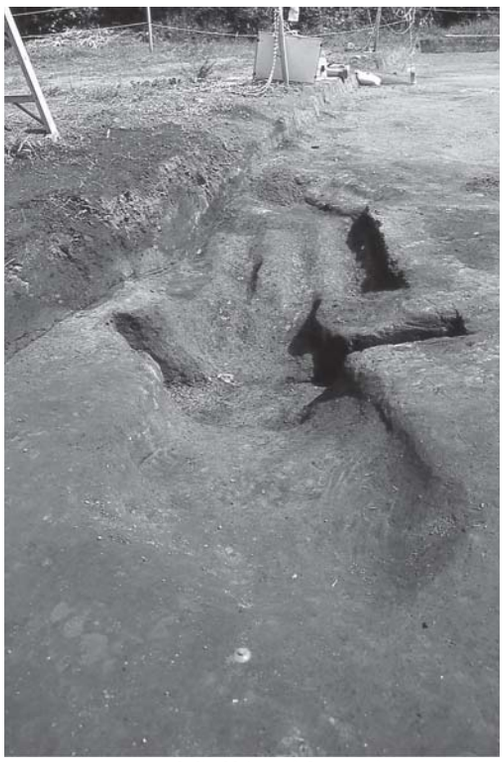
登り口第 1 遺跡（上空南方向から展望）

登り口第 1 遺跡（遺跡全景）

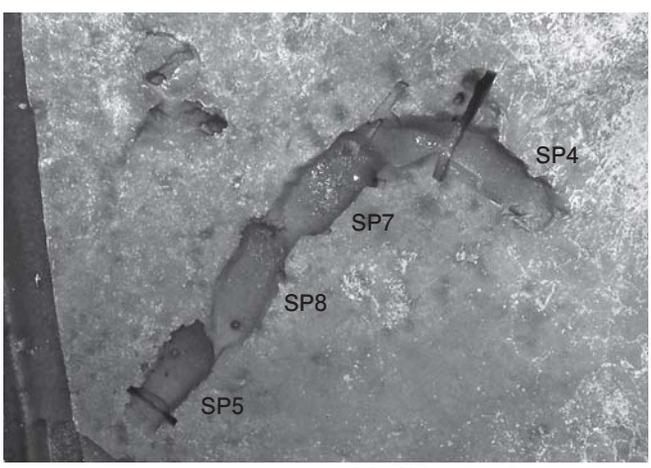
図版２



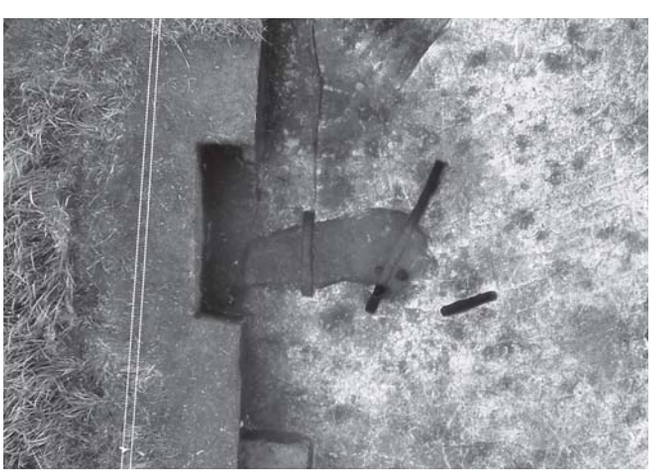
SP2・SP3完掘状況（南から）



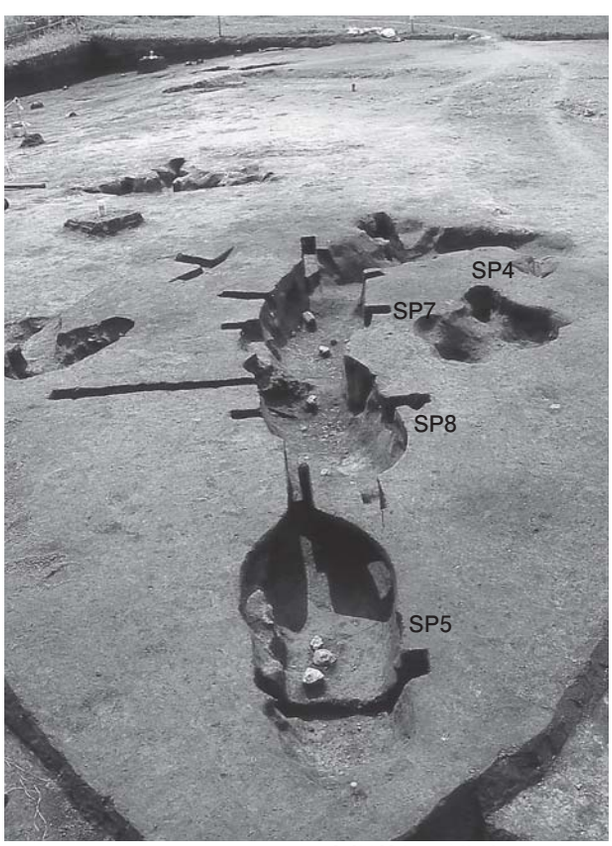
SP1完掘状況（南から）



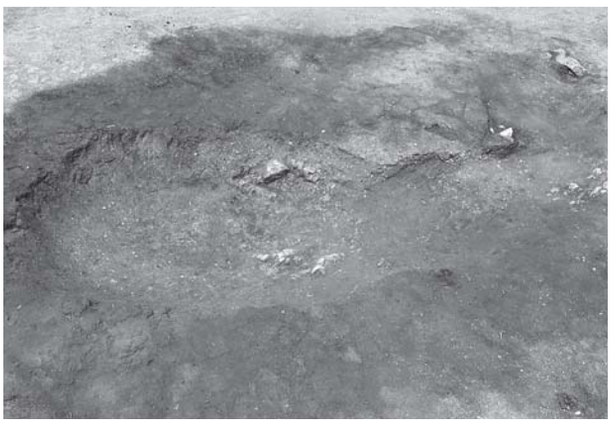
SP4・SP5・SP7・SP8完掘状況（上空から）



SP6完掘状況（上空から）



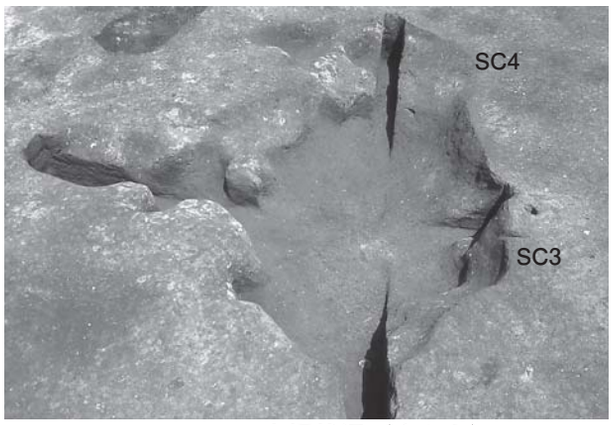
SP4・SP5・SP7・SP8完掘状況（北東から）



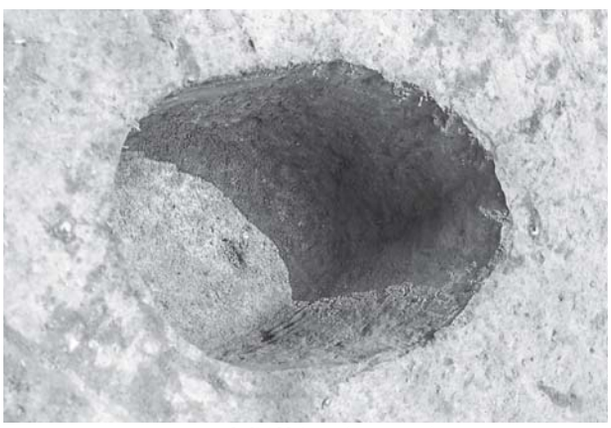
SP9完掘状況（東から）

SC1完掘状況（南東から）

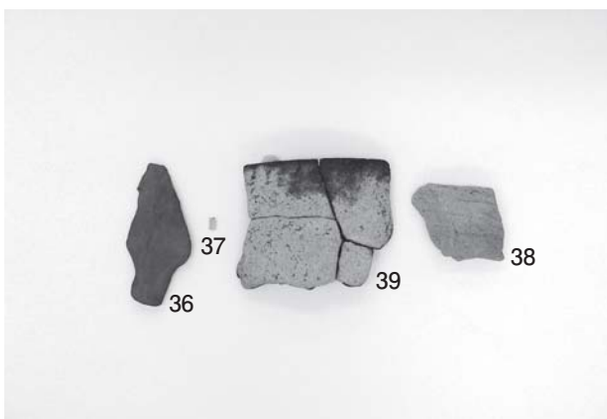
SC2完掘状況（西から）



SC3・SC4完掘状況（東から）

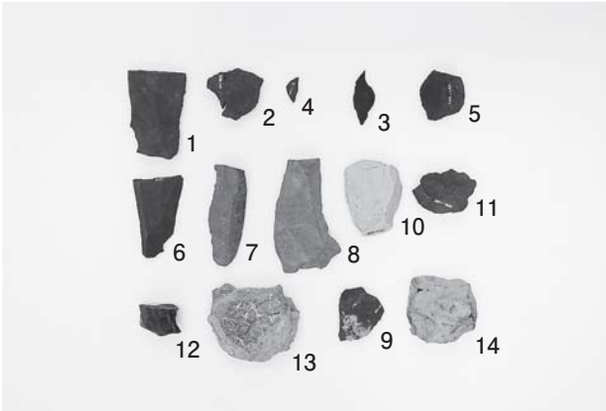


SC5完掘状況（西から）

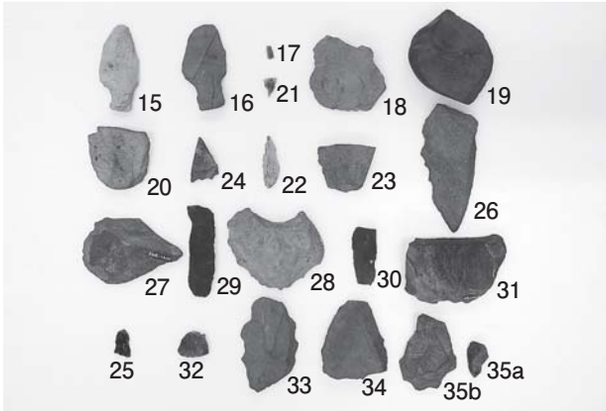


遺構出土の遺物

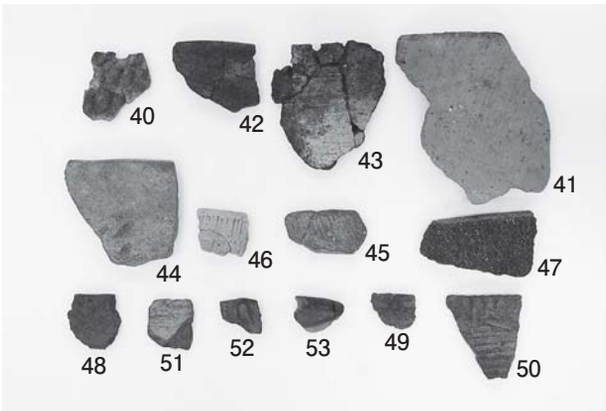
図版４



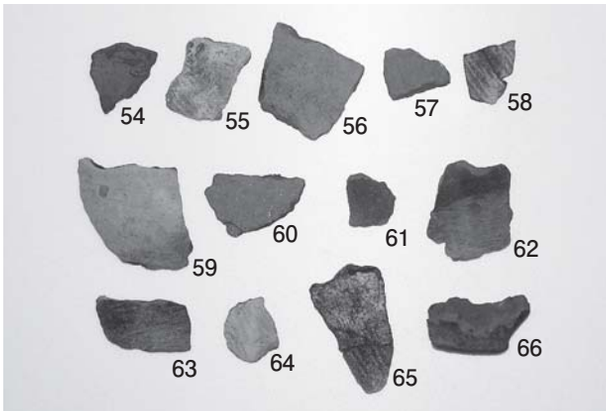
後期旧石器時代Ⅰ期出土遺物：石器



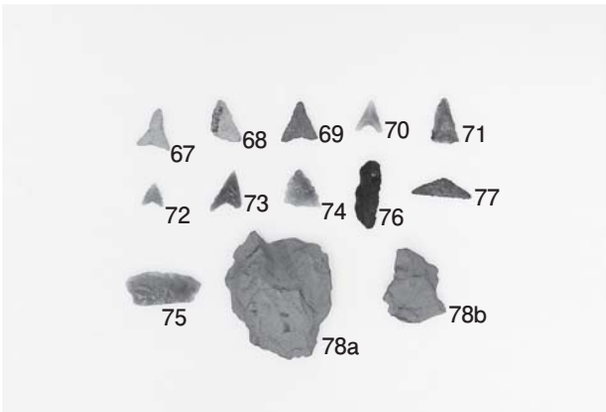
後期旧石器時代Ⅱ期出土遺物：石器



縄文時代出土遺物：縄文土器（１）



縄文時代出土遺物：縄文土器（２）



縄文時代出土遺物：石器

時期不明の出土遺物

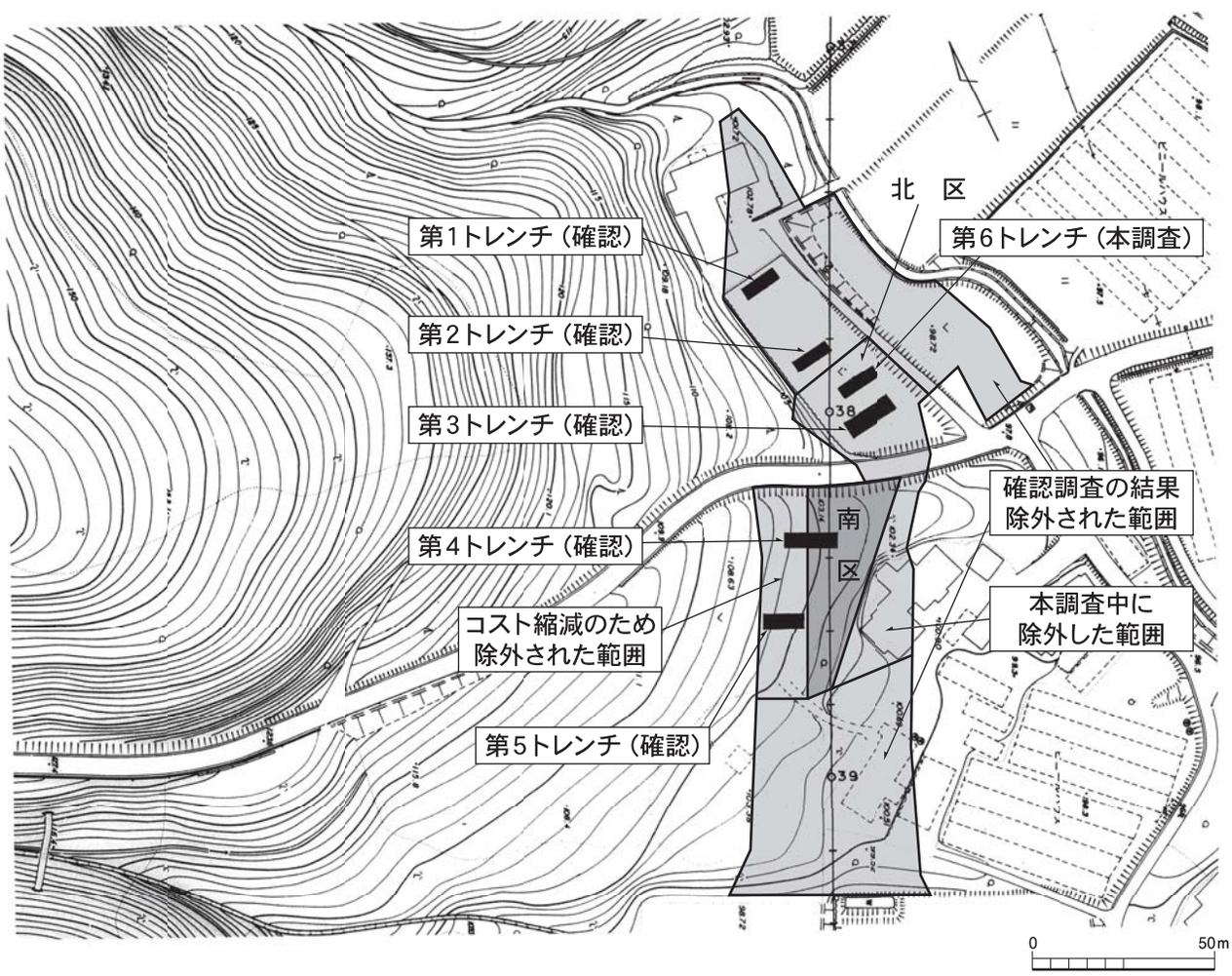
第Ⅲ章　登り口第２遺跡の調査

第１節　確認調査の概要

確認調査は、平成17年２月14日～25日に、調査対象面積8,120㎡に対し、５箇所のトレンチ（350㎡）を設定して行った（第21図）。

第１～第３トレンチは北区に設置した。第１トレンチは、東（河川）側に向かって急激に傾斜しながら層が堆積しており、地下水の通り道と目される陥没坑が確認されたため、その時点で掘り下げを中断した。同様に、第２トレンチも東側に向かって傾斜しながら堆積しており、K-Ahの堆積後に形成されたと見られる谷状の流路が確認された。この流路によってK-Ah層は断裂、消失したものと見られる。表土から銭貨２点（永楽通宝、洪武通宝）が出土したのみで、K-Ah層下位からは遺物は確認されなかった。第３トレンチには傾斜がほとんど見られなかったが、第２トレンチ同様谷状の流路が確認された。表土下の黒褐色土層から中世の土師器杯・皿、備前系擂鉢が出土したが、K-Ah層下位では遺物は確認されなかった。第４、第５トレンチは南区に設置した。第４トレンチは西から東に傾斜する丘陵に設置した。家屋の造成の影響が見られる北区に比べて地形の改変は少なく、比較的安定した堆積状況を示していた。K-Ah上位の黒色土層から古墳時代の甕形土器などが、K-Ah下位の黒褐色土層からは縄文時代早期に属すると見られる土器片と剥片が各１点出土した。なお、第５トレンチは深い攪乱が確認され、更にそれ以南は基盤層が露出した状況であったため、本調査の必要はないと判断した。

これにより、当初の調査対象面積8,120㎡から確認調査面積350㎡及び除外範囲の面積2,770㎡を除いた5,000㎡を本調査対象面積とした。



第21図　遺跡周辺図及びトレンチ配置図（Ｓ＝1/2,000）

第２節　発掘調査・整理作業の流れ

確認調査後、コスト縮減に伴う道路幅変更により、調査面積は3,800㎡に縮小された。

本調査は、町道を境に調査区を北区と南区に分け、平成17年７月14日から実施した。北区（700㎡）は、確認調査で遺物が出土した第３トレンチ周辺の約30㎡をトレンチ（第６トレンチ）調査した。その結果、流路以外にも水分を多量に含む湿地状の粘質土が広範囲に広がっていることが確認された。遺物も造成土から出土したのみであったため、層の堆積状況を記録後、調査を終了した。一方、本調査の中心となった南区（3,100㎡）は、西から東に緩やかに傾斜した牧草地であった。昭和48年頃に草地造成事業に伴う削平を受けており、表土はこの造成による客土であった。また、トレンチ調査の結果、調査区の東側及び南半部は大規模な攪乱を受けていることが判明したため、南区の調査対象面積は900㎡となった。調査は、遺物包含層であるⅣ層（軟質黒褐色土）、Ⅴ層（硬質黒褐色土）上面での遺構、Ⅳ層以下の遺構・遺物の有無の確認、記録作成を行った。

調査は、まず重機でⅠ・Ⅱ層除去した後、Ⅳ層（軟質黒褐色土）上面で国土座標に基づく杭を設置し、10mグリッドを設定した。グリッド名は西から東にＡ～Ｉ、北から南に１～10とし、北西の杭を基準にその組合せで表記することとした。

調査の結果、南区東端部（Ｇ－３グリッド，Ｇ－４グリッド）のⅤ層上面から古墳時代の竪穴住居跡１軒が検出された。その他に、溝２条と小穴60基が検出されたが、いずれも時期や詳細は不明であった。遺物の多くは竪穴住居跡の埋土及びその周辺に集中し、中央部から台石、壁帯溝から完形の小型丸底壷、埋土中から甕、高坏などが出土した。その他の遺物は大半が土師器の小片であった。表土中からも細片化の著しい土師器が多量に出土した。Ⅴ層では縄文時代早期の遺構検出を行った。遺構は確認されなかったが、剥片、打製石斧、石核が出土した。

８月29日に空中写真撮影を実施し、９月１日までに掘り下げ・遺物取上げ・遺構実測等の作業を終え９月２日に重機を使用して埋め戻しを行った。

遺物整理については、全工程を埋蔵文化財センター本館で行った。特に竪穴住居跡に伴う土師器の接合に重点を置いた。

第３節　層　序

南区は、斜面地であることに加えて草地造成補助事業に伴う削平の影響もあり、全域を通して層が良好に堆積していないことから位置によって堆積状況が大きく異なる。特に表土直下の層は、部分的にK-Ahが残存するものの場所によって複数の異なる層が混在する状況であった。また、南区南半部には部分的に大規模な攪乱を受けた部分もあった。以下に南区の基本層序を示す。

なお、第22図は本調査で北区に設定した第６トレンチの北側及び東側壁断面、第23図は南区西側壁断面、第24図は南区北側壁断面の土層を示したものである。

Ⅰ層　褐色土（Hue7.5YR4/4）

昭和48年以降の草地造成補助事業に伴う客土で、部分的にⅧ層をブロック状に含む。

Ⅱ層　暗褐色土（Hue7.5YR3/3）

暗褐色土をベースに、赤褐色～黒褐色土、K-Ah粒、炭粒を含む複数の異なる層が混在している。

Ⅲ層　鬼界アカホヤ（K-Ah）※土色は未記録

南区北半部の一部に堆積している。

Ⅳ層　軟質黒褐色土（Hue7.5YR3/2）

粒子が細かく、しまりが弱い。縄文時代早期から古墳時代の遺物を包含する。

Ⅴ層　硬質黒褐色土（Hue7.5YR2/2）

南区のほぼ全域に堆積しており、縄文時代早期の遺物を包含する。Ⅲ層よりしまりが強い。ＭＢ０に相当する。

Ⅵ層　暗褐色ローム（Hue7.5YR3/3）

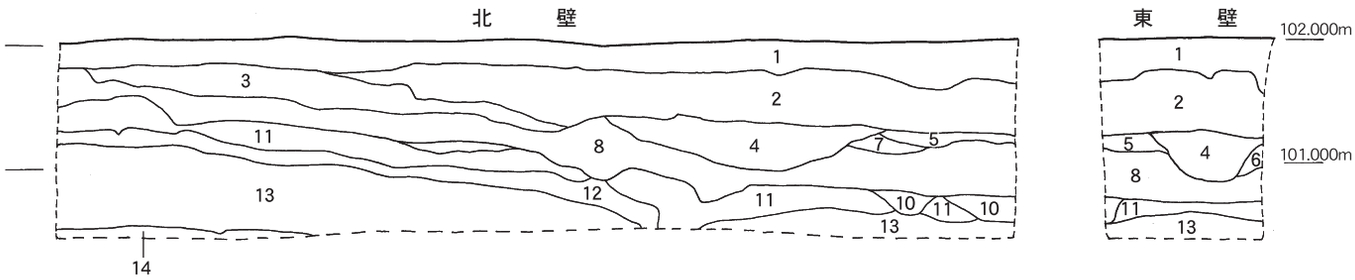
粘性が強いローム層。遺構、遺物は含まない。ＭＬ１に相当する。

Ⅶ層　ＡＴ二次堆積

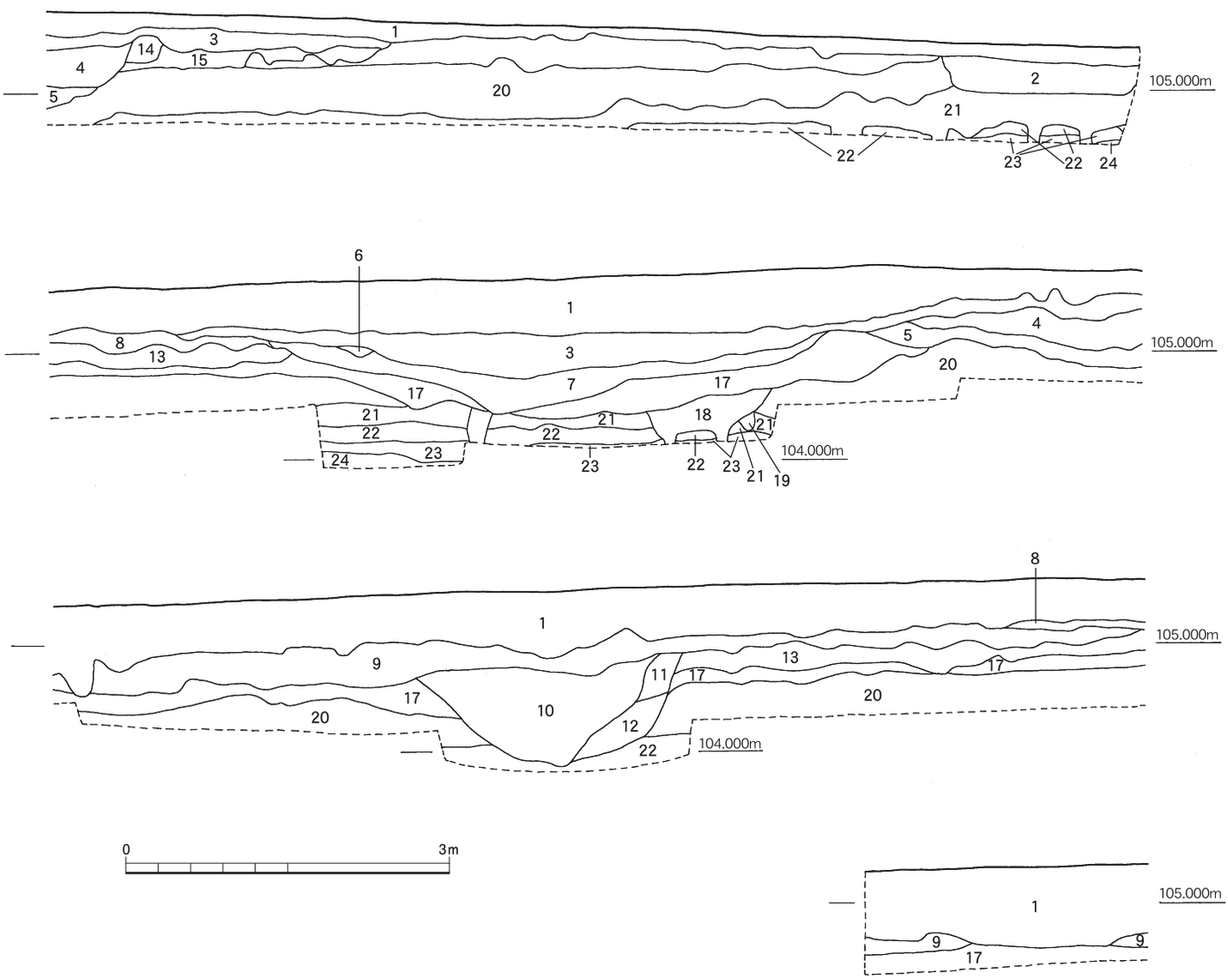
Ⅷ層　ＡＴ一次堆積

Ⅸ層　明褐色土（Hue7.5YR5/8）

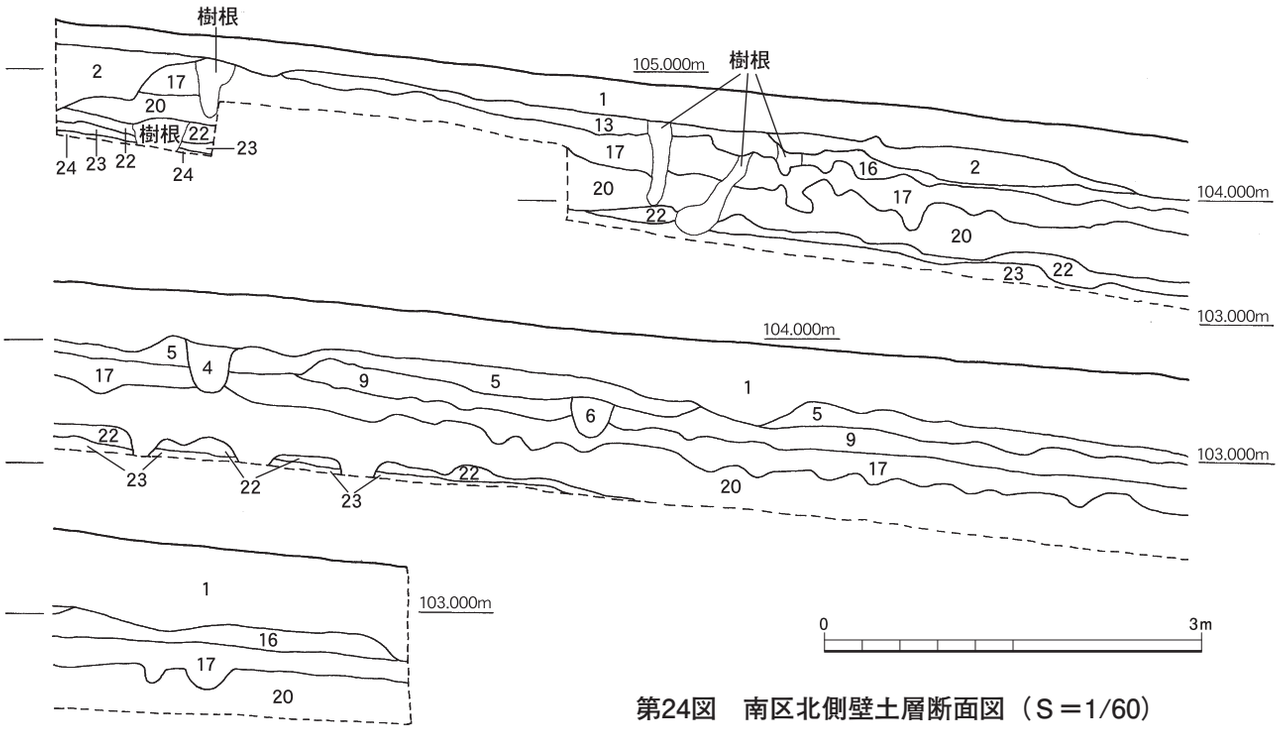
粘性が非常に強い。山土と思われる。



第22図　第６トレンチ土層断面図（Ｓ＝1/60）



第23図　南区西側壁土層断面図（Ｓ＝1/60）



第24図　南区北側壁土層断面図（S＝1/60）

第６トレンチ

層番号	層　名	土　色	粘性	しまり	備　　考
1	表土	－	－	－	
2	造成土	－	－	－	炭粒や小礫を若干含む。
3	造成土	－	－	－	２層より黒みが強い。
4	溝埋土	－	－	－	小礫、砂、粘質土が交互に堆積する。水の流れた痕跡あり。
5	黒褐色土	10YR2/3	中	中	炭化粒と赤色粒をわずかに含む。
6	黒色土	2.5YR2/1	中	中	４層を斑に含む。
7	黒褐色土	10YR2/2	中	中	炭化粒と赤色粒をわずかに含む。
8	黒褐色土	10YR3/1	やや強	やや強	炭化粒と赤色粒をわずかに含み、水分が多い。
9	黒褐色土	10YR3/1	やや強	やや強	黒色の土を斑に含む。
10	黒褐色土	10YR3/1	やや強	やや強	K-Ahを斑に、わずかに含む。水分が多い。
11	K-Ah二次堆積層	－	－	－	斜面を流れ、湿地の上に堆積したと思われる。
12	黒色粘質土	10YR2/1	やや強	やや弱	褐色土をブロック状にわずかに含む。水分が多い。
13	黒褐色粘質土	10YR3/1	強	強	褐色土をブロック状にわずかに含む。水分が多い。
14	褐色粘質土	7.5YR4/3	やや強	中	AT、淡褐色粘質土を斑に含む。

※　－は記録をしていないため記載できなかった項目。

南区西側壁

基本層序	層番号	層　名	土　色	粘性	しまり	備　　考
Ⅰ	1	褐色土	7.5YR4/4	弱	強	昭和48年以降草地造成補助事業に伴う客土。地盤の土がブロック状に入り、現代のゴミも混じる。
Ⅱ	2	黒褐色土	7.5YR2/2	弱	中	炭化物を多量に含む。戦前～戦後にかけて行っていた炭焼きの穴と思われる。
	3	暗褐色土	7.5YR3/3	弱	中	炭化物を含む。
	4	黒褐色土	7.5YR3/2	中	弱	K-Ahをブロック状に含み、微量の炭化物も含む。全体的に褐色系の土を粒状に含む。
	5	黒褐色土	7.5YR2/2	中	弱	４層とほぼ同じだが、K-Ahと炭化物をほとんど含まない。
	6	暗褐色土	7.5YR3/3	弱	中	黒褐色土をブロック状に含む。
	7	褐色土	7.5YR4/3	中	中	褐色土のブロックをベースに暗褐色土を粒状に含む。ＳＥ１の埋土。
	8	黒褐色土	7.5YR3/2	中	弱	赤色～赤褐色の粒、K-Ah、炭粒を含む。
	9	暗褐色土	7.5YR3/3	中	中	暗褐色土をベースに褐色土が斑状に混じる。
	10	風倒木痕	－	－	－	K-Ah～ＡＴまでの粒をブロック状に含む。
	11	黒褐色土	7.5YR3/2	－	－	10層に伴い落ち込んだ土。K-Ahを粒状に含む。
	12	黒褐色土	7.5YR3/1	中	中	基本層序Ⅲ層の土が10層に伴い落ち込んだ土。
Ⅱ	13	褐色土	7.5YR4/4	中	弱	K-Ah二次堆積層。
	14	褐色土	7.5YR4/4	中	弱	13層とほぼ同じであるが、K-Ahの量が若干多い。
	15	褐色土	7.5YR4/4	中	弱	14層よりさらにK-Ahの量が多い。
Ⅲ	16	－	－	－	－	基本層序Ⅲ層。K-Ah一次堆積層。
Ⅳ	17	黒褐色土	7.5YR3/2	中	弱	基本層序Ⅳ層。
	18	－	－	－	－	22層を斑に含むSE1の埋土。
	19	暗褐色ローム	7.5YR3/3	中	中	21層をベースに22層が若干混じる。
Ⅴ	20	黒褐色土	7.5YR2/2	中	強	基本層序Ⅴ層。MB0に相当。上面で遺構検出。
Ⅵ	21	暗褐色ローム	7.5YR3/3	中	中	基本層序Ⅵ層。ML1に相当。
Ⅶ	22	－	－	－	－	基本層序Ⅶ層。AT二次堆積。
Ⅷ	23	－	－	－	－	基本層序Ⅷ層。AT一次堆積。
Ⅸ	24	明褐色土	7.5YR5/8	強	中	基本層序Ⅸ層。

※　－は記録をしていないため記載できなかった項目。

南区北側壁

基本層序	層番号	層　名	土　色	粘性	しまり	備　　考
Ⅰ	1	褐色土	7.5YR4/4	弱	強	昭和48年以降草地造成補助事業に伴う客土。地盤の土がブロック状に入り、現代のゴミも混じる。
Ⅱ	2	黒褐色土	7.5YR2/2	弱	中	炭化物を多量に含む。戦前～戦後にかけて行っていた炭焼きの穴と思われる。
	4	黒褐色土	7.5YR3/2	中	弱	K-Ahをブロック状に含み、微量の炭化物も含む。全体的に褐色系の土を粒状に含む。
	5	黒褐色土	7.5YR2/2	中	弱	４層とほぼ同じだが、K-Ahと炭化物をほとんど含まない。
	6	暗褐色土	7.5YR3/3	弱	中	黒褐色土をブロック状に含む。
	9	暗褐色土	7.5YR3/3	中	中	暗褐色土をベースに褐色土が斑状に混じる。
	13	褐色土	7.5YR4/4	中	弱	K-Ah二次堆積層。
Ⅲ	16	－	－	－	－	基本層序Ⅲ層。K-Ah一次堆積層。
Ⅳ	17	黒褐色土	7.5YR3/2	中	弱	基本層序Ⅳ層。
Ⅴ	20	黒褐色土	7.5YR2/2	中	強	基本層序Ⅴ層。MB0に相当。上面で遺構検出。
Ⅶ	22	－	－	－	－	基本層序Ⅶ層。AT二次堆積。
Ⅷ	23	－	－	－	－	基本層序Ⅷ層。AT一次堆積。
Ⅸ	24	明褐色土	7.5YR5/8	強	中	基本層序Ⅸ層。

※　－は記録をしていないため記載できなかった項目。

第14表　土層観察表

第４節　縄文時代早期の遺物

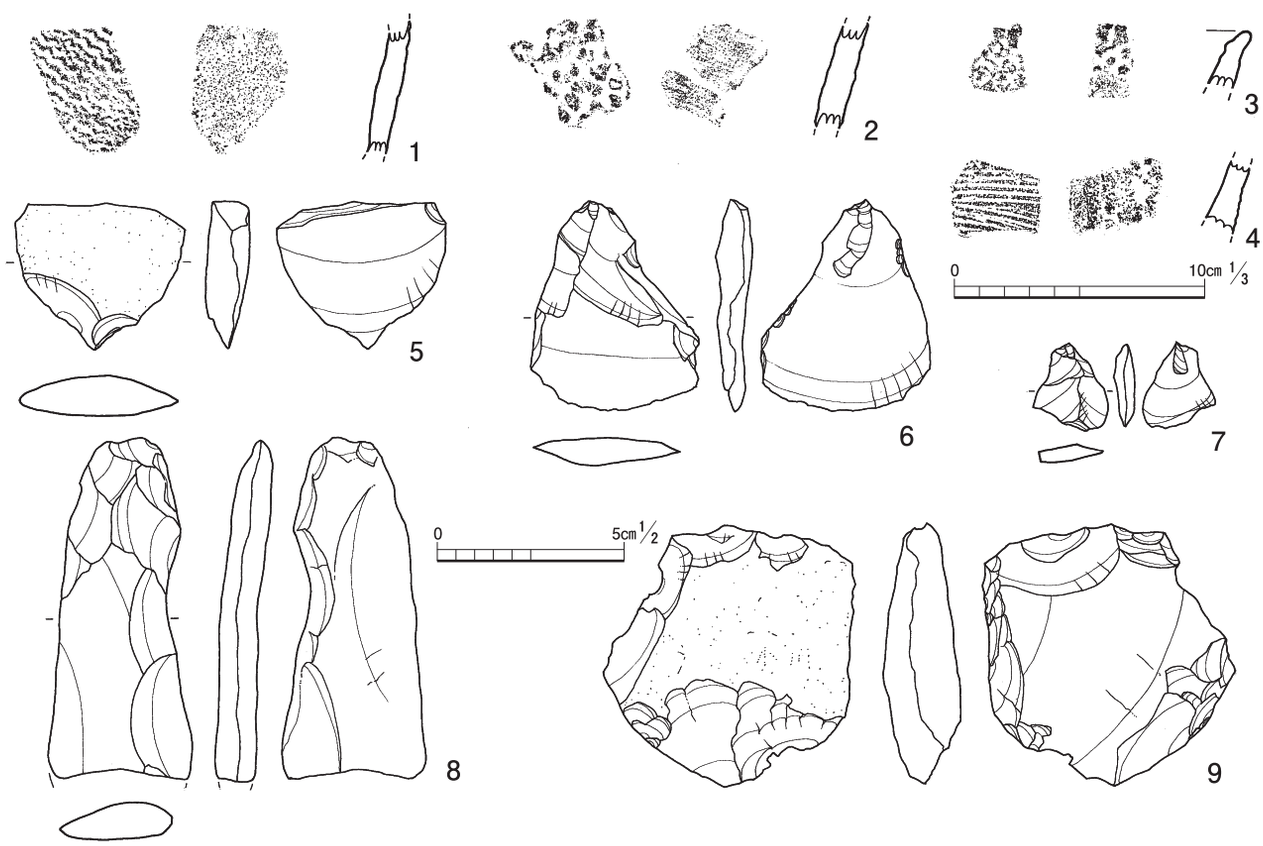
縄文時代の遺構は検出されなかったが、早期に属する土器片４点と石器５点が出土した。土器片はいずれも小片であった。出土位置が不明な４以外の遺物はいずれもⅣ層及びⅤ層から出土しているが、特定の範囲でまとまって出土するという状況は見られなかった。

１　土　器（第25図　１～４）

１は山形押型文を施した深鉢の胴部である。Ｅ－３グリッドのⅣ層より出土した。外面は斜位の山形文が、内面は無文でナデ調整が施される。また上部には、輪積み部分が欠落した跡が見られる。２、３は楕円押型文土器である。いずれもＦ－３グリッドのⅣ層から出土した。２は深鉢の胴部である。斜位の楕円押型文が施される。３は深鉢の口縁部である。端部は先細りしながらわずかに外反する。外面は縦位、内面は横位の楕円押型文が施される。２と比べて施文の粒が小さい。４は貝殻条痕文土器である。確認調査で出土したものであるが、出土位置及び層位は不明である。外面に貝殻腹縁による横位の浅い条痕が施される。

２　石　器（第25図　５～９）

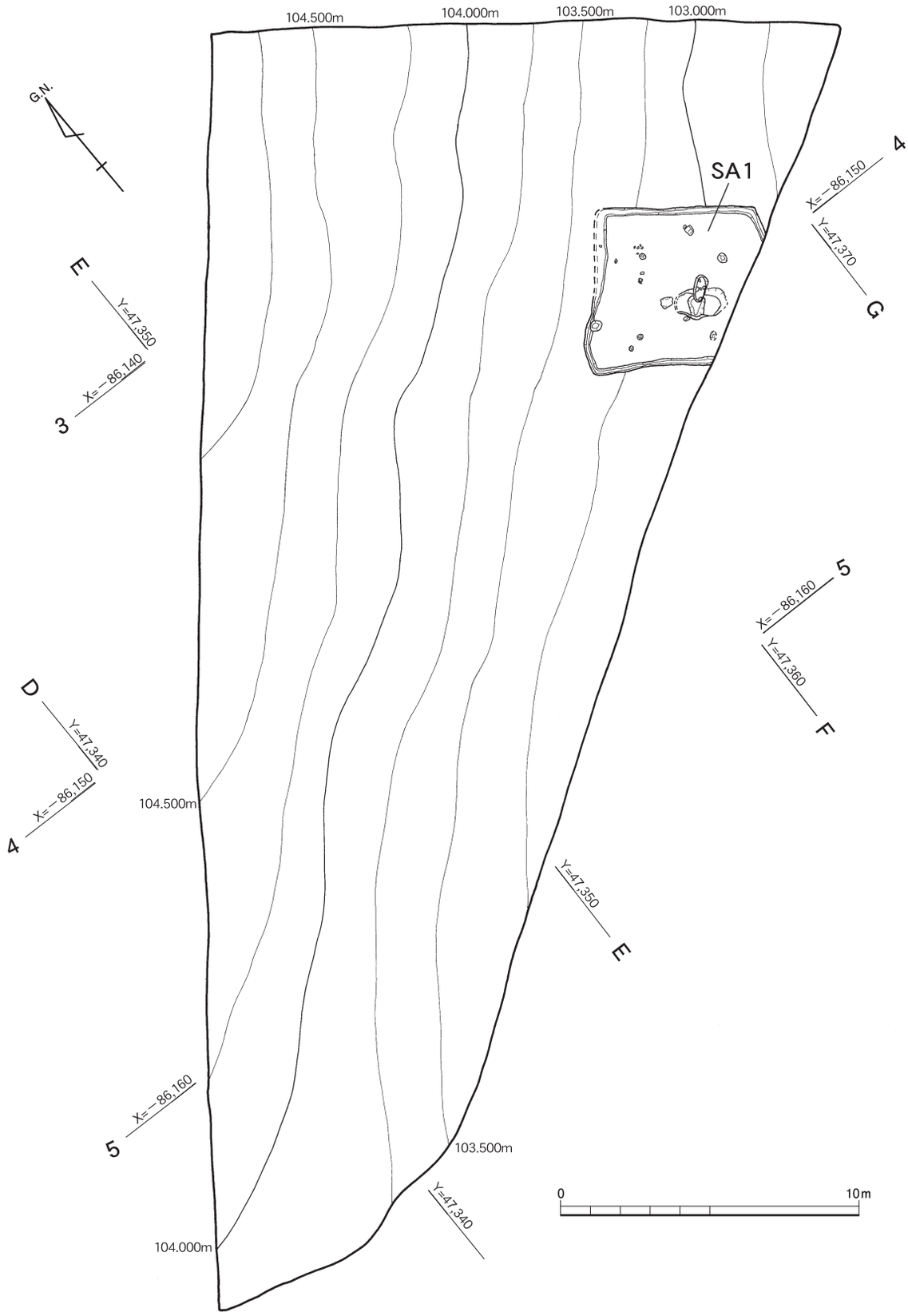
５～７は剥片である。５はＥ－４グリッドのⅣ層より出土した。ホルンフェルス製で、粗い二次加工の痕跡が認められる。背面に礫面を残し、打面側は大きく欠損している。一部に鋭く尖った先端を有していることから錐として利用していた可能性も考えられる。６は第１トレンチのⅤ層より出土した。頁岩製の末端が広がる剥片で、両側縁に使用痕と思われる微細剥離が認められる。７はＦ－３グリッドのⅣ層で出土した。チャート製の不定形剥片である。８は打製石斧である。第１トレンチのⅤ層から出土した。ホルンフェルス製で、風化が著しく剥離は鮮明でない。刃部側が大きく欠損している。９は石核である。第１トレンチのⅤ層から出土した。ホルンフェルス製で、分割礫に対して分割面に向かって求心上に剥離している。目的剥片は、小型幅広剥片と思われる。



第25図　縄文時代早期遺物実測図（１～４…Ｓ＝1/3　５～９…Ｓ＝1/2）

第５節　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構としては、南区東端部（Ｇ－３グリッド，Ｇ－４グリッド）のＶ層上面から竪穴住居跡１軒（SA1）が検出された（第26図）。遺物の大半は、Ⅳ層及び１号竪穴住居跡（SA1）の埋土、土坑（SC1・SC2）、貼床から出土した。

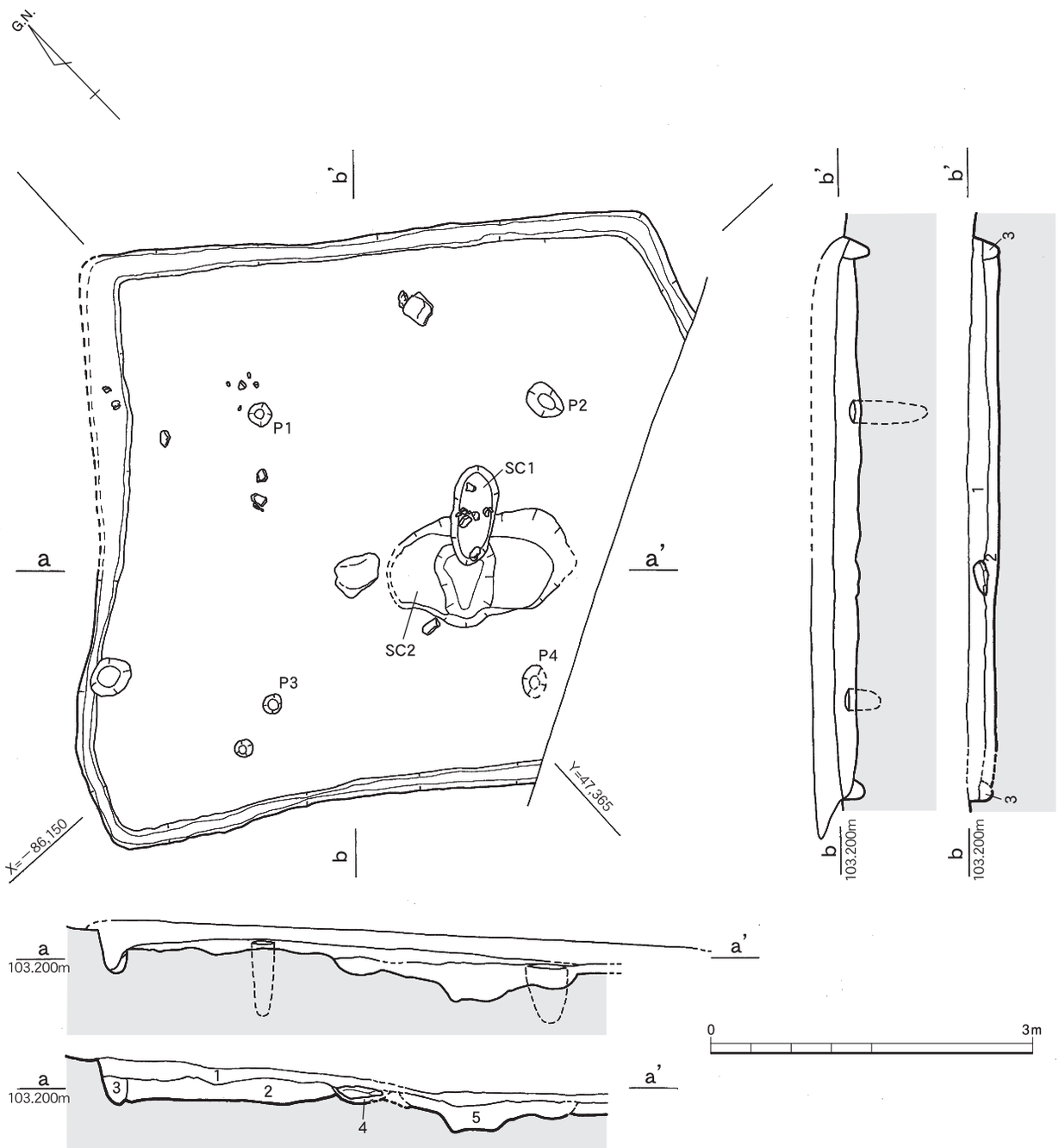


第26図　古墳時代遺構分布図（Ｓ＝1/200）

1　１号竪穴住居跡（SA1）（第７図）

【構　造】（第27図）

南区東壁沿いＧ－３、Ｇ－４グリッドに位置し、南東部分が調査区外に向かって延びる。5.2m×5.2mの隅丸方形プランを呈し、現存壁高は約20cmを測る。全周に幅約20cm深さ約10cmの壁帯溝が巡らされており、約10cm厚の貼床が全面に施され、床面はほぼ水平を保つ。貼床は、埋土と比べK-AhやK-Ah直下の暗褐色ロームの小ブロックを多く含んでおり硬くしまっている。壁帯溝の埋土は、粘性・しまりとも貼床の土より弱く、K-Ahの粒を若干多く含む。主柱穴はほぼ対角線上に４本(P1～P4)確認された。主柱穴間の芯々距離はP1～P2及びP1～P3は2.7m、P2～P4は2.6m、P3～P4は2.4mを測る。主柱穴の最大径はP1が20cm、P2が36cm、P3が18cm、P4が30cmで、床面からの深さはそれぞれ30cm、22cm、10cm、20cmを測る。断面形状はすべて逆台形を呈し、柱痕跡は確認されなかった。



第27図　１号竪穴住居跡（SA1）実測図（Ｓ＝1/60）

a－a’

層番号	層　名	土　色	粘性	しまり	備　　考
1	黒褐色土	10YR2/3	中	中	K-Ahの粒をごく少量含む。SA1埋土。
2	暗褐色土	10YR3/3	弱	強	K-Ahと５層をブロック状に含む。土色は３層と似るが、硬くしまる。SA1貼床。
3	暗褐色土	10YR3/3	中	中	K-Ahの粒を含む。SA1壁帯溝埋土。
4	黒褐色土	10YR2/3	中	中	石を据えるための埋土。
5	褐色土	10YR4/4	中	強	焼土の粒とかたまりを多量に含み、炭粒も多い。SC2埋土。

b－b’

層番号	層　名	土　色	粘性	しまり	備　　考
1	黒褐色土	10YR2/3	中	中	K-Ahの粒をごく少量含む。SA1埋土。
2	暗褐色土	10YR3/3	弱	強	K-Ahと５層をブロック状に含む。土色は３層と似るが、硬くしまる。SA1貼床。
3	暗褐色土	10YR3/3	中	中	K-Ahの粒を含む。SA1壁帯溝埋土。

第15表　１号竪穴住居跡（SA1）土層観察表

中央部からやや東側の位置で土坑２基（SC1、SC2）が検出された。SC1は長軸92㎝、短軸40㎝の楕円形を呈し、埋土中から複数の甕（12・13）の破片がまとまって出土している。SC2は長軸約２ｍ、短軸約１ｍの亜楕円形を呈し、SC1に切られる。中央部には長軸70㎝、短軸50㎝の楕円形の掘り込みが見られ、最深部は検出面から23㎝を測る。SC1同様埋土中から複数の甕（12・13）の破片が出土している。SC1、SC2ともわずかに焼土が確認されていることから火処であったと思われる。

【遺　物】（第28図　10～24）

床面で台石（23）、土師器の小片が、貼床から磨石（24）が出土したが、いずれも時期比定の要素とはならなかった。埋土からは複数の甕、壷、高坏が、また壁帯溝の埋土からは完形の小型丸底壷（17）が出土した。

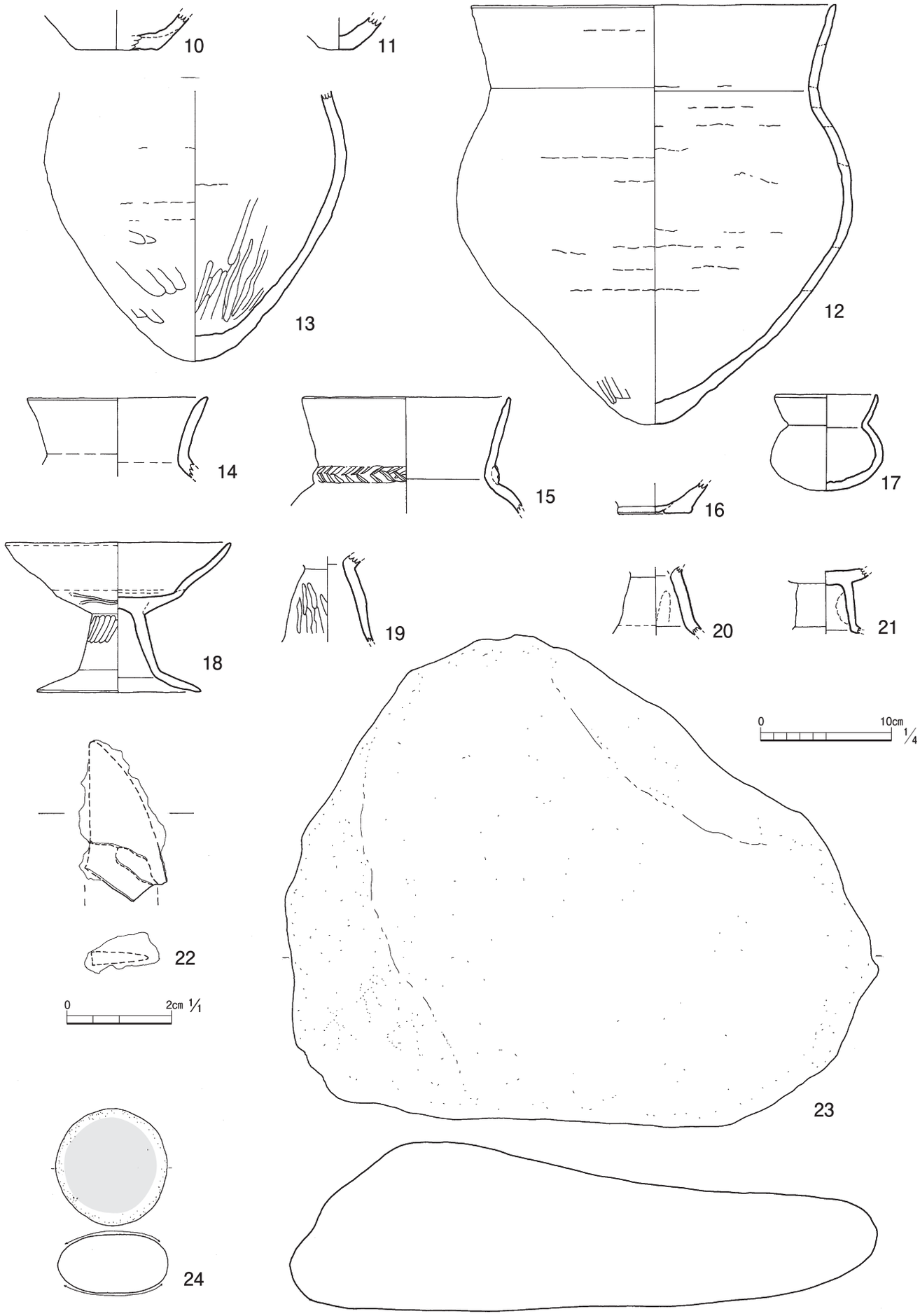
10～24はSA1から出土した遺物である。10～13は甕である。10、11はいずれも平底の底部である。12、13は球形胴の甕である。12は丸みを帯びた尖底で、底部に厚みを持たせたつくりである。底部を作成する際に型を使用したと思われる痕跡が見られる。口縁部から胴部にかけての稜線は甘く、口縁部は長く緩やかに外反する。13は底部中央にわずかに平坦面を有する丸底で、12同様底部に厚みを持たせたつくりである。外面には工具によるナデが施されている。12、13とも内外面に大量のススが付着しており、使用頻度が高かったことを思わせる。

14、15は壷の口縁部である。14はP2の埋土から出土した。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は内面が外面に向かって徐々に薄くなる。15は埋土から出土した。口縁部付け根に矢羽根状の刻目を施す突帯１条を持つ。16は壺の底部である。埋土から出土した。17は小型丸底壷である。北西側の壁帯溝から出土した。胴部最大径が口径を上回る横長の胴部を持ち、胴部長が口縁長を上回る。頸部のしまりが強く、口縁部は大きく外反し、口縁端部は面取りされている。底部は平底気味の丸底である。外面は口縁部から胴部中央部にかけて横方向のナデ調整が施されており、胴部上半部はミガキを意識したと思われるナデ調整である。内面は胴部下半部から底部にかけて指頭圧痕が見られる。

18～21は高坏である。18、20、21は埋土から、19は貼床から出土した。18は口縁部～脚裾部である。口縁部と受部の境に明瞭な段があり、そこから口縁部が大きく外反する。脚部は中央部がわずかに膨らむエンタシス状で、脚裾部は大きく屈曲して開く。口縁部にヨコナデ、脚柱部に工具によるナデが施されている。19、20は脚部でともにエンタシス状を呈する。19は外面に横方向と後斜方向のミガキが、内面に斜め方向のケズリが見られる。20は外面に縦位のミガキ痕跡が見られ、内面には指押さえが施されている。21は杯部～脚部である。他の高坏と比べ短脚で、直立気味である。また、脚裾部の屈曲が極めて顕著で、脚部の内面に受け部との接合時にできたと思われるへそのたるみが残る。

22は刀子の鋒である。埋土から出土した。先端部から刃部にかけてなだらかな曲線を描く比較的丁寧な研ぎ出しがなされている。本遺跡から出土した鉄器は22のみであった。

石器は２点出土した。23は中央部床面から出土した台石である。広い平面を有する亜角礫の尾鈴山酸性岩類である。24は磨石である。貼床から出土した。表裏に磨面、中央にアバタ状の敲打痕が認められる。



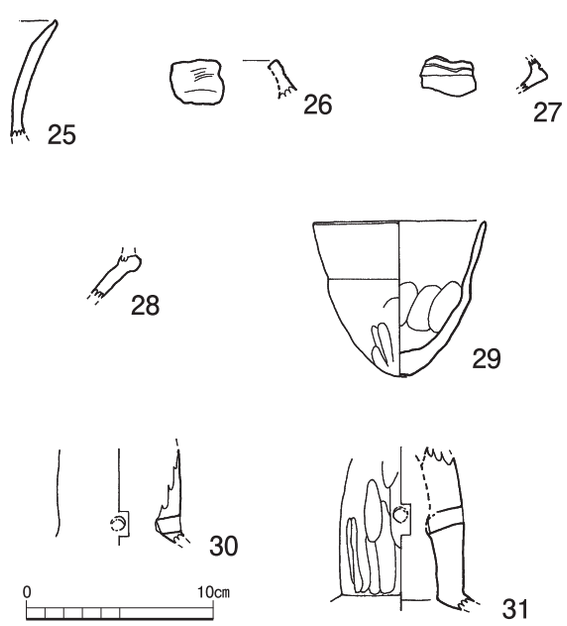
第28図　１号竪穴住居跡（SA1）出土遺物実測図（10～21…1/4　22…1/1　23・24…1/4）

２　SA1以外から出土した遺物（第28図　25～31）

25は甕の口縁部である。確認調査時に第４トレンチⅡ層から出土している。

26と27は複合口縁壷の口縁部である。26はＤ－４グリッドⅣ層から、27はＥ－４グリッドⅣ層から出土している。26は櫛描波状文、27は波状文１条が施される。28は壷の口縁部である。出土位置は不明である。内外面とも横方向のナデ調整が施される。29は小型丸底壷である。Ｆ－３グリッドⅣ層から出土している。口径が胴部最大径を上回り、わずかに平底部分を残す尖底を持つ。SA1の壁帯溝から出土した小型丸底壷（17）と比べ、長頸短胴で口縁部付け根の稜線も甘い。外面は口縁部にナデ調整、胴部に縦方向のミガキが、内面は斜位のナデ調整が施されており、17よりつくりが丁寧である。このような特徴から、29はSA1よりも古い時期ものであると考えられる。

30は高坏の脚部である。確認調査時に第４トレンチのⅡ層から出土している。エンタシス状を呈し、中央部のやや上に穿孔が開けられている。裾部は碗を返したような形状であると思われる。31は南区で表採された高坏の脚部である。脚裾部付近に四方から開けられた穿孔を持つ。



第29図　１号竪穴住居跡（SA1）以外から出土した遺物実測図（25～31…Ｓ＝1/4）

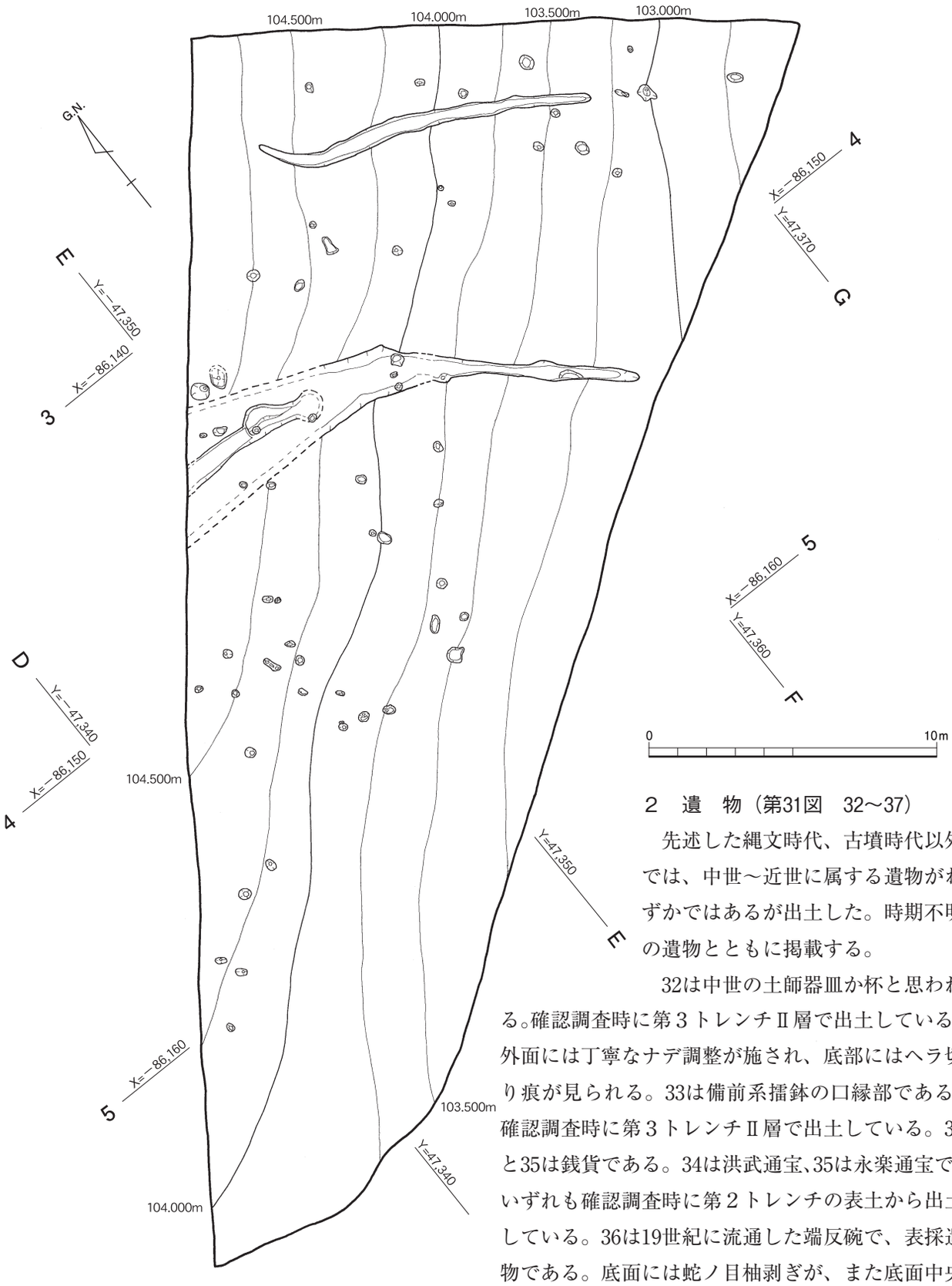
第６節　その他の時期の遺構と遺物

１　遺　構

溝２条（SE1､SE2）とピット約60基が検出された。

溝はいずれも北西からやや蛇行しながら南東に延びる。SE1はSA1の南西側をかすめるように延びており、東側に延びるにつれて幅を狭めながらSA1付近で途切れる。検出時の幅は50㎝～２ｍ、深さは最深部で約80㎝を測る。西側壁断面で幅約５ｍ、深さ約１ｍのなだらかな碗状の断面が確認されており、西側壁付近は局地的に深くなっている部分が見られる。埋土は褐色土をベースに暗褐色土を粒状に含む。底面で数基のピットが確認されたが、溝に伴うものではなく遺物も出土しなかったため、時期や性格等の詳細は不明である。SE2はSA1の約３ｍ北東側に位置し、方位はSE1とほぼ一致する。検出時の幅は１ｍ～50㎝、深さは40～10㎝と、SE1に比べ浅い。埋土はSE1よりやや暗めで、しまりが強く粒子が粗い。断面は碗状を呈するが、調査区の壁にSE2の埋土と思われる土層は確認できなかったため、当時の幅や深さは不明である。２条の溝の間隔は約９ｍで、ちょうどSA1を挟む格好で検出されたが、いずれの溝の埋土もSA1とは異なるためSA1とは時期差があるものと考えられる。遺物は、SE1・SE2とも土師器の小片がまばらに出土したのみであった。おそらく調査区外から溝によって運ばれたものと思われる。このことから、今回の調査対象から除外された調査区の西側にも集落が存在していたのではないかと推測される。

ピットは南区のほぼ全域に分布し、特に南半部西側で多く検出された。円形と楕円形が大半を占め、直径は約80㎝～10数㎝、深さは約60㎝～数㎝と様々であった。遺物が出土したピットはほとんどなく、柱痕跡も確認されなかった。規則的な配列も見られないことから時期や性格等の詳細は不明である。

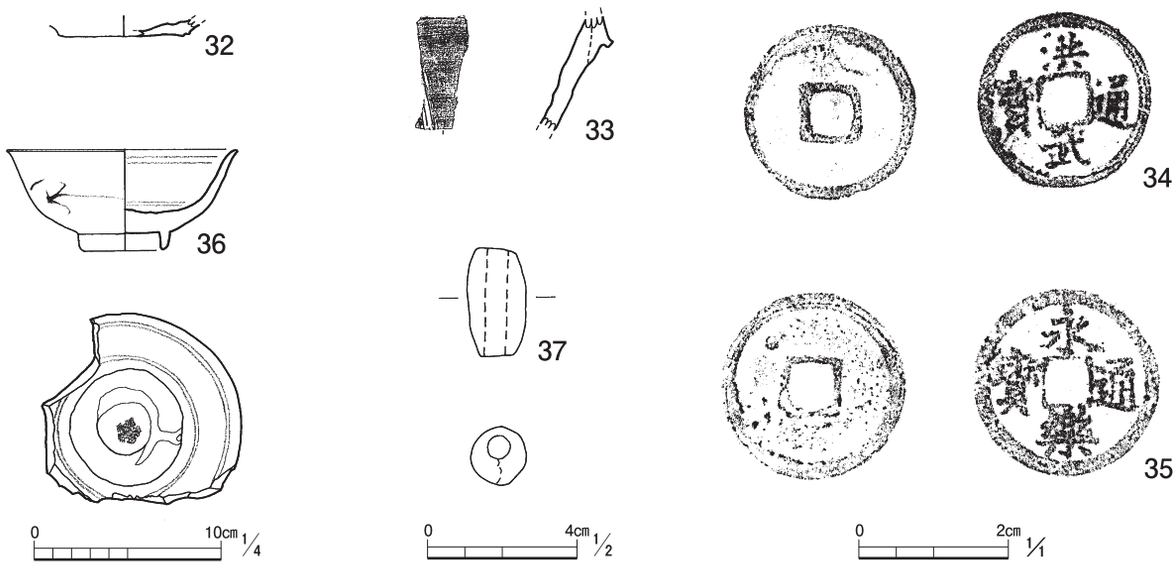


第30図　その他の時期の遺構分布図（S＝1/200）

2　遺　物（第31図　32～37）

先述した縄文時代、古墳時代以外では、中世～近世に属する遺物がわずかではあるが出土した。時期不明の遺物とともに掲載する。

32は中世の土師器皿か杯と思われる。確認調査時に第３トレンチⅡ層で出土している。外面には丁寧なナデ調整が施され、底部にはヘラ切り痕が見られる。33は備前系擂鉢の口縁部である。確認調査時に第３トレンチⅡ層で出土している。34と35は銭貨である。34は洪武通宝、35は永楽通宝で、いずれも確認調査時に第２トレンチの表土から出土している。36は19世紀に流通した端反碗で、表採遺物である。底面には蛇ノ目柚剥ぎが、また底面中央には五弁花のコンニャク印判が見られる19世紀に全国的に広く流通した碗である。37は土錘である。表採遺物で時期は不明である。孔径が比較的大きく、両端は面取りされている。



第31図　その他の時期及び時期不明の遺物実測図
（32・33・36…Ｓ＝1/4　34・35…Ｓ＝1/1　37…Ｓ＝1/2）

第７節　まとめ

本遺跡においては、古墳時代の竪穴住居跡１軒が確認された。また、縄文時代早期、古墳時代、中世、近世の遺物が出土している。以下、各時期についての概略をまとめ、調査報告及び概括としたい。

１　縄文時代早期

遺構は確認されなかったものの、包含層から押型文土器（第25図１～３）、条痕文土器（４）、剥片（５～７）、打製石斧（８）、石核（９）が出土している。また、集石遺構の構成礫であったと思われる焼礫を確認していることから、本遺跡周辺において縄文時代早期に集落が存在していたと推測される。隣接する登り口第１遺跡では同時期の炉穴が、また近隣の霧島遺跡では同時期の集石遺構が確認されていることも、その裏付けとなるであろう。

２　古墳時代

南区Ｖ層上面で竪穴住居跡（SA1）１軒が検出された。5.2m×5.2mの隅丸方形を呈し、主柱穴４基が確認された。また、住居内からは土坑２基が検出された。

遺物は、SA1とその周辺で土師器片が集中的に出土している。床面からは時期比定の要素となる遺物は出土しなかったが、埋土からは複数の甕、壷、高坏が、また壁帯溝の埋土からは完形の小型丸底壷（第28図17）が出土している。このうち小型丸底壷（第28図17）の特徴が今塩屋・松永編年[1]による３期（布留４式）に、また複数の高杯（18、19、20）が３～４期（布留４式～TK23）に相当することから、SA1は中期前半～後半の遺構であると考えられる。

【註】⑴今塩屋毅行　松永幸寿　2002「日向における古墳時代中～後期の土師器－宮崎平野を中心として－」『九州前方後円墳研究会第５回大会資料』

３　中世～近世

遺構は確認されなかったものの、中世に属する遺物としては土師器皿か杯（第31図32）、備前系擂鉢（33）、銭貨２点（34、35）が、近世に属する遺物としては端反碗（36）が出土したことから、中世～近世にかけても本遺跡周辺に集落が存在していたと推測される。

以上、縄文時代早期、古墳時代、その他の時期の遺構・遺物について述べてきた。確認された遺構は古墳時代中期前半～後半の竪穴住居跡（SA1）のみであったが、単独で存在していたとは考えにくく本調査区は集落の一部分である可能性が高い。斜面底部に位置するSA1周辺で流れ込みと思われる遺物が集中的に出土していることからも、調査対象から除外された調査区西側の牧草地付近に集落が存在していたと推測される。その意味からも、今回確認された遺構は本遺跡周辺の該期集落を考える上で重要な資料となり得るものである。

【参考文献】

・　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第43集『木脇遺跡』（古墳時代～中世編）　東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ　2001

・　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第48集『倉岡第２遺跡』　東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ　2001

・　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第90集『下那珂遺跡』　県総合農業試験場本場果樹園造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　2004

・　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第111集『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅴ』　平成16年度 2005

・　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第121集『市納上第１遺跡・市納上第４遺跡』　東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　2006

・　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第123集『天神本第２遺跡・大内原遺跡』　東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書28　2006

・　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第124集『西ノ別府遺跡』　東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書29　2006

・　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第125集『下耳切第３遺跡』（古墳時代～近・現代編）東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書30　2006

・　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第131集『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅵ』　平成17年度　2006

表16　縄文時代早期土器観察表

番号	出土地点	器種	部位	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
1	E−3/Ⅳ層	深鉢	胴部	−	−	−	斜め方向の山形押型文	ナデ 無文	良好	明褐色 (7.5YR5/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3㎜以下の黒光沢粒、5㎜以下の灰白粒、3㎜以下の乳白粒をそれぞれ少し含む	上部に輪積み部分が欠落した跡あり
2	F−3/Ⅳ層	深鉢	胴部	−	−	−	斜め方向の粗大な楕円押型文	ナデ 無文	良好	赤褐 (5YR4/6)	にぶい赤褐 (5YR4/4)	5㎜以下の赤褐色の粒をわずかに、2㎜以下の黒光沢粒をごくわずかに含む	
3	F−3/Ⅳ層	深鉢	口縁部	−	−	−	縦方向の粗大な楕円押型文	横方向の楕円押型文	良好	赤褐 (5YR4/6)	赤褐 (5YR4/6)	1㎜以下の茶褐色粒をごく少量含む	
4	不明	口縁部	胴部	−	−	−	横方向の貝殻腹縁による痕文	風化が著しい	良好	にぶい赤褐 (5YR4/4)	赤褐 (5YR4/6)	4㎜以下の茶褐色粒と1㎜以下の乳白色粒を少し含む	

表17　縄文時代早期石器観察表

番号	出土地点	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
5	E−4/Ⅳ層	二次加工ある剥片	ホルンフェルス	3.8	4.5	1.2	21.0	背面に礫面を残す。打面側を大きく欠損する。剥片末端に粗い加工が入る。
6	1T/Ⅳ層	微細剥離ある剥片	頁岩	5.6	4.5	0.9	16.1	末端の広がる剥片。両側縁に微細剥離がある。
7	F−3/Ⅳ層	剥片	チャート	2.4	2.0	0.5	1.7	不定形剥片。
8	1T/Ⅳ層	打製石斧	ホルンフェルス	9.1	3.9	1.1	47.0	風化が著しく剥離は鮮明でない。刃部側を大きく欠損する。
9	1T/Ⅳ層	石核	ホルンフェルス	6.9	6.5	2.0	100.2	分割礫に対し、分割面に向かって求心状に剥離する。目的剥片は小形幅広剥片。

表18　SA1出土土器観察表

番号	出土地点	器種	器種部位	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
10	貼床	甕	底部	−	6.2	−	斜め方向のナデ	斜め方向のナデ	良好	にぶい橙 (7.5YR7/3)	灰黄褐 (10YR6/2)	3㎜以下の浅黄粒、2㎜以下の明赤褐粒を含む	
11	埋土	甕	底部	−	2.5	−	斜め方向のナデ	斜め方向のナデ	良好	橙 (5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	3㎜以下の灰白粒、黒光沢粒・透明光沢粒をわずかに含む	
12	SC1・2 埋土	球形胴甕	頸部〜底部	−	−	−	斜め方向の工具によるナデ	斜め方向の工具によるナデ	良好	赤褐 (5YR4/6)	明赤褐 (5YR5/6)	4㎜以下の灰黄の粒をごくわずかと、2.5㎜以下の乳白粒をわずかに含む	底部作成時に型を使用した痕跡あり ススが大量に付着
13	SC1・2 埋土	球形胴甕	口縁〜底部	−	−	−	横・縦・斜め方向の工具によるナデ	横・縦・斜め方向の工具によるナデ	良好	赤褐 (5YR4/6)	明赤褐 (5YR5/6)	4㎜以下の灰黄の粒をごくわずかと、2.5㎜以下の乳白粒をわずかに含む	ススが大量に付着
14	P2 埋土	壷	口縁〜頸部	13.8	−	−	ヨコナデ	ヨコナデ	良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/3)	1.5㎜以下の明褐色、褐灰色の粒を少し含む	主柱穴（P2）から出土
15	埋土	壷	口縁〜頸部	15.6	−	−	横・斜め方向のナデ	横・斜め方向のナデ	良	浅黄橙 (10YR8/4)	褐灰 (10YR5/1)	3.5㎜以下の赤褐、3㎜以下の灰白、1.5㎜以下の褐の粒を含む	頸部に矢羽根状のきざみ突帯1条を持つ
16	埋土	壷	底部	−	5.7	−	上から下へ工具によるナデ、止めあり	斜め方向のナデ	良好	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2〜3㎜の赤褐、2㎜以下の灰白、1.5㎜以下の褐の粒を含む。15の胎土に似る	底面に輪積み痕あり
17	壁帯溝	小型丸底壷	完形	7.5	1.0	7.3	指によるヨコナデ	指によるヨコナデ、底部は指頭圧痕	良好	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1㎜前後の赤褐色の粒点。1.5㎜前後の黒光沢粒をわずかに含む	
18	埋土	高坏	口縁〜脚裾部	17.2	12.5	11.4	口縁部はヨコナデ 脚柱部は工具によるナデ、上部一部ミガキ	横・縦・斜め方向のミガキ	良	浅黄橙 (10YR8/4)	橙 (5YR7/6)	3㎜以下の暗赤褐色粒、にぶい赤褐色粒、赤灰色粒を含む	
19	貼床	高坏	脚部	−	−	−	横方向のミガキ後斜方向のミガキ	斜め方向のケズリ	良好	にぶい褐 (7.5YR5/4)	橙 (5YR6/6)	2㎜以下の黒色粒及び黒褐色粒を少し、3㎜以下の明赤褐色粒をごくわずかに含む	
20	埋土	高坏	脚部	−	−	−	縦方向にミガキの痕跡あり	縦方向の指ナデ	良好	橙 (7.5R6/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2㎜以下の茶粒と灰褐粒をわずかに、1㎜以下の光沢粒と白色透明粒をごくわずかに含む	脚部の内面に受け部との接合時にできたへそのたるみあり
21	埋土	高坏	杯部〜脚部	−	−	−	風化が著しく調整不明	縦方向の指ナデ	良好	橙 (5YR6/6)	明黄褐 (10YR7/6)	2.5㎜以下の褐灰の粒をごくわずかに、1㎜以下の茶褐色・灰色の粒を少し含む	

表19　SA1出土鉄器観察表

番号	出土地点	器種	器種部位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量 (cm)	備　考
22	埋土	刀子	鋒	2.6	1.4	0.2	2.9	

表20　SA1出土石器観察表

番号	出土地点	器　種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(kg)	備　考
23	床面	台石	尾鈴山酸性岩類	37.5	45.0	12.4	28.4	広い平面のある亜角礫。使用痕は明確でない。
24	貼床	磨石	尾鈴山酸性岩類	9.0	8.5	4.6	0.48	表裏面に磨面＋中央にアバタ状の敲打痕あり。完形。

表21　SA1以外から出土した土器観察表

番号	出土地点	器種	器種部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色　調		胎土の特徴	備　考
				口径	底径	器高	外　面	内　面		外　面	内　面		
25	4T/Ⅱ層	甕	口縁～頸部	－	－	－	横方向のナデ	横方向のナデ	良	にぶい浅黄橙(10YR6/4)	にぶい浅黄橙(10YR7/4)	３㎜以下のにぶい褐色の粒と1.5㎜以下の明褐粒をわずかに含む	外面にススト付着
26	D-4/Ⅳ層	壷	複合口縁	－	－	－	櫛描波状文	ナデ やや風化が目立つ	良好	淡黄(2.5YR8/3)	浅黄(2.5YR7/4)	４㎜以下の灰白、黄褐色の粒をわずかに含む １㎜以下の黒光沢粒と透明の光沢粒をわずかに含む	櫛描波状文
27	E-4/Ⅳ層	壷	複合口縁	－	－	－	波状文１条	風化が著しい	良好	にぶい黄橙(10YR6/4)	黒褐(10YR3/1)	1.5㎜以下の光沢粒と１㎜以下の黄褐粒をわずかに含む。	波状文１条
28	不明	壷	口縁	－	－	－	横方向のナデ	横方向のナデ	良好	にぶい橙(7.5YR6/4)	褐灰(10YR6/1)	１㎜以下の乳白色粒と１㎜以下の黒光沢粒を多く含む	
29	F-3/Ⅳ層	小型丸底壷	口縁部～底部	9.4	1.4	8.3	丁寧なナデ 縦方向のミガキ	斜め方向のナデ	良好	浅黄(2.5YR7/3) 底部に暗灰N3/	浅黄(2.5YR6/4) 底部に暗灰N3/	1.5㎜以下の赤褐色の粒、４㎜前後の粒を少量含む ３㎜以下の長さと１㎜以下の光る粒を微量含む	内外面に黒斑あり 時期はSA1壁帯溝から出土した小型丸底壷(17)より古い
30	4T/Ⅱ層	高坏	脚部	－	－	－	ナデ 裾部にごく近い箇所に四方から透かしあり	横方向のナデ	良	にぶい黄橙(10YR6/3)	浅黄橙(10YR8/3)		四方穿孔
31	南区表採	高坏	脚部	－	－	－	縦方向ナデ 脚柱中央部に四方から透かしあり	横方向のナデ	良	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)		四方穿孔

表22　中世～近世土器観察表

番号	出土地点	器種	器種部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色　調		胎土の特徴	備　考
				口径	底径	器高	外　面	内　面		外　面	内　面		
32	3T/Ⅱ層	杯または皿	不明	7.0	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	橙(5YR7/6)	橙(5YR6/6)	白色系と赤色系の粘土を使用	確認調査時に出土 底部にヘラ切り痕あり

表23　中世～近世陶磁器観察表

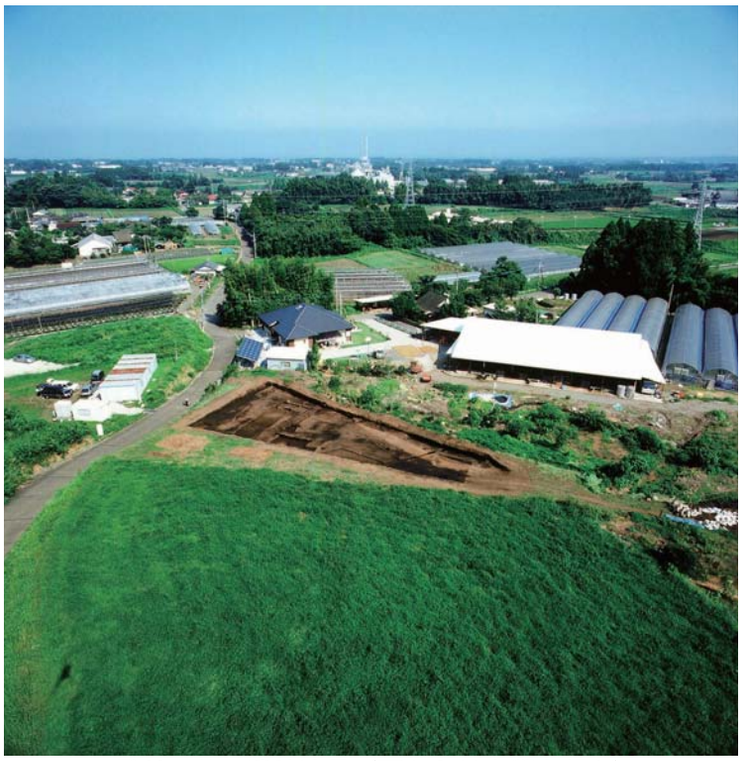
番号	出土地点	器種	器種部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色　調		胎土の特徴	備　考
				口径	底径	器高	外　面	内　面		外　面	内　面		
33	3T/Ⅱ層	備前系擂鉢	口縁部	－	－	－	ヨコナデ	擂目が１条確認できるものの単位までは確認不能、ヨコナデ	良好	赤灰(2.5YR4/1)	灰(N4/)	１㎜以下の赤橙粒・灰白粒を含む。砂粒が多く、山土を使用している。	確認調査時に出土
36	北区表採	端反碗	口縁～底部	12.1	4.3	5.4	施釉	施釉 底面に蛇の目釉剥ぎ痕あり	良好	明オリーブ灰(2.5GY7/1)	灰白(5GY8/1)	精良	底部にススト付着

表24　銭貨観察表

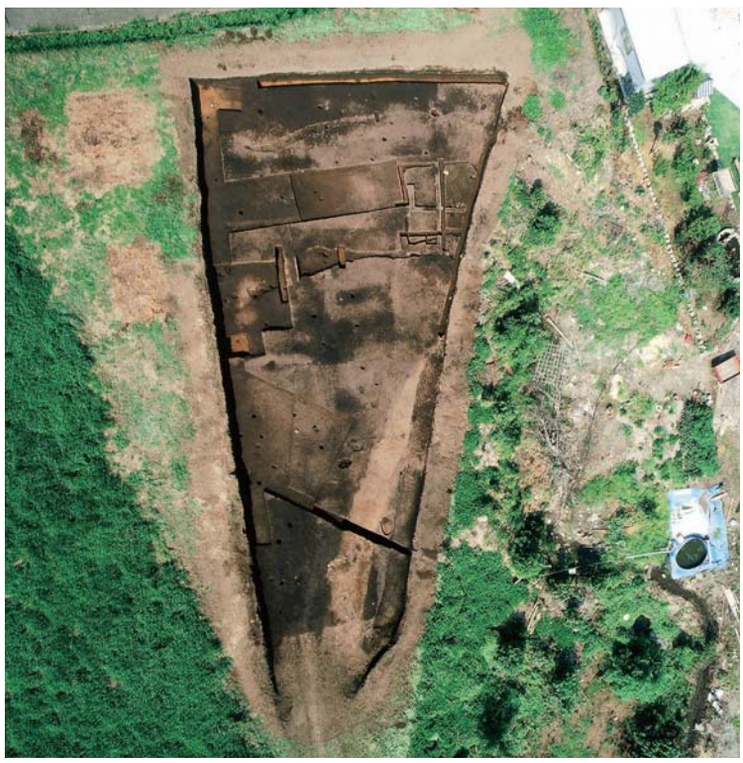
番号	名　称	出土位置／層位	銭径 (cm)	銭孔径(cm)	量目 (g)	国名年号	初鋳年号	備　考
34	洪武通宝	２トレンチ/Ⅰ層	2.3	0.6	3.8	明	1368	錆　着 背文なし
35	永楽通宝	２トレンチ/Ⅰ層	2.5	0.6	3.1	明	1408	

表25　時期不明土器観察表

番号	出土地点	法量 (cm)					備　考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	穿孔径(cm)	重量 (g)	
37	南区表採	2.9	1.5	1.5	0.6	5.6	時期不明



登り口第２遺跡遠景（西から日向灘を望む）



南　区　全　景

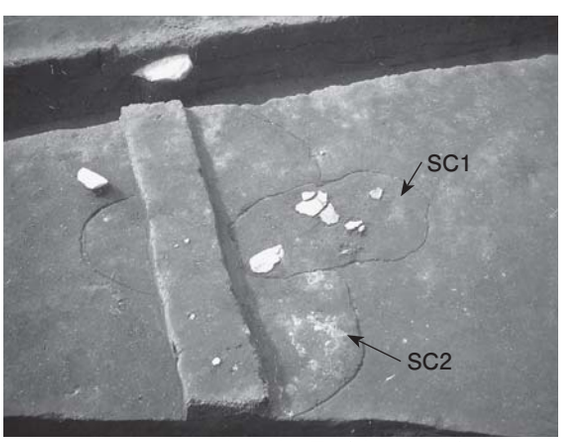
図版６

SA1貼床面検出状況（北西から）

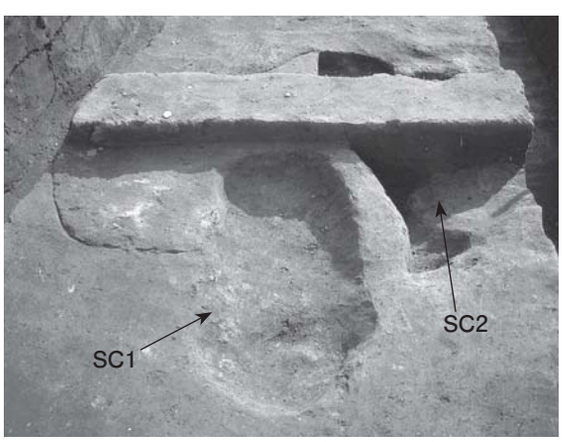
SA1完掘状況

作業風景（SA1埋土掘削）

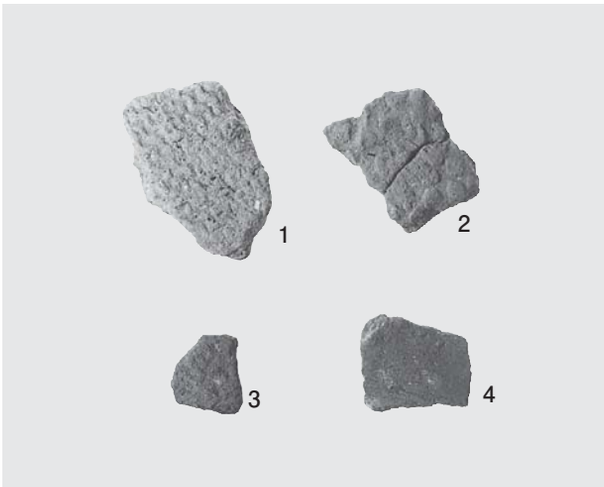
遺物出土状況
（SA1壁帯溝から出土した小型丸底壺）



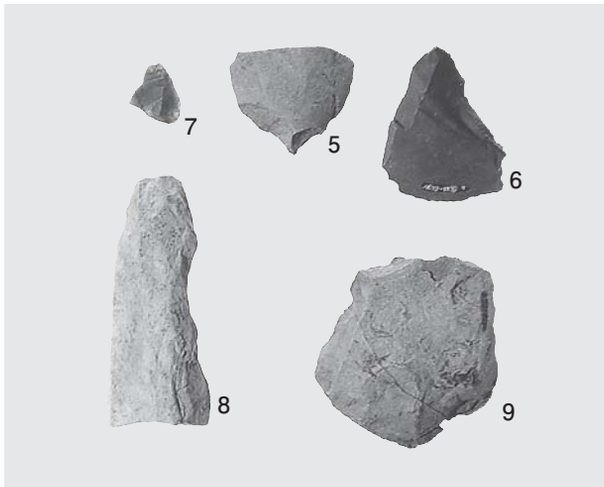
SC1・SC2検出状況（南東から）



SC1・SC2半截（北東から）



縄文時代早期土器



縄文時代早期石器

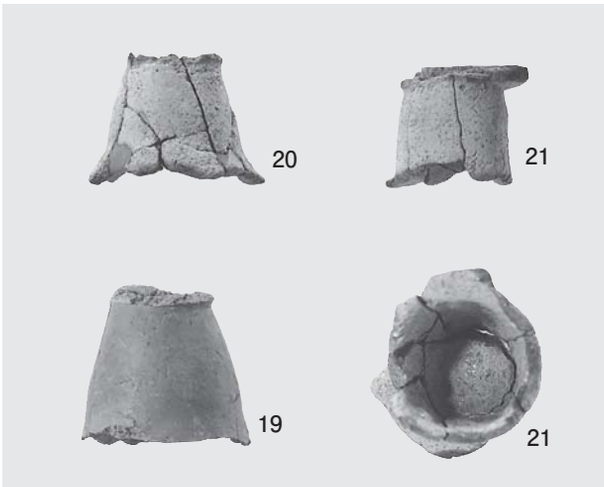
SA1出土甕（1）

SA1出土甕（2）

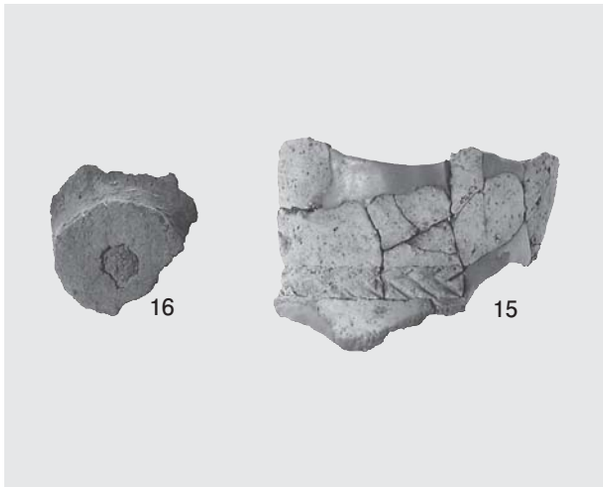
SA1出土小型丸底壷

SA1出土高杯

図版８



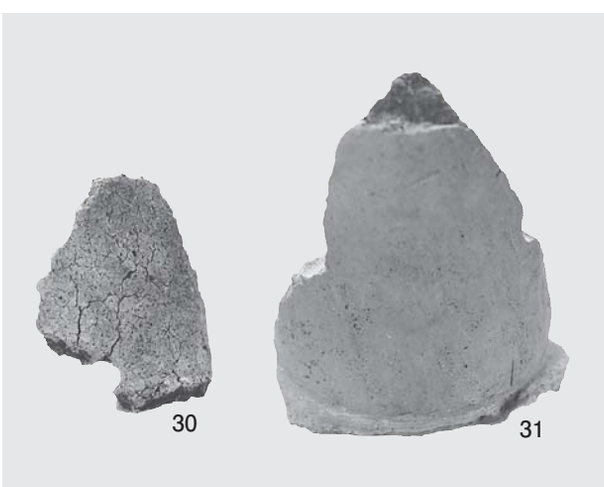
SA1出土高杯



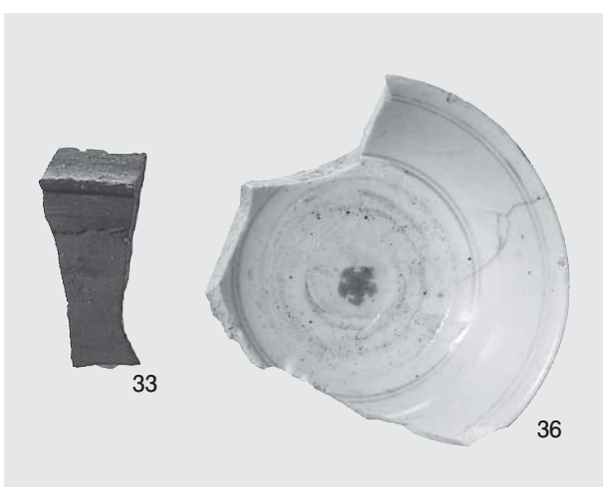
SA1出土壷

SA1出土台石

Ⅳ層出土小型丸底壷



高杯（30…第４トレンチ出土）
（31…表採）



中世～近世陶磁器
（33…備前系擂鉢：第３トレンチ出土）
（36…端反碗：表採）

報告書抄録

ふ り が な	のぼりくちだいいちいせき　　のぼりくちだいにいせき
書　　名	登り口第１遺跡　　登り口第２遺跡
副　書　名	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	38
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第141集
執筆・編集担当者	白地浩・小川太志
発 行 機 関	宮崎県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂4019番地　TEL 0985－36－1171
発行年月日	2007年１月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所　在　地	コ　ー　ド 市町村	 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
登り口第１遺跡（のぼりくちだいいちいせき）	宮崎県児湯郡（みやざきけんこゆぐん）川南町（かわみなみちょう）大字川南（おおあざかわみなみ）字宮田（あざみやた）	45405		32° 13′ 49″ 付近	131° 30′ 19″ 付近	2005. 7. 1 ～ 2005. 9. 2	1,130㎡	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査
登り口第２遺跡（のぼりくちだいにいせき）	宮崎県児湯郡（みやざきけんこゆぐん）川南町（かわみなみちょう）大字川南（おおあざかわみなみ）字宮田（あざみやた）・山ノ口（やまのくち）	45405		32° 13′ 32″ 付近	131° 30′ 00″ 付近	2005. 7 .14 ～ 2005. 9. 2	3,800㎡	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
登り口第１遺跡	散布地	旧石器時代 縄文時代	炉穴９基	剥片尖頭器、細石刃 貝殻条痕文土器、石鏃、 スクレイパー、剥片	
登り口第２遺跡	集落	縄文時代 古墳時代 中世	竪穴住居跡１軒	押型文土器、貝殻条痕文土器 剥片、打製石斧 土師器 台石、磨石　刀子 土師器、陶磁器	

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第141集

登り口第１遺跡
登り口第２遺跡

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書38
2007年１月31日

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL.0985 (36) 1171　FAX.0985 (72) 0660

印　刷　有限会社　いろは企画
〒889-1603　宮崎県宮崎郡清武町正手３丁目19－2
TEL.0985 (85) 5889　FAX.0985 (85) 5889